
COBALT-SERIES
鬱金の暁闇6
うこんのぎょうあん
破妖の剣6
前田珠子
集英社

COBALT-SERIES

破妖の剣　6

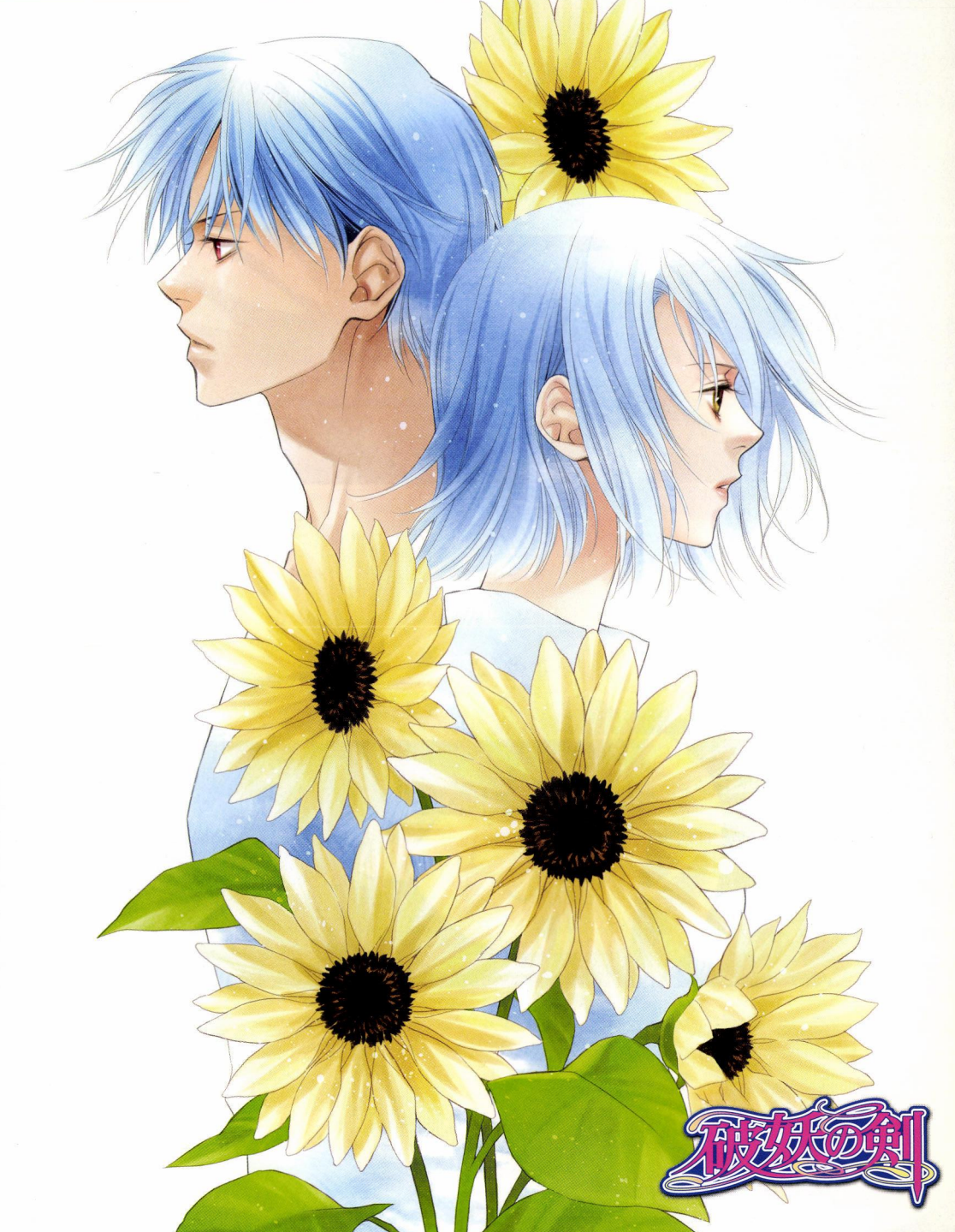
鬱金の暁闇6

前田珠子



集英社


破妖の剣


破妖の剣



COBALT-SERIES

破妖の剣　6

鬱金の暁闇 6

前田珠子

集英社

目次

鬱金の暁闇 6

第二十章 影を奪われた街 …… 13

第二十一章 揺らぎ …… 59

幕間 …… 107

呪縛と代償 …… 139

あとがき …… 208

破妖の剣　鬱金の暁闇

これまでのあらすじ

創造神ガンダルの生み出した世界、ガンダル・アルス。人々は複数の命と強大な力を持つ魔性たちに脅かされていた。彼らに対抗できる力を持つ人間たち――封魔の力を持つ捕縛師、滅魔の剣に選ばれた破妖剣士、魔性を味方に引き入れる力を持つ魅縛師――が「浮城」に集い、魔性との闘いに尽力していた。

ラエスリールは、金の妖主を父に、かつて城長だった魅縛師を母に持つ少女。浮城屈指の破妖刀「紅蓮姫」に選ばれた彼女は破妖剣士として著しい活躍をするが、闇主という謎の魔性に愛され翻弄され、魔性として生きることを選んだ弟・乱華には歪んだ執着心で追いかけられ、彼女にはなにかと切れぬ絆や因縁がつきまとうのだった。

翡翠の妖主の守護者の罠によって浮城を追放されたラエスリールは、数々の死闘を繰り広げ、この世に五人しかいない妖主の一人、翡翠の妖主を滅ぼす。父の配下の魔性に命を狙われ、浮城で編成された紅蓮姫奪還チームに追われ、行き場のなくなったラエスリールは、闇主とともに逃亡していた。しかし突然現れた父によって喉元に手をかけられ、仮死状態に。その肉体は浮城最奥の氷室に紅蓮姫の「鞘」として収められる。抜き身の紅蓮姫の新しい使い手として選ばれたのは、紅蓮姫奪還チームの一人で、紅蓮姫のかつての恋人の生まれ変わりであるアーゼンターラ。しかし自らの苦悩に振り回され、思うように闘うことができない。そんななか、密かに誕生していた第六の妖主（雛の君）が次々に妖主たちを配下に従え、ある目論見を現実のものにしようとしていた。一方で、死んだはずのラスの母が遂にラスを目覚めさせて!?

妖主たち

金 **王蜜の妖主**
ラスの父。最愛の妻を亡くして以来、姿を消す。

赤 **柘榴の妖主**
クセ者ぞろいの妖主たちの中でもかなりの強者。

緑 **翡翠の妖主**
夢に通じる力を持つ。ラスによって滅ぼされる。

第六の妖主（雛の君）
緑の妖主の死により現れた新しい妖主なのだが…。

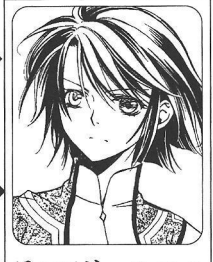
白 **白焔の妖主（白煉）**
熱に通じる力を持つ。一時期人間だった。



紫 **紫紺の妖主（藍絲）**
糸に通じる力を持つ。白煉に執着している。

夫婦？

娘



ラエスリール（ラス）
破妖刀「紅蓮姫」の使い手。半人半妖で魅了眼を持つ。不器用な性格。

息子



アーゼンターラ（ターラ）
現在「紅蓮姫」の使い手だが、悩みも深い。

リメラトーン（トーン）
妖貴の大火で生き別れになっていたターラの弟。

双子

オルグァン
破妖剣士。「氷結斬」と呼ばれる破妖の斧を使う。



スラヴィエーラ
破妖刀「夢晶結」を操る、破妖剣士の少女。

マイダード
捕縛師。自らの刺青に魔性の命を封じ込める。

懐いている



邪羅（ザハト）
妖主夫婦の息子で、ラスを姉のように慕う。

紅蓮姫奪還チーム

破妖の剣 人物相関図

チェリク(リーク)
浮城の元城長で、伝説的魅縛師だが妖主と結婚。

親友

夫婦

息子



マンスラム
浮城の前城長。ラスを養女として育てた。



濫花(リー)
ラスが拾った半人半妖の少年。乱華に酷似。



乱華(リーダイル)
ラスの弟。魔性として生きる超弩級のシスコン。

懐いている

アーヴィヌス
現在の城長。かつては捕縛師として活躍した。



闇主(千禍)
ラスの護り手。壮絶な美しさと極悪非道な性格は魔性のなかでも群を抜く。

護り手



セスラン
捕縛師。人あたりはいいが、実は食わせ者!?



彩糸
リーヴシェランを溺愛する美しく聡明な護り手。



サティン
面倒見のよい捕縛師。ラスの姉のような存在。

護り手



リーヴシェラン
琴の音を用いる魅縛師で、気の強い美少女。

いいかんじ?

浮城における ラスの理解者たち

イラスト／小島　榊

第二十章　影を奪われた街

1

その朝――。

サリアイアは小鳥のさえずりとカーテンの隙間から射し込む朝日によって目を覚ました。

射し込む光の強さにぎょっとして飛び起きたのは、今日が特別な日であり、寝坊など言語道断という状況だったからである。

「うそ!?　もう、こんなに明るい!?」

失敗した、とサリアイアは思わず頭を抱え込んだ。

今日は大事な……大切な日なのだ。

予定では日が昇るとほぼ同時に起床して、大切な一日を最高のものにするための準備を手伝うはずだったのだ……幼い頃から姉とも慕ってきた従姉の結婚式がある今日は。

招待客として招かれてはいたが、サリアイアは客ではなく身内として従姉の結婚式を支える一助となりたいと申し出、熱心に訴えた結果、それは聞き届けられた――はずだった。

一番頑なに反対したのは花嫁となる従姉だった。

『わたしはただ祝ってほしくてあなたを呼んだのよ!?　手伝わせるつもりなんてないわ！』

けれどサリアイアも負けてはいなかった。

『祝わせてもらうわよ、勿論！　そのために手伝いたいって言ってるんじゃない！　それこそ身内の特権というものでしょう!?　わたしはリーシャのこと、従姉だけど実の姉さんも同じだって思ってる！　妹が姉さんの結婚式の準備を手伝うのは当たり前のことでしょう!?　それとも、そんな風に思っているのはわたしだけで、リーシャは違うの!?　だからわたしをただのお客さんとして扱うの？』

卑怯な言い方だったという自覚はある。

けれど、サリアイアは大好きな従姉の新たな旅立ちの日を、ただの客として迎えたくはなかったのだ。

結局――最後は従姉も折れてくれた。

披露宴にはちゃんと招待客として出席することを条件に、サリアイアが式の準備を手伝うことを認めてくれたのだ。

式の前日である昨夜は、式に出席してくれたひとに配る引き出物の数が足りないことに気づいて大わらわだった。

何とか無事に済ませるための帳尻合わせができたのは、空の色が白みかかって来たころだ。

少しでもいいから寝なさい——と、サリアイアを寝室に追いやったのは伯母だった。

心配しなくても、朝には必ず起こすから——そう言って。

その言葉に頷いたのは、本番の式の途中で居眠りしてはならないと思ったからだ。準備の手伝いで張り切ったあげく、花嫁の親族が醜態を晒すわけにはいかないではないか。

だから、伯母たちを残してひとり、用意された寝室に下がったのだけれど——。

「伯母さんったら、必ず起こしてくれるって言ったのに！　……こんなに明るくなるまで目が醒めないわたしもわたしだけどっ！」

慌ただしく服を着替えながら、サリアイアは自分の声だけが妙に響くような気がして首を傾げた。

階下から何の音も聞こえないのだ。昼前に始まる式のために、手伝いに来てくれる近所のひとを交えて台所は今頃大忙しのはずなのだ。

何かがおかしい——そう思うより先に、サリアイアは最悪の事態を想像してしまった。

まさか、皆もう式に出かけてしまったんじゃ……。

さすがにそれはあり得ないはずだ。いくら自分が寝穢く眠りこんでいたのだとしても、従姉の門出である今日、起こされても目覚めないだなどということは。いくらなんでも、起こされ

た記憶ぐらいは残っているはずだ。
けれど、ならばどうして――こんなにも辺りが静まり返っているのか。
胸の奥に、ちりちりした不安が生まれる。
だが、サリアイアはそれに気づかないふりをして、階下へと急いだ。
手伝うことはもう残っていないかもしれないが――それなら従姉の準備を手伝おう……そう思って。
そして、彼女は階下で目にした信じられない光景に目を瞠った。
昨夜自分が部屋に移る前と大差ない状況で――伯母夫婦が床に倒れていたのだ。
「伯父さん!?　伯母さんまで！」
すぐさま駆け寄り、呼びかけるがふたりともぴくりとも動かない。
「せっかくの日に、なんてこと！　早くお医者様を……ああ、伯父さんも伯母さんもベッドに運んだほうがいいのかしら!?　それとも、動かさないほうがいいのかしら……とにかくまずはお医者様を呼ぶとして……」
混乱した頭で、サリアイアは必死にやるべきことを考えた。
「お医者様のお家はどこかしら……そうだわ、このことをリーシャに知らせないと！　それで場所をリーシャから教えてもらって……」

ああ、本当にこの晴れの日になんてこと――。

ため息を堪えながら、サリアイアは従姉の寝室に向かった――この時までは、彼女は事態の異常さ、深刻さをまだ充分に認識できていなかったのだ。

心臓が凍りつくような恐怖を覚えたのは、従姉の寝室の扉を開け、花嫁となる女性が未だ寝台に横たわっている姿を目にした時だ。

「リーシャ……？」

眠っている？

「リーシャ……」

ぴくりとも動かずに――？

「リ……」

恐ろしい予感に、サリアイアは無意識にかぶりを振った。

その時視界に窓が入らなければ、そのまま立ち尽くしてしまったかもしれない。

いいえ、いいえ、いいえ！

伯父さんと伯母さんが倒れてて……これ以上の不安なんてない。これ以上に悪いことが重なるなんて、そんなことがあるはずがない！

サリアイアは自分に言い聞かせながら、従姉の部屋に足を踏み入れた。

「リーシャ！　起きて！　大変なんだから！」
けれど、向かった先は窓だ。
カーテンを力一杯開く。
眩しい——そう言って、従姉が声を上げてくれるのを期待して。
けれど、サリアイアの期待も空しく従姉は声一つ洩らしてはくれなかった。
「リーシャ！」
堪らなくなって、寝台に駆け寄った彼女は、従姉の胸が上下していることに一応の安堵を覚えると同時に、その息のか細さにぞっとした。
そういえば、と思い出す。
伯父も伯母も、同じように息が細かった、と。
全身から力が抜けていく——足下が突然崩れ落ちて、底の見えない奈落におちていくような錯覚を覚えながら、サリアイアは必死に自分を支えた。
伯父も伯母も従姉も——意識を失い倒れてしまった今、この家で動けるのは自分しかいないのだ。呆然として立ちすくんでいる場合ではない！
「誰か……とにかく誰か、呼ばなくっちゃ！　それでお医者さまのお家を教えてもら……うーん、呼んでもらって……」

がんがんと耳鳴りがする。

頭を何かで絶えず殴られているような鈍痛が止まらない。

それでも、動けるのは——動くのは自分しかいないのだからと、サリアイアはふらつく足取りで玄関に向かい扉を開けた。

隣の家まで、ほんの僅かな距離しかない。しかしこの時の彼女には、それがどこまでも終わらない道に思えてならなかった——否、彼女にとって、それは確かに終わりのない道だったのだ、現実として、彼女が隣家に辿り着くことはなかったのだから。

「あ……」

道の真ん中に、倒れた人影を認めた時、サリアイアはもう駄目だ、と思った。

必死に自分を奮い立たせてきたけれど、これ以上は無理だ、と。

「また……」

そうして、気づきたくもなかったことに、気づく。

静かなのは——伯母たちの家だけではなかった。閑静な住宅街だから街中より静かなのは当たり前なのだが、今日のこの静けさは不気味なほどだ。

「なにが……起こったの……？」

泣きそうになりながら、サリアイアはのろのろと倒れた人影に近づきかけ——。

そして……そうして、あることに気づいた瞬間、へなへなとその場に座り込んでしまった。
周囲は朝の光に満たされている。当然、木々や建物、そして自分の影が整備された石畳の上に落ちている。
なのに――。
家の中ではわからなかった。あって当たり前のものがないだなんて、どうして考えられるだろう。けれど。
ああ、とサリアイアは両手で顔を覆いながら呻いた。
確信があった。
きっと伯母たちにも同じことが起こっているのだと。
今度こそ、彼女は恐怖に雁字搦めに囚われた。逃れる術はなかった。

路上に倒れ伏した男性――そのひとに、影はなかった。

※

ガンダルース大陸中心に広がる白砂原――そのさらに中心に位置する浮城の長の執務室では、その部屋の主の声のみが響いていた。

「影を失い意識を失ったのはマグァーラ帝国カーヴィアの全住人――全住人だ。客として街を訪れていた者たちには何ら異常がなく、彼らによってこの事態は隣町に知らされた。十万に及ぶ街の住人全員が異常な状態に陥ったこと、住民でない人間には被害が及んでいないことから考えても、術をかけた相手は相当な力を持つ者だとマグァーラは判断した」

城長アーヴィヌスの前には、四人の男女が立っている。

ここ一年ほど、チームを組ませて依頼先へ派遣することが多くなった浮城だが、この四人はその先駆けとなった者たちだった。

「我々の見解も同じだ。これはかなりの上級魔性でなければ起こし得ない事態だ。まず間違いなく上級魔性でも特に力ある者の仕業に違いない」

それは、妖貴の中でも飛び抜けて強大な者か、あるいは――それ以上の存在が係わっていることを意味していた。

魔性の王――妖主の側近クラスの妖貴か、それとも妖主本人による災禍か。

どちらにしても、そんな化け物を相手取り、確実な勝利をもたらせる者など浮城にも存在しない。しかし、被害は甚大すぎる――しかも大国マグァーラからの依頼となれば、浮城として

は引き受けないわけにはいかない。
アーヴィヌスの顔は暗く、声はどこまでも低かった。
それはそうだろう――彼はこれから、限りなく勝算の薄い戦地へ、配下四人を送りこまなければならないのだから。
苦悩を隠しきれぬ様子で、城長である男性はゆっくりと報告書から顔を上げ、呼び出した四人に目を向けた。
三人もの破妖剣士とひとりの捕縛師からなるチームの面々を、彼は苦行に耐えるかのような眼差しで見つめたあとに、告げた。
「スラヴィエーラ、オルグァン、マイダード、そしてアーゼンターラに命じる。マグァーラ第三の都市カーヴィアの全住民を、魔性の脅威を取り除いた上で救出せよ。この件に関して拒絶は認められない。特にアーゼンターラ、君は紅蓮姫の使い手として、皇帝シスアーナ一世から必ず派遣するよう名指しされている――」
アーヴィヌスの声と同時に、室内にぎり、と歯を噛みしめる音が響いたのは、いったい誰から発せられたものなのか――。
「城長！」
甲高い少女の声が、室内に響き渡ったのはその少しあと――。

しかしアーヴィヌスが言を翻すことはなかった。

「アーゼンターラ。君が自身の事情で申請した依頼のことを忘れたわけではない。その思いもわからなくはない……だが、この浮城を預かる者として、君に今回の事件より身内の事情を優先させるわけにはいかない。数を理由にするつもりはない。だが、アーゼンターラ、君の弟は君が十万もの命を見捨てて救いに行ったとして、そのことを素直に喜べると思うかね？　たとえ、そのときは君に感謝しようとも、後にこのことを知れば後悔に身を苛まれるのではないかね？」

噛んで含めるように言葉を連ねるアーヴィヌスを遮ったのはそれまで沈黙を守っていた、最年長の破妖剣士だった。

「城長、そういう言い方は捉えようによっては脅迫に聞こえる……と言うか、そうとしか聞こえない。どのみち最大級の支援国であるマグァーラの皇帝自らの依頼を、浮城が断れるはずもない。不可避の決定なのだから諦めろと言ってくれたほうが、ターラとしてもまだ楽だろう。自分も心苦しいが仕方ないのだ、わかってくれと……それでは命の数の違いを盾に言っているようにも聞こえる。……まあ、気のせいだとは思うが」

その痛烈な皮肉と批判は、常のオルグァンを知る者からは想像もできないものだった。

それだけ彼もまた怒っていたのだろう。

「オルグァン……お前……！」

怒りにわなわなと震えるアーヴィヌスに、北の国に生まれた破妖剣士は内心の怒りを感じさせない淡々とした口調で答えた。

「おれの生まれた村は飢饉で滅んだ。第二の故郷は人喰いの妖鬼に襲われた。誰にもどうしようもない凄まじすぎる暴力に襲われて、おれはもう死ぬしかないのかと絶望した。それでも、生きたくて仕方なかった。背を割られても地べたを這いずってでも、生きるために逃げ延びたかった」

初めて聞くオルグァンの過去に、仲間である三人は声もなかった。

「あの時駆けつけて来てくれた破妖剣士のことは生涯忘れない。遅くなってすまないとか何とか謝られたような気もするが……そんなことより、来てくれたことが大事だった。なによりありがたいと思った。生と死の境に立たされた状況で、助かりたいと思わない人間がいるものか！　後悔もなにも生き延びてからあとについてくることだ！　マグァーラからの依頼は今の浮城にとって絶対だろう……数も多すぎる。ターラは浮城の決定に従うべきだ。だが、今にも死に瀕しているターラの弟のことを差し出がましく言うのは傲慢だ」

きっぱりと言いきられ、アーヴィヌスは返す言葉を失ったようだった。

その隙に乗じて、スラヴィエーラが最年少の破妖剣士の少女を「出よう」と促した。

アーゼンターラは何か言いたげな顔をしていたが、大人しく年長の女性の言うとおりに扉に向かった。

音もなく扉を開いて待っていたのは、四人中唯一の捕縛師である青年だった。

『さあ、どうぞ、お嬢さまがた――』

とても言わんばかりの大仰な仕種に、怒りと絶望に支配されかけていたアーゼンターラの表情も一瞬だけ緩んだ。

けれど――結局のところ、アーゼンターラにとっての現実は何ひとつ変わってはおらず……否、より厳しい状況に追いやられただけなのだ。

生き別れになった弟リメラトーンは、紫紺の妖主に影を奪われ、このままでは早晩、その魂を人形に封じられて二度と人間には戻れなくなってしまう。

そんな弟を救いたくて、自ら浮城に依頼をし、弟に術をかけた紫紺の妖主のもとへ乗り込んでいくつもりだったというのに。

城長には認められず、内緒にしていたはずの仲間たちにはなぜだかばれて、「馬鹿なことするな！」とさんざん怒られる始末。

ならばなんとかこっそりひっそり、できることはないのかと、思案し始めた矢先のカーヴィアでのこの騒ぎだ。

オルグァンも言った通り、この状況でアーゼンターラに拒否権はない。
放っておけないとも思っている。
けれど――。
トーン。
あなた、あなた……トーン……あたしのただ一人の弟。今となっては唯一の肉親。
その、あなたを――。
このままでは、見捨てることになってしまう……？
あたしは――どうしたら、良いの……？
頭の中がぐるぐるかき回されているかのような不快感に襲われ、アーゼンターラは堪らず右手で口元を覆った。
吐きそう……だった。

2

頭が全くといっていいほど働かない。

何をどう考えればいいのかさえもわからない。スラヴィエーラたちが気遣ってくれているのはわかったけれど、本当に何も考えられなくて、アーゼンターラはひとりにさせてほしいと口にするのがやっとだった。

「ターラ……」

「大丈夫か？」

大丈夫なわけがない——けれどオルグァンが言っているのは、そういう意味ではないのだとそれぐらいのことはわかったので、アーゼンターラはこくりと頷いた。

「大丈夫、無茶なことを考えてひとりで突っ走ったりしないわ……ただ、今は頭の中がぐちゃぐちゃで……だから、ひとりで整理したいだけ」

そう告げると、年長の破妖剣士ふたりは、仕方なさそうに頷いてくれた。

「まあ、気持ちはわかるけど……くれぐれも浮城から出たら駄目だよ。白砂原に下りるのも駄目だ」

スラヴィエーラが釘を刺してくるのに、アーゼンターラは首を傾げた。

「どうして？　白砂原は浮城の結界の内でしょう？　見習いの子たちだって、食糧補給の狩りに出かけてるじゃない。まさか、白砂原突っ切ってあたしが脱走するとでも思ってるの？」

さすがにそれは考えたこともなかったと、苦笑まじりに尋ねれば、斧の形の破妖刀を振るう破妖剣士が答えた。

「浮城の結界も絶対じゃない。特に白砂原は過去何人も上級魔性の侵入を許したことがある。特にお前は紅蓮姫の使い手だ、目をつけられていてもおかしくはない」

つまり、自分が白砂原に出た場合、紅蓮姫の使い手に興味を持った上級魔性が接触してくる可能性があるということだろうか。

聞きながら、アーゼンターラはどうせなら紫紺の妖主の配下が接触してくれるのなら願ってもないことだけど……とちらりと考えたが、それは勘の良い先輩ふたりに見抜かれたようだった。

「ターラ？」

「ターラ――」

ふたりの声が、普段より格段に低いことにさすがに気づき、彼女は慌てて手を振って否定した。

「行かない、行きません！　約束するから！」

ふたりの目がまだ疑わしげだったので、アーゼンターラはさらに言葉を続けた。

「万一そんなことになってあたしが大怪我負ったり、間違ってどこかに跳ばされたりしたら、カーヴィアの人たちを助けられなくなってしまう。カーヴィアに仕掛けられたのが、影糸術なのだとしたら、影を奪われたひとたちの人形が完成したら、魂は人形に移ってしまって肉体に戻れなくなってしまうと聞いたわ……意識をなくしたひとたちは、もうほとんど影が残ってないのよね。つまり時間はあまり残されていないってことだもの。身勝手な行動で怪我でもして、もし間に合わなかったら取り返しがつかない。それぐらいはわかってるから……」

言いながら、彼女は脳裏に、先日夢のなかに現れた弟の姿を思い浮かべた。

現実として、影が薄くなっていたリメラトーン――けれど、それは目視できないほどではなかった。

時間との戦いという意味においても、優先すべきはカーヴィアのほうなのだ……。

だけど、カーヴィアで時間を取られすぎたら……？　そのせいでトーンの影が完全に消えてしまったら……？

何も考えられないと思っていたのに、どうして不安だけはこんなにもすぐに溢れてしまうのか――アーゼンターラはぶんぶんと頭を振った。

「ごめん。やっぱり頭冷やしてくる」

白砂原には下りないから――そう言って、彼女は歩き出した。

ふたりが気遣ってくれているのはわかる。けれど、今は少しだけそれが重かった。

自分にはそんな価値はない――そう思うだけに、申し訳なさだけが募るのだ。

最低……。

ふたりの視線を背中に感じなくなると、アーゼンターラは思わずため息を洩らした。

声がかけられたのはその時だった。

「よう、なーにしけた顔してんだぁ？」

声はまだ若い青年のもので、なぜか頭上から降ってきた。

見上げると、乳白色の髪の青年が、木の上にあぐらをかいている。

邪羅だ。

この人は確か、浮城に籍を持たない不法滞在者というやつではなかったろうか……。こんなに堂々としていていいのだろうか……。

今さらなことを思いながら、アーゼンターラはオルグァンの言葉を思い出した。

過去白砂原が侵入を許したという上級魔性の内のひとりは間違いなくこの青年に違いない——他にもセスランやサティンについている自称護り手の黒髪黒瞳のふたりもそれっぽい。他にもいるのだとしたら、浮城の安全性はかなり疑わしいということになる。

妖貴以上の魔性なら、誰でも浮城に侵入し放題だなんて、決して表沙汰にはできないことだ——上層部が関係者の扱いに慎重を期している理由がわかったような気がした。

「あなたね……もう少し出現場所は限定したほうがいいと思うわ。助けてもらっておいて言うのもなんだけど——」

こんなにあちこち出没していたら、その内浮城以外の人間の目に触れてしまうかもしれないのだ。

世界唯一の対魔性組織である浮城の信頼が揺らぐのはいいことではないはずだ。

「今さらなこと言うなぁ。まあ、特定の人間以外の目には触れないよう、目くらましぐらいはかけてっから心配すんなよ。おれだって何も考えてないわけじゃない。なけなしの配慮ぐらいするって」

なけなし——って、とアーゼンターラは思わず宙を仰いだ。

自分でほとんど持たないと言ってどうするのか、それとも謙遜しているつもりなのだろうか……悪いがそうは聞こえない。

「……あなたはもう少し言葉の使い方を考えたほうがいいと思うわ」
深く息をつきながら告げると、青年がひらりと身を躍らせ、樹上から飛び降りてきた。
「なんだよ、せっかく落ち込んでるようだから、気分を浮上させてやろうとわざわざ愉快な言い方をしてやったのに」
気遣いはありがたいが……やり方が間違っている。
浮上どころか脱力してへたりこんでしまいそうだ。
「あのね……」
「ほんっと、元気ねえなぁ。どうした？　まさかカーヴィアの件、別のチームに持ってかれちまって、それで落ち込んでんのか？」
何でもないことのように告げられた一言に、アーゼンターラははっと息を呑んだ。
「どうして……」
カーヴィアの事件は極秘とされているはずだ。
事件を知る関係者には全員箝口令が敷かれ、街を封鎖することでその異常は世間には隠されていると聞いた。
なのに——とそこまで考えて、アーゼンターラは今さらなことに気づいた。
「……必死に隠しているのは人間が人間にだけってことね」

魔性の世界ではごく当たり前に話題にされているのだろう。
人外の美貌の主たちが噂話――但し、中身は血なまぐさい――に興じているさまなど想像しにくいことではあるが。
「おう。稀に見る大がかりな仕掛けってことで、結構皆興味津々だぜ。まあ、術の完成後大量にできた人間そっくりな人形はどうするつもりなんだって話が中心だけどな」
さすがは魔性と言うべきか、人間側の心情に配慮してくれるつもりはあまりないらしい……確かにこれは『なけなし』だ。
こんな人の頭を平気で殴りつけることができるリーヴシェランを尊敬するわ……。
遠くを見つめながら、アーゼンターラは美しい魅縛師のことを思った。
そんな彼女の心中を知ってか知らずか、邪羅は怪訝そうに眉宇を顰めた。
「しっかし、マグァーラの大都市が舞台だろ？　てっきり紅蓮姫の使い手を指名してくると思ったんだけどなあ。それとも人員派遣はしましたって言い訳のために、捨て駒を用意したって線か？　あそこの皇帝なら、その程度の誤魔化しじゃ納得しないと思うけどな……きっと、片付くまで派遣し続けろって言ってくるんじゃないのかぁ？」
アーゼンターラの様子から、すっかり勘違いしたらしい青年の恐ろしい言葉に、彼女は慌てて誤解を解くことにした。

「違う、違う。ちゃんと、あたしたちのチームが呼ばれたわよ。拒否権なしの絶対命令……だから、悩んでるんじゃない」

一刻も早くリメラトーンを救い出したい。

けれど、カーヴィアを見捨てるなど論外だ。事件を起こした魔性を恨めしく思わずにはいられない。

しかし、その悩みは邪羅には理解できないようだった。

「何を悩む必要があるんだ？　小国並みの大都市の住民全員が影を奪われ昏睡状態なんだろ？　糸絡みの大物が係わってるのは間違いないじゃないか。ここは、向こうから糸口がやってきてくれたって喜んで乗るところだと思うぞ？」

その意外な言葉に、アーゼンターラは思わず目を瞠った。

「え!?　まさか、これは紫紺の妖主が仕掛けたことなの!?」

期待と不安、恐怖が混じり合った感情が胸に渦巻き息苦しい。

「いや、はっきりとはわかってない……ただ、ここまで大がかりな仕掛けは、並みの妖貴にゃ無理だし、側近クラスの連中でも主人の許可が必要なはずだ。何でも人間をあんまり大量に殺しすぎるのは御法度なんだと。皆が皆大量殺戮に勤しんでたら、確かに人間がいくら多くて増え方早くても、早晩全滅しちまうもんなぁ……長く楽しむための決まり事ってことかな？」

……また、さらりと恐ろしいことを――。

胸中ため息を零すアーゼンターラに、邪羅はこう続けた。

「だからさ、これは絶好のチャンスなんだって。親父本人が仕掛け人じゃなくたって、絶対裏では繋がってるはずなんだからさ、カーヴィアの件を片付けたら、親父の居場所を聞き出すことができるかもしれない。今のところ手がかりひとつ摑めずにいるおれより、ずっと頼りになるかもしれない藁ってわけ。わかった？」

恐ろしく冷酷なことを言うかと思えば、こちらを気遣う言葉を投げてくる。

青年の印象をはっきりと決めかねるのは、いつもいつもこういうところを見せつけられるせいだ――蜜里にも似たようなところがあるが、邪羅ほどその差は大きくない。

セスランやサティンは、よく彼らと平気でつきあっていられるものだ……自分には真似できないな、とアーゼンターラは思った。

それでも――時折恐ろしさを窺わせる青年が、自分のことを本当に考えてくれたことだけはわかる。そうして、指し示された事実は、自分にとっては一筋の光明だ。

「わかったわ。要するに、これは不運ではなく幸運だってことよね。上手くすれば、カーヴィアのひとたちとトーンの両方を助けることができる……」

言うほど簡単なことではない。

少なくとも側近クラスの妖貴と対決し勝利を収めた後に今度は妖主と対峙――考えるまでもなく絶望的な未来にしか思えない……。

わかってはいるが、それでも先ほどまでの不安と混乱が嘘のように心は晴れている。

いかに困難であろうとも、両方を救える可能性は無ではないのだ。そう思えるようになれた――それだけで、アーゼンターラは邪羅に感謝した。

「ありがとう、邪羅！　可能性がある限り、諦めずに足掻く権利はあるんだわ！　本当にありがとう！」

青年の両手を力一杯握りしめ、ぶんぶん振り回しながらアーゼンターラは叫んだ。

「あたし、やってみるわ。自分にやれること全部ぶつける！」

そのために、必要なものは――。

そうだわ、螺旋杖！　ラヴィスでの戦いで手持ちの分のほとんどを使い切ってしまったんだわ……側近クラスの妖貴に通用するかどうかはわからないけど、用意しておくに越したことはないわよね。

幸い螺旋杖は作り慣れている。

カーヴィアへの出立は迫っているが、それまでに何本か彫り上げることはできるだろう。

「そうとなったら、まずは白木を確保しなくっちゃ……！　ごめんなさい、邪羅！　あたし、

もう行くわね。資材室に質のいい白木が入ってるといいんだけど……」

半ば以上自分自身に向けた言葉を口にしながら、アーゼンターラはだっ、と駆け出した。

紅蓮姫以外の力でも、使えるものは使うのだ。そうでなくて、どうして畢羅以上に手強いこと確実な妖貴と渡り合えよう。

たとえ石に齧りついてでも、勝利を手にして見せる。

オルグァンの言葉が脳裏に甦る——背を割られても、地べたを這いずってでも、生きるために逃げ延びたかった。

あれは生きることを諦めなかったということだ。

影を奪われ、体から魂を切り離されたカーヴィアの住民もリメラトーンも、きっと同じことを思っているはずだ。生きることを諦めず、きっと今も戦っている。

ならば、浮城から派遣される自分たちが、それを助け、彼らの願いを叶えなくてはならない。魔性に対抗できる異能を持つ自分たちが。

それでも自分たちは世間のひとたちが思うほどに完全でも無敵でもないから——。

「打てるだけの手は打っておかなくっちゃ」

呟きながら、アーゼンターラは走った。

背後に佇む青年に、心からの感謝を覚えながら——。

※

「うわ、足はや……もう背中見えなくなっちゃったよ」

目的を見いだした途端、あっという間に遠ざかりついには見えなくなったアーゼンターラの背中を目で追っていた邪羅は、心底感心しながら呟きを洩らした。

「こういうの、何て言うんだっけ？　思い立ったが吉日？　それとも出たら鉄砲玉？　意味合い全然違うのに、ふたつとも当てはまるような気がするなぁ……」

そう言うの、嫌いじゃないけど。

クスクス笑いながら、邪羅は軽く肩を竦めた。

「……ねえ、そこのお兄さん？　あんたはあれ、どっちだと思う？」

アーゼンターラに声をかける以前から、彼女に影のようについていた気配には気づいていた。

わざわざ指摘しなかったのは、彼女が気づいていなかったのと、気配の主がそれを望んでいないことを感じたからだ。

だから、彼女が充分に遠ざかるまで待った。

もういいだろう、と判断して、邪羅は木陰で気配を殺す相手に声をかけたのだ。

「……出たら鉄砲玉、それ以外の何がある」

数瞬の沈黙の後、不機嫌を絵に描いたような気配を放ちながら姿を現したのは、むき出しの両腕にびっしりと刺青が施された青年だった。

淡い色の髪に淡い色の肌――魔性に反応して色を変える刺青の色だけが鮮やかで、それを隠すために普段は長袖の服を身につけることが多い捕縛師は、なぜか今は上着も羽織っていなかった。

マイダードだ。

その刺青はもともとは青一色で彫られたものだが、邪羅の前に姿を現した彼の腕を彩るのはそうではなかった。

白と銀色と銀色がかった藤色に、刺青の一部が染まっている。

邪羅の力の正体を見抜くために、敢えて気配を刺青に呼び込んでいるのだ。

「……いきなり戦闘状態に入るの、やめようよ、お兄さん。おれ、別にあんたとやり合うために声かけたわけじゃないよ？　ちゃんとアーゼンターラが気づかないぐらいに離れてから声かけたおれの心配り、勝手に誤解されても困るんだけど？」

それは本当に本音だった。

邪羅はただ、気配を殺しながらずっと自分とアーゼンターラの遣り取りを見守っていた刺青の捕縛師――マイダードの意図を汲んだつもりだったのだ。

彼女がいる前では切り出しにくい話でもあるのかと思ってわざわざ気遣ったというのに、いきなりこちらの弱みを読み取ろうとするのは礼儀とやらに外れた行為ではないのかと、少々気分を害してもいた。

「言いたいことがあるのなら、まず口で伝えようよ。それに対するおれの答えを聞いてから対応は決めて欲しいな」

軽い口調で告げながら、邪羅はまずいな、と感じていた。

まずいな――こいつ、結構強い。戦うことになったら……困る。楽しそうだ。

と――。

生まれて十年余――自らを人間だと信じて生きて来た邪羅は、魔性として目覚めて後、力に対する感じ方が鈍くおかしいと両親の配下である妖貴たちから指摘されてきた。力と美に絶対的な価値を置く魔性にあって、力ある相手に対して優劣を競いたい、もしくは思い知らせたいと思わないのはどうやらおかしなことらしい。

別に敵対しない限り、相手の力が自分より勝ろうが劣ろうが拮抗していようが、別に問題はないというのが邪羅の考えなのだが、それを言うと皆が口を揃えて「それは生まれながらに強

大な力を与えられた者にしか許されぬ考えです」とか言うので、面倒になっていつからか本音を通すことは放棄するようになった。

ただ、人間だと信じていたころには覚えたことのない感覚が目覚めたのも事実だ。

魔性としての本能だろうか、対峙した相手の力を無意識にはかってしまうのだ。そして、戦うべきか否かをやはり反射的に秤にかけてしまう。

魔性として目覚める以前に出会って絶対的好意を抱いてしまったラエスリールには、そもそも戦意を抱く理由がない。彼女は常に彼にとっては『姉ちゃん』で、どんなにその立場が複雑に変わろうとも位置づけは変えようがない。

もう少し厄介ではあるが、その彼女にくっついている——今はいないが——深紅の青年は、絶対的力を目覚める前から植え付けてくれた曲者だ。勝手な行動、意味不明な言動、傍迷惑な判断に基づく暴挙にしか見えないあれこれ。

そいつのせいで大事なラエスリールがどれほど苦労させられているか……考えるだけで抹殺してやりたいぐらいだというのに、本気でかかっていっても絶対に敵わないと思わされてしまう。

相手に対してどれほど怒りを覚えても、彼には決して勝てないと感じてしまうのは非常な屈辱だ。機会があれば、是非とも覆したいと思っているが、その機はまだ巡ってこない。

……まあ、そうした絶対に戦う気になれない相手は他にも勝ち気な魅縛師だとかその護り手だとか面倒見の良すぎる捕縛師だとか……数名存在するわけだが、それらの例外を除けば、ここ一、二年で確かに魔性らしくなった自身を感じることが増えた。

その最たるものが、対峙する相手の力をはかってしまうようになったことだ。そして読み取った情報から導き出すのは、『戦ったら面白いか否か』……。

まずいな、と再度邪羅は思った——ただし、今回は自分に言い聞かせるように。

こいつと戦ったら確かに面白そうだけど、戦ったらまずいだろ、おれ。絶対あいつは殴るだろうし、話を聞いたら姉ちゃんも怒るに決まってる。

他にもいろいろ、いろいろとよくないことが付随してくるのは目に見えている。

やはりここは、かなり目減りしてしまった感のある人間としての感覚と常識を総動員してでも、平和な話し合いに持ち込むべきだろう。

「えー、と、マイダード……だったよな？　アーゼンターラのチームの捕縛師の。頼むからそう戦意ぎらぎら滾らせないでくれる？　言いたいことがあるなら言ってくれたら、対処できるかもしれないんだしさぁ。こんなとこで、おれ、あんたと戦闘状態になんか突入したくないんだよ……」

そんなことになったら、あっちからもこっちからもそっちからも叱られまくることになるの

目に見えてるからさぁ……。

情けない顔で頼み込むのは、本当にあっちやらこっちやらそっちやらが怖いからだ。

特に怖いのが――。

『なに、馬鹿なことやってるのよ！　この馬鹿、馬鹿、大馬鹿！』

と、怒りに顔を真っ赤にして大切な魅縛の道具であるはずの琴で殴りかかってくる少女。

と。

『……邪羅』

ただひたすらに悲しそうな顔をして、悲しそうな眼差しをこちらに向けてくるのが目に見える黒髪に琥珀と深紅の色違いの瞳を持つ女性。

そのふたりだった。

駄目だ、駄目だ、やっぱりどうしたって駄目だ、おれ。

ここでマイダードの挑発に乗ってしまったら、あとで死にたくなるほど悔いることになるのは明らかだ。

ここはぐっと我慢するしかない。

思わず空を見上げながら、邪羅は結局マイダードに『お願い』した。

「頼むから、用件言って。可能な限り応じるから……」

その時の邪羅の様子をリーヴシェランが目にしていたならば、『耳としっぽがぺしょんと垂れた犬みたい』と表現してくれただろう。

つまり、それぐらい情けない顔をさらしていたということだ。

それが関係しているのか否かは不明だが——いや、恐らく関係性は大だろう——戦意を滾らせながら現れたマイダードの気配が、実に劇的に変化した。

敵意、害意といったものが、綺麗に抜け落ちたのだ。

「お前……それ、なんだよ」

呆然としつつ、それでも苛立ちを抑えきれない様子でマイダードが文句を垂れる。

しかし邪羅は想像した二大勢力の反応に抵抗する意志皆無だった。

「や、だからあんたとここで戦ったら楽しそうだってこと以上に、怖くて怖くて怖くてたまらないことになりそうだから、お願いしてるわけなんだけど……駄目かな？」

邪羅は別に涙目になっているわけではなかったが、そこは人生経験の差というものだろうか——刺青の捕縛師は、まるで全部を読み取ったかのようにふう、と息をつき、そうして用件を口にした。

「おれだって、お前みたいな化け物と本気で戦いたいわけじゃない……こちらの言い分を聞いてくれるなら、な」

おれの言い分を――というか頼みたいことを聞いてくれるなら。

「なに？」

と尋ねた邪羅に、マイダードも率直な答えを返した。

「ターラだ。あいつを……これ以上、そっちに巻き込むな。お前たちの感覚についていけるほど、あいつは世慣れちゃいないんだ」

3

浮城に引き取られる子供は大まかに二つの種類に分けられる。

ひとつは幸運な子供と呼べるだろう――悲劇的な体験を味わうことなく、浮城にとって有益な才能を持つと認定され、保護されるのだから。

けれど、そんな子供は決して多くはない。

人間に生まれつきながら、何の変哲もない日常のなかで、浮城が有益だと認めるような才能を発揮する者などまず滅多にはいないのだから。

だから、浮城に引き取られる子供の多くは、第二の道を辿った者となる。

すなわち、生死の境を彷徨うような絶望的な体験の中で、特異な資質を初めて発揮し、それゆえに生き延びたというような――。

そうした子供たちは、多くが心に傷を負っている。

浮城に集まる異能を持つ子供は、その大部分が痛みを抱えているのだ。

※

「これ以上ターラに近づかないでくれ」

マイダードは魔性の中の魔性と呼んで差し支えないだろう白い青年に告げた。

巻き込むなと最初に言い、次いで頼むような言い方になってしまったのは正直なところ不本意だったが、これはもう仕方ない。

他でもないアーゼンターラが、彼らに近づき接触したのだから。

その理由もわかっている。

夢枕に立ったというターラの弟――リメラトーンは自分の身柄が紫紺の妖主に下げ渡されたと告げたのだという。そうして影を奪われ、間もなくその身は人形と化すのだと。

本人としては別れの挨拶のつもりだったかもしれないが、マイダードはオルグァンのように好意的には捉えられない。

余計なことをしてくれたものだと……そう思わずにはいられないのだ。

三年以上も魔性の中で過ごしてきたというリメラトーンは、すでにアーゼンターラが知っている過去の弟ではなくなっているはずだ。

……魔性に触れるとはそうしたものだ。
傍目には何も変わっていないように見えても、根源の部分で明らかに何かが変質させられてしまう……。
あるいは本人も気づかぬ部分で、作り変えられてしまうのだ。
肉親より何より、自分を支配する魔性に益する行動を選ぶように――。
用なしになったと、紫紺の妖主に投げ与えられたのだとリメラトーンは告げたのだという。
そうして紫紺の妖主の戯れで、影を奪われ……すぐに消える、と。
だからその前に、会いに来たのだと――。
切なく悲しい訴えであり告白である……肉親であり、弟に負い目を持つアーゼンターラであればあっさりと信じるのも無理はない言い分だ。
現に彼女はすっかり真に受けて、弟を救出するためにたったひとりで飛び出していく気満々だった……その前にマグァーラからの依頼が来たおかげで結果的に彼女の暴走を止めることはできたわけだが。
そう……マイダードはリメラトーンの言葉を額面通りに受け止めることができずにいる。何か裏があるような気がしてならないのだ。そして彼が最も危惧するのは、そのことでアーゼンターラが魔性の企みに利用されてしまうことだ。

アーゼンターラは危うい少女だ。

ある程度の異能を持つのは浮城の人間としては当たり前だが、彼女の場合、その異能の質が問題だ。

螺旋を刻んだ杖でもって、魔性の本質を読み取り、その力や命を搦め捕る。

そのためにはある程度以上魔性を理解することが必要だ。

理解……それは、心を魔性に近づける行為である。魔性の嗜好や考え方に自身を近づけて初めて可能となることだ。

それがどれほどに危険なことか——恐らく彼女自身は気づいていない。

魔性の雛型となりかねない危険性に。

ただでさえ、アーゼンターラには蜜里という妖貴がついている。浮城に入る前からつきあっているという幼い魔性の影響を、彼女はすでに受けている可能性が高いのだ。幸か不幸か、蜜里は幼く、狡知に長けているようには見えないが、それでも妖貴だ……人間とは全く違う。

そんなものと近しく触れ合っていれば、アーゼンターラがいつ自分の立ち位置を見誤ることになるかしれない。だから本音を言うなら、彼女には蜜里ではない別の護り手をつけるべきだったとマイダードは思っている。

だが、それは今さら難しいだろう。記憶をすり替え、魔性を忌避していた頃のアーゼンター

ラからさえ、蜜里は離れようとはしなかった。本来の彼女に戻った今、決してその位置を別の誰かに譲りはしないに違いない。

それはもう仕方がない——自分たちにできることは、アーゼンターラが今以上蜜里に心を寄せないように意識をこちら側に引き留めるぐらいだ。

それでもまだ、彼女の危うさに不安を覚えずにはいられないというのに……この上、別の魔性にまで近づかれてはたまらない——複数の妖貴と平気でつきあえるような人間とつきあっていれば、彼女の心の天秤がどう傾くか知れたものではないのだから。

「ターラは、あいつらとは違うんだ。過去にどんな罪を犯してきたかもしれない魔性と平気でつきあえるほど、あいつは強くはないんだよ。魔性は魔性で人間とは別物で、言葉は通じても決して同じものじゃないと割り切れるほど、器用でもない」

蜜里と話している姿を見ていれば、そんなことは一目瞭然だ。

「臆病で恐がりで、そのくせ妙なところで信じやすくできてる子供なんだ。お前らに近づきすぎたら、きっと勘違いする……」

人間と魔性は心を通わすことができるのではないか、と——。

そして、魔性と人間の根本的な違いを見せつけられた時、深く傷つかずにはいられないだろう……できるなら、そんな思いはさせたくない。

人間と魔性は立ち位置が違うのだと、それを決して忘れさせたくないのだ。

「……聞いてると、何だか酷い言われようだな。まあ、おれ自身人間になってる時とこの姿の時じゃ、考え方とか価値観とか微妙に変わるから、人間と魔性が同じじゃないってのには賛成するけどさ。だからって、心を通わせるのが不可能みたいに言いきられると、ちょっと待てと言いたくなるぞ」

面白くなさそうに——それはそうだろうが——白い髪の青年はくしゃくしゃと髪をかき上げながらぼやいた。

「不可能ではないにしても、そんなことができる人間は稀だろう。ターラがその稀なひとりだとは思えないという話だ」

そして、それは自分にしても同じだ。

魔性を相手に距離感を計りつつつきあうことなどできはしない。護り手は例外的に信じてはいるが、それでも過去の話など聞かされると退きそうになることも多い。

「それって、火は危ないから近づけないように子供から遠ざけるってのに近くないか？　物心ついてないならともかく、ある程度育ったら、危なくない扱い方を教えてやるほうが、断然本人のためになると思うのはおれだけか？」

あいつだって、もう十六だろ？

青年の言葉はある意味正しかったが、マイダードにはどうしても頷けない理由があった。

「教えようにも扱い方なぞおれたちにだってわからないんだ。そういう危険物には近づけないに限るだろうが」

この言葉に、それまで仏頂面をしていた青年がぶっ、と吹き出した。

「ひでぇ……サティンやセスラン、危険物扱いかよ」

別に彼らを指して言ったわけではなかったが、言われてみれば彼らも充分危険ではあるのだ……マイダードはあえて誤解は解かないことにした。

「……それに、あいつらには前科がある。懐いてきた子供を甘やかすだけ甘やかして、魔性との距離を摑めなくさせた挙句、道を誤らせた……な」

ターラを同じ目に遭わせるわけにはいかないんだ。

はっきりと言いきると、一瞬青年の藤色がかった銀の双眸が鋭い光を浮かべた。

「それ、もしかして姉ちゃんのことを言ってるのかな？　姉ちゃんがサティンやセスランに甘やかされて、魔性との距離を計り損ねて道踏み外した……って？」

青年の全身から、ひんやりとした冷気が放たれる。

ぞくりとした——だが、マイダードは退かなかった。退くわけにはいかなかったのだ。

「他に誰がいる」

「魔性が仕掛けた罠にまんまと騙されて、姉ちゃんを拘束した奴らは何にも悪くなくて、姉ちゃんだけが悪かった、と……？」

声が、先ほどまでのものとは全然違う……魔性は声すらも皮膚を切り裂く力を宿すのか。

無数の不可視の切り傷を刻まれる気分で、刺青の青年はこう続けた。

「彼女はあの時逃げ出すのではなく、冤罪を証明すべきだった。そしてそれ以前に自分を信じてくれる人間をもっと増やしておくべきだったんだ……あいつらだけとつるむのではなく。そうすれば、あんなことにはならなかったはずだ。おれがあいつらを嫌いなのは、彼女が人付き合いを苦手にしているのをわかっていて、放置していたからだ。魔性絡みで心に傷を負った者は浮城には珍しくない。そいつらだって、傷を乗り越えてきたんだ。彼女だって――」

言いかけたマイダードの言葉は、最後まで紡がれることはなかった。

びしり、と音を立てて足下の地面に亀裂が走ったからだ。

「おっと、いけね。浮城で力使うのは御法度だってのに、つい……」

しまったなぁ――頭をぽりぽりかきながら、白い魔性が暢気に呟いた。

「お前……」

「あんたの言いたいことはわかった。あいつらにちゃんと伝えといてやるよ、伝えるだけはな。じゃ、さすがにおれもおおっぴらにここにいられる立場じゃないから一旦消えるわ。警備

担当の護り手たちには何でも好きなように言っといてくれ」
一瞬迸らせた殺気にも近い気配は、今では跡形もない。
「おい――」
「そうそう、行く前にひとつだけ」
くるりと振り返った青年が、感情を読み取らせない表情でこう問うた。
「あんたって、普通の人間にできて当たり前のことができない奴は怠け者だって決めつけるほう？　あるいは、人の半分の速さで歩いてる奴は怠けてるんだって？　姉ちゃんのことを甘やかされて怠けてたって思ってんならさ、それこそあんたが姉ちゃんのこと全然見てなかっただけって話だから。……まあ、アーゼンターラのことはきちんと見てるみたいだし、過保護になりすぎない程度に面倒見てやったら？　それこそ彼女が道を踏み外さないようにさ。じゃあな！」
言いたいことだけ言い捨てると、白い青年の姿は宙にかき消えた。
マイダードは自分が地雷を踏んだことを悟らざるを得なかった。だが、だからと言って、自分の言い分が間違っているとも思えないのだ。
ラエスリールは釈明すべきだった――瓜二つの魔性が街を滅ぼしたことに関して。
彼女の味方を気取る連中は、その言葉の正しさを知らしめるために協力すべきだった。彼女

を逃がし、紅蓮姫を届けさせた前城長のマンスラムを含めた面子は、どう考えてもやり方を誤った。

その結果、真実は闇に閉ざされたまま——不審と疑念は解かれることなく、凝りとなって皆の胸に蟠ってしまった。

「……酷い言いようなのはどっちだよ。全く、言うだけ言って消えちまいやがって」

足下に走った亀裂を見下ろしながら、マイダードは深く息をついた。

魔性に対する結界に守られた浮城の中心部にほど近い場所で、これほどの力を揮って何らダメージを受けない上級魔性——どれほど人間くさい言動を取ろうとも、この亀裂が全てを物語っている。

人間と魔性の間には、この亀裂と同じ——もっと深い淵がある。

「……だから、ターラ。絶対勘違いするんじゃないぞ……魔性は魔性だ。そして、あいつらのそばで三年を過ごしたお前の弟も……」

以前と同じではあり得ないのだから。

まるごと信じては駄目だ。

問題はこれをどう切り出すべきかだが……そこまで考えたところでマイダードは、その前にもう一つ片付けなければならないことがあることを思い出し、こめかみを押さえた。

『警備担当の護り手たちには何でも好きなように言っといてくれ』

と、言われても――。

どんな内容であの青年を激怒させたのかは、とてもではないが魔性である護り手たちには話せないではないか。

「もしかして、これってあいつの仕返しなのか……？」

げっそりしながら洩らした声は、自分でもわかるほど疲労感を漂わせていた――。

第二十一章　揺らぎ

1

不利を見て取った妖鬼がその巨体からは考えられない素早い動きで逃げを打った。
妖鬼の蹴りつけた岩が砕け、浮城の捕縛師に襲いかかる！
捕縛師の護り手が素早くそれらを細かい砂塵に変えるのと、命の危険を免れたばかりの女性が叫んだのは同時だった。
「鎖縛！　そいつ、絶対に逃がさないで！」
俊敏な動きで、妖鬼はすでに鬱蒼と茂った木立に紛れこもうとしていた。
「注文以前に礼を言え」
ぶつくさと文句を垂れながら、黒髪黒瞳の青年は軽く手を振った。
それだけで、妖鬼の命運は尽きた——不可視の鎖に搦め捕られた巨体が宙に浮かび上がり、身動きひとつできなくなったのだ。
「なぜだ……なぜ、漆黒の御方が浮城の捕縛師などに……!?」

協力しているのか、と問いたかったのか、それとも――。

「顎でこき使われてるのかって？　それはねえ、わたしが素晴らしい人脈の持ち主で、こいつが絶対逆らえない偉いヒトに、融通利かせてもらえるぐらい気に入られてるからよ」

にこにこ笑いながら、若い女性が弓弦を引き絞る。

なまじ整っているだけに、その笑顔には凄みがあった。

「誰が顎でこき使われてるって言うんだ」

鎖縛が不満そうに声を上げたが、それは綺麗に無視された。

「ほんと……すぐにでも出て来てくれたら、さっさと片付けてお終いにできたのに、二日も待たせてくれて……おかげで鎖縛が出してくれた期限ぎりぎりになっちゃったじゃないの。鎖縛はねえ、あんまり余裕を持って期限を言ってくれないから、こちらは何とかその前に片付けようと必死なのよ。こっちの件が長引いたせいで、引き受けた仕事の関係者に後遺症でも出たら悔やんでも悔やみ切れないじゃない！　だのに……もう、ほんとになにをぐずぐずしてくれてたんだか！」

このアンカーナの村に着いたのは二日前のこと――妖貴である鎖縛の力を利用して、依頼主たちを眠りにつかせて二日の期限で浮城から断られた依頼を片付けるために来た。

できればすぐにでも片付けて、村の皆を安心させたいのと、本来の依頼先の関係者の衰弱を

最小限に留めたかったというのに……どんな勘を働かせたのか、問題の妖鬼は期限ぎりぎりまで気配すら感じさせなかったのだ。

八つ当たりだという自覚はある——が、これは盛大に当たり散らすしかないではないか。

「というわけで、あなた、無念かもしれないけど、それ以上に無念に散った村人たちからの報いだと諦めて、封じられてちょうだい。それでもセスランに当たらなかっただけ、あなたは運がいいんだし……あの人の体内に封じられて、あなたより強い妖鬼に永遠にいたぶられ続けるよりはましな末路でしょ？」

そう言い切ると同時に、捕縛師の女性——サティンは矢尻が封魔具となっている矢を妖鬼に向けて放った。

一矢、二矢、三矢——。

立て続けに放たれた矢は、的確に妖鬼の心臓を射貫き、その命を封じた矢尻だけが、ころんと音を立てて地面にこぼれ落ちた。

その鮮やかな手並みに、鎖縛が呆れたように息をついた。

「なに？」

気が立っているせいか、砂色の髪の女性の目はきらきらと輝いている。

「別に。お前の手腕は本来の依頼の時より、浮城が断った物件を片付ける時のほうが際立って

いると思っただけだ」

それは鎖縛の素直な感想だったのだが……言われたサティンは途端に顔を顰めた。

「わたしは別に今の城長が選んだ仕事で手なんか抜いていないわよ？　増え続ける魔性被害で苦しんでる人たちだってことに変わりはないんだし――まあ、あなたにそう見えるのだとしたら、多分理由は時間的拘束がより強いのが理由なんじゃないかしら？」

あなたが三日と言ったら、本当に無事にすむのは三日きりなんですもの。

恨めしそうに告げられた言葉に、鎖縛は心外そうに口元を歪めた。

「……ちゃんと、五日が限界だと言ったはずだが」

「だから、それは本当に限界まで引き延ばして五日ってことでしょう!?　そうじゃなくて、もう少し余裕を持った期限を切ってくれるなら、わたしがわざわざその限界期日から更に余裕のある期日を割り出して、いらいらじりじりすることも少なくなるんじゃないかしらって思うのはわたしの狭量ってものかしら!?」

「狭量というよりは能力不足じゃないのか？　お前は注文が多すぎる。上層部に不審を抱かせない範囲で、取りこぼしの面倒まで見ると言うんだ、そもそも無茶が前提にあると決まってるじゃないか。おれは正確な期日を言っている。判断するのはお前の役目だろう」

回収すべき妖鬼の命を封じた矢尻は地面に転がったまま――捕縛師と護り手のあまり高次元

とは言い難い……もっとはっきり言うなら、責任のなすりつけ合いに近い会話が延々と繰り広げられている最中のことだった。

突然、高らかな女性の笑い声――サティンのものではない――が周囲に響き渡ったのは。唐突な声に、瞬時サティンはびくりと身を震わせたが、すぐにそれが耳に馴染みのあるそれであることに気づいて緊張を解いた。

腹が立つことに、鎖縛はとうにその気配に気づいていたらしく、顔色ひとつ変えていなかった。

無性に腹が立った。

が、ここで鎖縛に突っ込みを入れたところで意味はない。

そうした言動さえも声の主とその女性との繋がりを拒まない万年青年の娯楽にしかならないことをサティンは身を以て知っていた。

「衣於留。あなたがここにやってきたということは、セスランが無事にイリヤンの件を片付けたってことを意味してるんだって、それはわかってはいるんだけど……わざわざってのが気になるわ。何か、あったの？」

衣於留はサティンの同僚である捕縛師セスランのもとに半ば無理矢理押しかけてきた護り手だ。

いや、正確な意味では護り手とは呼べない。浮城に認められたわけでも、護り手となるために人間の思考形態や言動に即した『矯正教育』を受けたわけでもないのだから。

そしてそれは鎖縛にしても同じで、今は出奔したという形になっている女破妖剣士の自称護り手もそうだ。

彼らは『矯正』という名の思考の枷を受けていない。

魔性本来の奔放さを持ったまま、気まぐれでこちらに与してくれているだけの存在なのだ。

信頼度は……はっきり言って、あるかないかさえわからないというのが実情だ。

だが、それでも自分たちが彼らを信じるのは、そうしても構わないと思えるだけの反応が——いや、若干ひとりは疑問だが——それなりに感じられるからだ。

だが、油断をしたら足下を掬われるという不安も常に感じているので、常時それなりの用心と警戒は不可欠なものと胸に刻んでいる。

果たして——。

何かあったのかという問いに、衣於留は物凄く嬉しそうな——見るからにたちの悪い笑みを浮かべた。

「あったわ、とーっても心臓に悪いことばかり次々と」

嬉しそうにそう言われて、話を促すのに躊躇いを覚えなければ自己防衛本能を持つ生物とし

て間違っているだろう。

だが、相手が魔性であることを考えれば、これが入り組んだ引っかけである可能性も高く感じられる。

普段であれば、こうした駆け引きもそれなりに楽しく感じるものだが、いかんせん今は疲れすぎていた。

「どんな」

答える声が投げやりになってしまう。

意外にもそこでサティンを庇うように——戦闘中はともかく、そうでない時に彼が口を挟むことはほとんど皆無だ——鎖縛が衣於留に声をかけた。

「すまないが、衣於留。今はおれもこいつもあんたとの駆け引きを楽しむ余裕はないんだ。用件は手短に言ってくれ」

これがもっと別の時であったなら、サティンは自分が耳にしたことを信じられずに目を丸くして「何の罠？」ぐらいのことは言っていたかもしれない。

だが、余裕を装ってはいても、実のところ疲労困憊で大きな焦りを抱え込んでいる今……そう裏読みする気力も残っていない状況で告げられた言葉に、サティンは思わずほろりと泣きそうになった——あくまで泣きそうになったというだけで、現実に泣いたわけではなかったが。

そんな彼らに、衣於留は「そうよね」と頷いた。

「そうだと……あなたたちも大変なんだから、わざわざ知らせる必要はないんじゃないって、わたしもセスランに言ったのよ？　なにも今でなくても、この先会わせる機会がないわけじゃなし、ふたりが落ち着いたころを見計らって、機会を設ければいいでしょう、って。なのに、セスランったら全然話を聞いてくれないのよ。そんなことを言って後日に延ばしたら、絶対生きてる間呪われるぐらいに恨まれるとか、夜毎日毎に恨み言を耳元で囁かれること間違いなしだとか、そんなことになったら確実に自分の神経のほうがもたないだとか……もう、あり得ないようなことばっかり延々と！」

もう、何を言い出すのかと思ったわよ――。

呆れ果てた口調でセスランの異常な言動を伝える衣於留をよそに、サティンは大きく目を瞠った。

セスランと自分――瞬間的に遠距離を移動する術を持つ妖貴を味方につけたからこそ、浮城が断らざるを得ないと判断した事件に回ることができた。

ふたりとも、公にはできない仕事まで引き受けているおかげで、疲労度は高い。

サティンのそんな状況を誰よりもよく知っているのはセスランだ。だから、彼がサティンをさらに疲れさせる真似をするわけがない――ふたりが始めたことは、いつ終わるとも知れぬ先

が見えない行為なのだから。

それでも、だ。

それでも、セスランがサティンに無理をさせても会わせたい——時期を見計らうことなくすぐにでも……。

そう想う相手に、サティンは心当たりがあった。

たったひとり——ひとりだけ。

その相手に会うためであれば、どんな状況であろうと飛んでいくであろう存在。その機会を妙な気遣いで無にされたら、相手を末代までも呪うであろう唯一。

そして、それを他でもないセスランは知っている——。

だから、その可能性が頭に浮かんだ瞬間、サティンは叫んでいた。

「鎖縛！　とっとと戻るわよ！　でもって眠らせてた関係者一同全員目覚めさせて事件が解決したことを頭にたたき込んでちょうだい！」

それは、当初予定していた行動だった。

サティンの剣幕にてっきり別のことを頼まれると思っていたのだろう青年が、意外そうな顔をするのに、続けて彼女は告げた。

「どうせ、その後祝いの席やら何やら設けるとか言ってくるに違いないんだから、わたしは疲

労がもとで数日寝込んでしまったってことにして！　そのくらいのこと、あなたなら朝飯前でしょ!?　でもって、衣於留！　わたしが行くまで絶対、絶対逃がすなってセスランに言っておいて！　ここで逃がしたらわたしは七回生まれ変わってでも呪いつづけてやるからってセスランに伝えて！　ほら、鎖縛行くわよ！」

一般に言われる『七代祟る』より恐ろしいことを口にした捕縛師は、正規ではない護り手を急き立てて姿を消した。

取り残された格好となった艶めいた美女は目を瞠った後……「なんとまあ」と呟いた。

その漆黒の双眸を楽しげに煌めかせながら――。

「素敵ね」

どきどきするわ――と。

嬉しそうに呟いた。

※

人間を食らった妖鬼を見る。

すでに十人を下らない村の人間を喰い殺した妖鬼だ。

是非もない——。

長年つきあってきた破妖刀がそばに在ったなら、「不味そうだからイヤ」というのを叱りつけ、無理矢理にでも命を食らえと命じただろう。

だが、今破妖刀はそばにない。

代わりに与えられたのは魔性の命を封じる鈴の連なり——。

封魔鈴に命を封じる確実な術さえ持たぬ未熟な自分——。

『瞼の奥に意識を澄ませて』

告げ、導く声は圧倒的力と自信に満ちている。

『魅了眼とは読み解き、理解し、支配する力——まず読み解こうと思わなければ始まらない。相手を理解するための想いを起こし、力を貯める』

そのために、まずは瞼の奥に力を——。

告げられた通りにすれば、瞼のあたりが熱を帯びてくる。

熱い。

灼けるように瞼が熱い。

『そう、それでいい……その状態で、相手を見て』

見る——否、視る、か？

導く声の言う通り、目を開いてみれば、視界は二重にだぶっていた。現実的な視界と、本来であれば不可視のそれと――二重写しに、だがどちらもはっきりと。

『何が見える？』

見えるのは、口の周りを真紅に染めた妖鬼の禍々しい姿だ。

その口は動いていないのに、声が聞こえる。

『もっと、もっと、もっとだ……！』

喰いたい、喰いたい、喰いたい――と、食欲に支配された声がただただ叫んでいる。

ふう、と悲しげな息をつく気配を身近に感じた。

それは自分のものではない。目に映る妖鬼のものでもない。

『駄目ね……駄目だわ』

悲しい――と、叫ぶ声なき声を押しのけて、その声は断定する。

『彼は改めない……食欲は大きく育ち過ぎて、彼はそれを押しとどめる気さえなくしてしまった……彼はこの先、ただ人間を喰らい続ける……』

悲痛な声だった。

そして、声は告げるのだ。

『滅ぼすしかない』

と――。

瞼に熱が集まる――読み解く力に支配するためのそれが加わっていく。

このままでは、導く声の告げた通り、目前の妖鬼は滅ぼされてしまうだろう。

そうと悟った瞬間、導きの声をどこかぼんやりと聞いていた意識が一気に覚醒した。

『駄目です、駄目です、駄目です……それは駄目です、母さま！』

叫んだ意識が支配する肉体のその内の――緑の眼差しだけが微かに色合いを変えた。

『どうして』

導く声が不思議そうに問う。

『あなたにも見えたはず……彼は改めない。このまま放っておくわけにはいかないわ』

『滅ぼすしかないのなら、わたしもそうします。けれど、他にも途はある……』

そう答えながら、彼女は自らの眼前に左手首をかざした。

そこにあるのは鈴を連ねた繊細な手纏――封魔鈴がしゃらん、しゃらんと澄んだ音を立てる。

『滅ぼさずとも、封じるという手が』

告げて彼女は意識を妖鬼に切り替えた。

そうして、命じる。

「おいで、緑蘭……」

どこまでも澄んだ緑柱石の明るい緑の色彩に、一筋入り込んだ金色の輝き——その些細にして絶対的な変化が対峙していた妖鬼に対する支配の種類を一瞬にして塗り替えた。

「石斛のごとく共生せずにはいられぬ者……その相手に人間を選んでしまった者……本来であれば、少しの気を分けてもらうだけでよかったはずのお前……今の歪んだ大きな渦が、お前を凶行に駆り立てた。おいで、おいで……緑蘭。おいで……そして、眠るがいい……自らを駆り立てる衝動から逃れられぬというのなら……この鈴の中で」

おいで、おいでと優しく慰撫する声を繰り返す。

怯え、恐れていた妖鬼の魂がその声に従うのにさほどの時間は要さなかった。

りん、と彼女の手首に巻かれた鈴の手纏が震えて音を立てた。

人喰いの妖鬼の命が、緑金の輝きに従い、鈴に宿った瞬間だった——。

2

「姫君が魅了眼を揮われる時は、金の輝きが入るのですね」

何とか無事に緑蘭の命を鈴に封じ終えたところに、隠形を解いた宋流と空也が現れ、そんなことを言い出したのに、ラエスリールは何とも言えない気分になった。

ふたりがすでに自分に殺意を抱いていないことはわかっているが、殺されかけた経緯があるせいか、彼らが隠形したりそれを解く度に緊張してしまう。

ふたりはさほど気にした様子を見せないが、なまじ好意的且つ敬意を持って接して来るものだから、申し訳ない気分になってしまうのだ。

それに、どうにも落ち着かないのは……『姫君』と呼ばれることだ。

「頼むから、その呼び方は止めてくれないか？　そんな柄じゃない」

切実な願いをこめてそう頼んだラエスリールだったが、数瞬の後猛烈に後悔することとなった。

宋流と空也は不思議そうに首を傾げた後、「では、朱烙さま、と？」と伺いを立ててきたのだ！

「それは絶対に止めてくれ……」

がっくりと肩を落としながら、彼女がこれまた切実な声で頼み込むと、背後からくすくすと笑う声が聞こえた。

「諦めなさい、ラス。そのおふたりは決して他の呼び方はなさいませんよ。あなたの希望に添うような呼びかけは、おふたりにとって言語道断の失礼に当たるのですから」

ブロンズの髪の捕縛師が、彼女の手纏を見つめながらそう告げる。

「セスランさま」

「おふたりのほうこそ、あなたに泣いて頼みたいところでしょう……姫君と呼ばれるぐらいでおたおたせず、泰然としていてほしいと」

それこそ無理な注文である。

「セスランさま。人間にはできることとできないことが……」

「そのできないということが、おふたりには理解できないのですよ。考えてもご覧なさい、あなたのご両親に弟御、誰が妖貴に跪かれたぐらいで慌てます？　あなただけができないなどあり得ないとおふたりが考えるのは至極当然ではありませんか」

セスランの言葉は正しい。

確かに父も母も弟も、妖貴に礼を尽くされたぐらいでたじろぐようなひとたちではない。それどころか、当然とばかりに自然に振る舞うことだろう。

三人にできることが、なぜラエスリールだけできないというのか——それはもう、答えはひとつしかない。

「……氏より育ちという言葉があります」

「おふたりは納得できないでしょうね。何しろあなたは妖主のそばで平然としてられるひとですから。そちらのほうが難しいですよ」

セスランの容赦のない言葉に、宋流と空也が小さく頷くのが見えた。

ラエスリールは堪らず叫んだ。

「そんなの！　セスランさまだってサティンだって、平気であいつと喋っていたじゃありませんか！」

そうだ、時には皮肉を言ったり釘を刺すことまでしていたはずだ。

自分ばかりが特別ではないはずだ。

しかし、そう思うのは彼女ひとりであるようだった。

「わたしたちの言動は彼の許容範囲内に限られてます。そのあたりの見極めもなく、妖主とつ

きあうような無茶はしません。あなたの場合と、そこが全然違うのですよ」

何がどう違うというのか――正直なところ、ラエスリールにはわからない。

だが、このままセスランと話していると、話題がまずい――たとえば思い出したくない過去の逸話等――方向に向かいかねない。

そうなる前に、彼女は別の話に切り替えた。

「そういえば、金の輝きがどう、とか言っていたな。母さまの瞳は緑なのに、そんなことがあるのか……？　自分ではわからないんだ」

妙齢の美女としては硬すぎる口調は、だが不思議と似合っている。

傍から見れば、妖貴相手にこの言葉遣いということで、充分偉そうに振る舞っているわけだが、彼女にその自覚はない。

先に口を開いたのは空也だった。

「全然違いますよ。御方さまの魅了眼は華やかで圧倒的輝きに満ちております……王の力と呼ぶに相応しい。さすがは我が君をも捕らえた光だと、得心がいきます」

手放しの讃辞である。

「対して姫君の魅了眼は、我が君と同じ金色で華やかではありますが、それより厳しさが見て取れます。それも、他者に対するというよりは、ご自身に向けられているような……我が君が

魅了眼の力を解放された姿を目にしたのはかなり以前になりますが、やはり似ておられます。姫君の力はもしかしたら御方さまではなく我が君から受け継いだものかもしれませんね」

何かを思い出すように、微かに目を細めながら今度は宋流が告げた。

何だか嬉しそうに見えるのは気のせいだろうか。

ラエスリールはどう反応すべきか迷った。

しかし、直後空也が何かに気づいたような顔で問いかけてきたため、彼女は悩まずにすむこととなった。

「姫君はあの妖鬼を消滅させず、封じられましたね。それはつまり、あの妖鬼には御方さまが仰るところの『改まる余地』があったのですか？」

「改まる余地？」

聞き覚えのない言葉に、今度はラエスリールが首を傾げる番だった。

その様子に、説明を口にし始めたのは宋流だった。

「先日ですが、御方さまが仰っていたのですよ。普通は二、三人にひとりぐらいは『改まる余地』があるはずなのに、この一年誰にもその余地が見えないと。こんなことは初めてだ、おかしいと……」

青年の言葉に、ラエスリールは先ほどのことを思い出した。

魅了眼を使いこなせずにいる自分を導いてくれた母――チェリクが告げた言葉を。

『彼は改めない……』

人間を喰らうことに喜びを見いだしてしまった妖鬼は、この先人間を襲いつづける、と。

確かにラエスリールにもそう見えた。ただひとつきりの流れは、人間の血と歪んだ食欲、歓喜、執着のみで作られており、他の未来へ到るものはなかった。

「……改まる余地、とは何だ……？」

彼女の疑問に答えたのは、内に在るチェリクではなく、笑顔が似合う万年青年の捕縛師だった。

「また懐かしい言葉ですね。チェリクさまは相変わらずそれを基準に選別なさってるんですねえ……」

苦笑交じりに彼が語ったのは、過去のチェリクとの遣り取りだった。

「チェリクさまとは仕事でご一緒したことが何度かあるのですが、当時不思議でならなかったのはあの方の選別基準でしたね。大抵の妖鬼は多かれ少なかれ人間を手に掛けたことがあるものですが、ある妖鬼は問答無用で命を解いて消滅させたかと思うと、別の妖鬼は魅了眼で従えて浮城に連れ帰って護り手にするという両極端さでねえ。何を基準に消滅と護り手に振り分けているのか尋ねたことがあるんですよ。その答えが改まる余地の有無だったんですよね」

そう言って、セスランはさらりと髪をかき上げた。

「魅了眼の力を解放すると、チェリクさまには流れのようなものが見えるのだそうです。ラスはどうでしたか？　やはり見えましたか？」

水を向けられ、ラエスリールはこくりと頷いた。

「以前は夢中で解放していたから覚えてませんが、今日は……母さまが導いてくれたおかげもあるのでしょうが、確かに流れとしか呼びようのないものが見えました」

「そうですか。やはり魅了眼を持たなければ理解するのは難しいものなんでしょうね。実際わたしにはよくわかりませんでしたし。ただ、妖鬼のなかにはその流れが幾つかに分かれている者もいるのだという話でした。彼女はそれを『改まる余地』と呼んでいました。まあ、実際のところは余地有りと判断した妖鬼は有無を言わさず護り手教育を刻みつけてましたからね、強制的に更生させるようなものでしたが、おかげで護り手が一気に増えましてねえ。浮城としてはチェリクさまさまでしたよ」

はは、と声を上げて笑う青年とは裏腹に、宋流と空也はなにやら気まずそうだった。

改めてチェリクの目に自分たちがどう映っているのか不安を覚えたらしい。

「それで、ラス、今日の妖鬼はどうだったんですか？　この一年チェリクさまが外れにしか当たってなかったのか、今日もやはり外れだったのか……気になるところです」

冗談めかしてはいるが、セスランの瞳は真剣だった――何かがおかしいと、彼もまた感じているのだろう。

「流れは……ひとつきりでした。母さまは『改めない……滅ぼすしかない』と言ったんですが、わたしは封じる手段があるのだから、封じるほうを選ぶ、と……」

そこに飛び込んできたのは宋流の声だった。

「なぜです？」

鋭いというわけではないにもかかわらず、その声にはラエスリールの心をひやりとさせる何かが含まれていた。

「なぜ、とは？」

「御方さまは改めないと仰ったのでしょう？　ならばわざわざ封じる必要があるのですか？　姫君は封じるのも滅ぼすのも同じようなものだとお考えですか？　ならばそれは大変な思い違いだと申し上げます。そのようにお考えでしたら、今からでも遅くはありません、一度解放した後、消滅させるべきでしょう」

毅然（きぜん）とした声で、はっきりと告げられた内容に、ラエスリールは眉宇（びう）をひそめた。

「こちらこそ、なぜと聞きたいな。すでに封じた緑蘭を、どうして改めて殺さなければならないんだ？」

「封魔は完全ではないからです」

答えたのは空也だった。

「わたしも宋流に賛成です。あの妖鬼が人喰いに堕ちて元に戻る可能性がないというのなら、生かしておくのはあなた方にとって百害あって一利なしだ。姫君は浮城の捕縛術が完璧だとお考えのようだが、それは間違いです。魔性の命は永遠に封魔具に囚われるわけではない。捕縛師が死んである程度の年月が経てば、封魔具の力も衰える。浮城の氷室とやらの守りは絶対ではありませんよ。いずれ封魔具から解放された命が再び凝ることになれば、人喰いの妖鬼は事によれば以前以上の力を持って再生します。その時、あなたはいないのですよ。それとも、ご自分は永遠に生きると思っておいでなのですか？　お力は申し分なくとも、失礼ながら命をひとつしかお持ちでないあなたには、それは難しいことかと思います」

ずけずけと、厳しいことを言う相手に、ラエスリールはそっと息をついた。

そこまで考えていなかった――など、到底言えるものではない。永遠に生きるなど考えたこともない。

それでも――彼らの忠告に従う気にはどうしてもなれなかった。

「貴重な意見、感謝する。だが、わたしは母さまとは違って、可能性がないとは考えていないんだ」

「流れはひとつきりだったのでしょう？」
「そうだ。それでも、だ。わたしには――」
ふい、と空を見上げてラエスリールは遥か東の方角を指さした。
「あの空に大きな亀裂が見える。そこから不安定な何かが世界に溢れ出しているのが見える……今の世界が揺らいでいるのが感じられる。緑蘭の流れがひとつしか見えなかったのは、この揺らぎのせいかもしれない」
淡々と、ラエスリールは自分の考えを告げた。
しかし、宋流や空也は勿論、セスランにもそれは突飛な言葉と受け取られたらしい。
「亀裂……ですか？」
「わたしには見えないが」
「残念ながら、わたしにも見えませんね」
「姫君にしか見えない亀裂の存在を信じろと……？」
これに、彼女は頭を振った。
「いいや、信じる必要はない。正直なところ、わたしだって信じたくないんだから。ただ、わたしには確かにそれが見えるんだ。そして、感じる……この感覚を無視することはわたしにとっては正しくないんだ。だから、消滅はさせない。この揺らぎが治まった時、後悔したくはな

いんだ」

東の空に走る亀裂――あれが実際に何を意味するのか、ラエスリールは知らないままだ。

だが、母の肉体で目覚める前、見た夢はきっとただの夢ではない。

自分があれを生み出したのだと、夢の中の声は告げた。ならば、あれをどうするのか、恐らく自分は決断しなければならなくなるだろう。

それがいつか、どのような形のものになるかはわからない。

けれど……だからこそ、可能性の芽は摘み取りたくないのだ。これまで数多くの魔性の命を奪っておきながら、虫のいいことだと言われようとも。

ふう、とセスランがため息を洩らしたのはその時だった。

セスランさま？

眼差しだけで問いかけると、ブロンズの髪の青年は呆れたような顔で、しみじみと言った。

「いえ、あなたとチェリクさまは似ていないようで、しっかり親子なのだなと、改めて思っただけです。こだわるところは全然違うくせに、こだわり方がそっくりです。まあ、実際の行動はチェリクさまのほうが豪快ではありましたがね」

くすくすと何を思いだしてか笑い出したセスランを見ていると、胸の奥からむかむかするものが湧き起こってくる。

それが自分のものでないことに気づいた時、ラエスリールは少し驚いた。

母さまが、こんな風に苛立ちを抑えきれないだなんて――と。

記憶の中にある母は、儚げで優しくて、怒りや苛立ちといったものを自分たちに見せたことのないひとだった。

昔はそういう人なのだと思っていたが、今にして思えば、母はきっと多くのことを呑み込んでいたのに違いない。

魔性の王でしかあり得ない父と、その父にそっくりな弟――そして無力な自らを恥じ、彼らに憧れずにいられず、同時に激しい劣等感を抱いていた自分。

そんな家族の中に在って、自分までもが我を出してはまとまりようがない――とでも、母は思ったのに違いない。感情を抑えて、自分より家族を優先して――きっと、家族の絆を守るために、母は自らを極力出さないようにしていたのだ。

だから、自分の知る母と、セスランが知る母の姿はきっと違う。セスランがラエスリールの知らない母の姿を語ろうとしているからこそ、母は苛立ちを隠せないのだ。

それは、自分に見せたくない姿なのだろう……だが、今のラエスリールはなぜか母親である以外のチェリクというひとのことを知りたかった。

初めて、素の彼女を知りたいと思った。

「セスランさま。母さまは、浮城で魅縛師をしていた頃、どんなひとだったんですか？」

だから、尋ねた——答えは、ラエスリールの想像を遙かに凌駕する内容で、彼女は驚嘆するばかりだったが。

「一言でいうなら人外魔境でしたね」

あっさりきっぱり断言されて、彼女はさすがに後悔した。

自分を産んでくれたひとが、とんでもない力を持っていたことはわかっていても、浮城における『人外魔境』の代名詞とも呼ぶべきひとから、まさにその言葉を贈られるようなひとであっただなんて——。

知りたくなかった——。

そう思うラエスリールはまだまだ甘いのかもしれない。

※

さすがに今回ばかりは我慢も限界だ。

甘んじて一発ぐらいは殴られてもらおう。

サティンは、じりじり、じりじりしながら、震える拳を握りしめながら思った。

いくらなんでも、心臓が停止した――遺体にしか見えない状態での再会など、一度だけで充分だ。いや、一度だけだって心臓に悪すぎた。寿命はあれで確実に十年は縮んだと思う。

なのに、だ。

一度だけでは飽きたらず、二度もやるとはいったいどういうつもりなのかと思う。

一度耐えた心臓なら、二度目も大丈夫だとでも思ったというのか。確かに肉体が砂塵と化して消滅していない以上、彼女の命が尽きていないことは確信できて、だから真実死んだわけではないことはわかってはいたけれど。

それでも！

ガンディアに向かったアーゼンターラたちが、冷たくなった彼女の体とともに戻って来た時味わわされた衝撃は、言葉で言い表せるものではなかったのだ。

死んでいないことと、生きていることは違う。

ラエスリールは確かに死んではいない。だが、あれこれ考え行動するための彼女の核とも呼ぶべきものは、その時すでに上級魔性の邪羅にすら捜せないどこかに隠されていた。

じっと、じっと、じっと待って……待ち続けて一年余り。

遅すぎると文句のひとつもぶつけなければやっていられないではないか。

「ああ、もう……拳で殴っても文句なんか言わせないわ」

ぶつぶつ、ぶつぶつ洩らすサティンのそばでは鎖縛がせっせと依頼地における記憶操作を施している。

「言わせるものですか。一発ぐらいじゃ足りやしないわ。そうよ、せっかく頬はふたつあるんですもの、両方殴ってやらないと不公平というものよね」

それくらいやらないと、首尾良く復活できたとしても二度目をやらかさないとは限らないわ……ここはしっかりきっぱり釘を刺しておかないと。

「サティン」

「なに、鎖縛、もう終わった？　なら……」

すぐにでもセスランのいる場所――つまり、そこにラエスリールがいるというわけだが――への瞬間移動を嬉々として命じそうな勢いの女捕縛師に、不本意ななりゆきで護り手となった鎖縛は「いや」と頭を振って彼女の誤解を解いた。

いつもであれば、もれなくつける皮肉や厭味を省いたのは、それだけ彼女の様子に危機感を抱いたからだ。余計なことを言えば、今の彼女なら無言で封魔具である矢尻のみを指弾でこちらに見舞いかねない。

一度ラエスリールの封魔鈴に封じられた命は、封魔具に敏感に反応する。封じられるか、本能的な反撃でもってサティンにまで害を及ぼすか――確率的には半々だ。そんな危ない橋を渡

るつもりなど毛頭ない鎖縛としては、ここは妙な忠告などせず、彼女のしたいようにさせることを選ばざるを得なかった。

「……もう少しだけ、かかりそうだ。幸い妖気に敏感すぎる人間はいなかったようで、どうやら妖化の心配はなさそうだと言いたかっただけだ」

いつもであれば、サティンが何より気にすることを告げたのは、別に皮肉のつもりなどなく、最初に言うつもりだったことを誤魔化すためだった。

だが、結果的にそれが彼女の意識に多少の冷静さを取り戻させることとなった。

「……それは良かったわ。そうよね、浮かれている場合じゃないのに、わたしとしたことが迂闊すぎるというのもだわ。鎖縛、時間は多少かかってもいいから、後日妖化したりしないよう、丹念に妖気を洗ってあげてちょうだい」

瓢箪から駒の結果に、鎖縛は「まあ、いいか」と淡泊な感想を抱いた。

少なくともこれでしばらくは、サティンのぶつぶつ独白と『まだかしら、まだかしら、まだかしら』という思念攻撃からは解放される。

彼女と違い、鎖縛にはラエスリールとの再会を待ち望む理由はないので——逆に会いたくない理由のほうが多い——少しは気が楽になる。

と——ほっとしたのも束の間。

サティンの口は閉ざされたものの、今度は体のほうが勝手に望みを主張し始めた。腕組みした指がせわしげに動き、靴の踵は苛立たしげに音を立てる。

それだけ、焦れているのだ。一刻も早く会いたいのだと体が訴えているのだ。

それでもサティンは、衣於留の言葉を聞いた時、即座にラエスリールのもとへ跳ぶことを選ばなかった。

アンカーナの民を救うためとはいえ、必要以上に妖気を浴びせて眠らせた依頼地の人間たちを優先した。

人間であればそれは当たり前の行為かもしれないが、鎖縛にとってはそれは驚くべき自律心だった。魔性は自らの望みを優先することに何の躊躇いも覚えたりはしないのだから。

決して口には出さないが、彼女のそういうところを鎖縛は認め、敬意すら覚えている。

だからこそ今も、彼女の意に沿うよう、動いているのだ——が。

それとは別に、鎖縛は先の展開に楽しみを抱いてもいた。

一度は忠告しようと思ったが、それを言わせなかったのはサティン自身だ。ならば、いつもこき使われている分……顎でこき使っているとまで言われたのだ、多少の意趣返しは許されるに違いない——。

鎖縛はその瞬間のサティンの反応をより楽しむために、余計なことはいっさい口にせず、た

だ黙々と作業に徹した。
そして――。
果たして、鎖縛が期待した通りの場面が繰り広げられたのは、この少しあとのこと。
「ラスのばかぁ！　馬鹿、馬鹿、馬鹿、馬鹿！　今度こそ、絶対一発殴ってやるって思ってたのに、こんなのってば酷すぎるーっっ！」
ワンワン泣きながら、サティンは再会した妹分に思い切り抱きついて――。
そして、予定していた行動――最低一発、できれば二発殴るというものだ――を諦めざるを得ない状況を声高に非難していた。
「なんでまた、チェリクさまの体なのーっ!?　ラス本人の体ならっっ！　どんなに綺麗に育ったとしてもっっ！　ここまで育ったのはわたしのおかげもあるのよー、だからほっぺたつねったって、指でぷにぷにしたっていいのよー！　って、言えるからっっ！　好きなだけつねったり押したり引っ張ったりするつもりだったのにぃ！」
当初の予定より、格段に過激さに欠ける内容を、けれど半ば泣きながら訴えるサティンの姿を見つめながら、鎖縛は肩から力が抜けるのを感じずにはいられなかった――。

3

「あら」
浮城の一室――主に書面による依頼を処理する事務室で、エレシアは一通の封書を手にしたまま声を上げた。
「どうしたの？」
隣の席の同僚が問いかけるのに、彼女は手にしていた封書の差出人の部分を示した。
「この差出人って……確か、上の判断で断った件の依頼人よね。もしかして、再度依頼してきたの？」
問いかけながら、女性は気が重そうに息を洩らす。
一度上が断ると判断した以上、何度依頼を繰り返しても引き受けてもらうことは難しいことを彼女たちは知っている。
今、浮城では慢性的に実戦要員が不足している。

魔性に因る被害が多すぎて、とても全ての依頼に応じきれないのだ。

仕方なく、上層部は依頼を篩にかけ、優先順位をつけて引き受ける依頼を選ぶようになっている。一度断られたということは、順位を低く見積もられたということだ。次々に新たな被害が生じている以上、その見直しはまずかなわない。

だが、実際に魔性に苦しめられている者に、そんな事情を説明しても意味がない。自分や家族の命がかかっている場面で、「あなたの依頼は緊急性が低いため、お受けできません」と言われて納得などできるはずがないのだから。

可哀相だが、一度切られた依頼が再検討される可能性は低い。だから何度依頼を繰り返しても、彼らの願いが聞き届けられることはまずないのだ。

「……上も、お断りの文面が全文頭に入るぐらい書いてみれば、これがどれだけ気の重い仕事かわかるでしょうにねえ……」

ご愁傷さま――。

エレシアに同情的な言葉を向けながら、しかし同僚は自分が代わるとは決して口にしない。

彼女の言葉通り、依頼を断る文面が全文頭に入るほど、その仕事はすでに日常となっているのだ。

しかしエレシアは「違うのよ」と同僚の勘違いを訂正した。

「なぜか礼状なのよ、これ」
彼女の意外な言葉に、同僚の女性が「はあ？」と声を上げた。
「依頼を断られたのに、なんでお礼の手紙が来るのよ!?　恨み言連ねた手紙ならともかく……あり得ないでしょう！」
「だから、あなたにも確認を取ったんじゃない……この住所のこの差出人、確かに断ったはずなのよね。あとで上層部が見直したってことはなかったわよね」
わけがわからないのはエレシアも同じだ。
「ないわよ！　この依頼人が肩を落として帰るのを見送った記憶があるもの！」
「そうよねえ……」
いったい何がどうしてこんな手紙が来たのか——全くもって謎である。
その時、そばを通りかかった別の女性が声をかけてきた。
「もしかして、覚えのないお礼状がまた届いたの？」
この言葉にエレシアたちは目を瞬かせた。
「また……？」
「またってことは、前にもあったの？」
ふたりが尋ねると、その女性はあっさりと肯定する。

「わたしが気づいたので二通かしらね……最初は何かの間違いかと思ってたんだけど、あることに気づいてからは、なるべく口に出さないようにしてたのよね。ちょっと見せてくれるかしら？　……ああ、やっぱり」

手紙の住所を確認すると、女性は得心がいったとばかりに頷いた。

「なにが、やっぱりなの？」

好奇心を抑えきれずに問いかければ、その女性は声をひそめて「内緒よ。未確認情報でもあるし」と告げてきた。

「わかったから……何を知ってるの？」

そう尋ねたのはエレシアの隣の同僚の女性だ。

「あのね、この住所って、この間サティンが向かった依頼地と比較的近い場所にあるの。わたしが処理した手紙のほうはね、セスランの依頼地に近いところの『お断り物件』だったの。偶然かなと思ったんだけどね、二通ともそうだったし……考えて見たら、あのひとたちには大変な護り手がついてるじゃない？　寄り道してもこちらにばれないからくりとか仕掛けてあるのかなぁって……」

その言葉に、エレシアは思わず息を呑んだ。

確かに、サティンとセスランには特別な護り手がついている。正式に浮城に籍を持っている

わけではないそうだから、護り手と呼ぶのはおかしいかもしれないが。

黒髪黒瞳の美男美女――見ているだけで魂を抜かれそうな、脅威の美貌を誇る……強大なる力を持つ妖貴がふたり。

「それって、あのふたりが勝手に断ったはずの依頼を片付けてるってこと？」

同僚が、難しい顔で問いかけると、件の女性は「だから、未確認だってば」と人差し指を唇に押し当てながら答えた。

その気持ちが、エレシアにはわかるような気がした。あのふたりのことだから、そのことを尋ねられたらあっさりと認めてしまうかもしれない。だが、聞かされた側は「そうだったの」と謎が解けたことを素直に喜んではいられないのだ。

何しろ、依頼でもない件で魔性を封じたり殺したりすることは、自らの命がかかっている場合を除いて原則禁じられているのだから。

その罰則は決して軽くはない……まあ、あのふたりなら尻尾を摑まれるような下手は打たないに違いないが。

問題は、そのことに勘づいてしまった自分たちだ。いや、すでにひとりは彼らに利することを決めたようなので、残るは自分ともうひとりの同僚だ。

さて、どうしたものだろう――首を傾げてはみたが、エレシアは自分のなかですでに答えが

出ていることに気づいていた。
何しろ口元が笑いそうになって困るのだ。
やってくれたものだわ！
叶うことなら、大声で快哉を叫びたいぐらいだ。
数年前なら、きっと違う風に感じただろう。あの頃の浮城は、引き受けられない理由を明確に示していたのだから、それを敢えて破る行為に賛同はきっとできなかった。
けれど――今の浮城の状況を考えるなら。
「悪いけど、その手紙返してもらえる？」
同僚の女性に手を差し出しながら、問題の封書を入れるために、エレシアは鍵付きの引き出しを開いた。
「エレシア、どうするつもりなの？」
隣の女性が尋ねると、彼女はにっこり笑って言い切った。
「心当たりのない礼状なんか、わざわざ残しておく必要はないでしょう？　上のひとたちだって、別に読みたいとは思わないんじゃない？」
この言葉に、同僚ふたりの内ひとりは「わたしも実は同じ考えなの」と同意し、もうひとりはといえば――。

「……そうね、今度食堂あたりでセスランかサティンのそばで、ついうっかり『お断り物件』に関する愚痴とかこぼしてみようかな……」

と言い出した。

「それなら、数人で愚痴大会にしたほうがいろいろ盛り上がるんじゃない？」

急に飛び込んできた第四の声に、ぎょっとして振り返った三人は、同じ部署の同僚が数人背後に立っているのを認めて目を瞠った。

「……『あそこは若い娘ばかり狙われているのに、辺鄙な土地だからって断られて可哀相』とか、そういう愚痴なら腐るほど抱え込んじゃってるしねえ、あたしたち」

「思わずうっかり盛り上がっちゃうかもしれないわね」

「きっと、そばに誰がいるかなんて気にしてられないわね」

「別にあのふたりに限らなくても、カラヴィスのお姫さまのそばでもいいんじゃない？」

等々、等々。

エレシアは思いがけない同志の多さに、思わず唖然とし……それからくすくす笑い出した。

「心当たりのないお礼状がまたもらえるように、わたしたちは張り切って愚痴をこぼしまくりましょうか」

誰かが口にしたその台詞に、集まった皆がどっと笑った。

こうしてセスランたちの『寄り道』は、事務処理班の面々の協力あるいは黙認によって、さらに隠蔽されることとなった。

それで全ての魔性被害に対応できるわけでないことは、皆も知っていたけれど、ほんの少し目を瞑ったり、ついうっかり口を滑らせることで、助からないはずだった命のいくつかが助かることになるのなら、無意味ではないと……彼女たちはそう思ったのだ。

※

まただ。

肌の粟立つ感覚を、乱華は緋陵姫のなかで感じ取り焦燥を覚える。

独特にして覚えのあるそれは、世界を震わせる力が放たれた証だ。

誰かが魅了眼の力を解放したのだ。

魅了眼の力の放つ波動は、乱華にとって間違える余地のないものだ。かつてその力を揮い、放っていたからこそ彼がそれを見誤ることはない。

誰だ。

乱華は不安を抑え込みながら、必死にその力のもとを辿ろうとした。

魅了眼は浮城の魅縛師たちが持つ魅縛の異能と似て非なる力である。魅縛の力が効果を発揮するのは魔性や人間、力が強ければ動物にも及ぶが、それは主に意を持つ存在にしか働きかけない。

魅了眼は違う。

力の強弱によって、対象を選ぶことはあるが、本質的な魅了眼の力は理解と支配だ。対象は意を持つか否かに左右されることはない。

十全な理解が伴えば、魅了眼は意を持たぬ無機物にも働きかけることができる。あるいは空気そのもの……強大であれば、世界にさえ力を及ぼすことは可能だ。

そのことを乱華は父に教えられた。

昔——両親の持つ魅了眼を唯一受け継いだと思われていた頃、父は彼に魅了眼の本質とでも呼ぶべきものを伝えたのだ。

幼かった彼には、その内容を完全に理解できないことなどわかっていただろうに、それでも伝えたのは何らかの枷をつけるつもりだったのか——。

父の心はわからない。今となっても理解できぬままだ。

それでも、父が自分を見つめる瞳に安堵の色があったことだけは、しっかりと覚えている。

『お前の力が、お前の手に負えぬものでなかったことは幸いだ』

父はそう告げて、一瞬どこか遠い何かを見極めるように目を細めた。
『この力は強さにもよるが、理解と力に不足がなければ、世界そのものを変容させることさえ可能とするものだ』
世界の変容――それは当時の乱華にとって理解の範疇を大きく超えた話だった。
『だが、恐ろしいことに、これは与えられた者の意識と感情に大きく支配される力でもある。理解が追いつかなくとも、激しい感情や望みのままに揮われれば、世界を切り裂き滅ぼす刃とさえなり得るのだ』
たとえば大きすぎる絶望、宥めることさえできぬ憎悪、誰にも何にも癒し得ぬ孤独――そんなものに心を支配された者が持てば、この力は世界を滅ぼす。
淡々とした口調で告げられた内容は、当時の乱華には意味としては理解できるが、実感の伴わない……伴いようのないものでしかなかった。
なぜなら当時の乱華はすでに、ある程度自身の意識を制御する術を持っており、それを失うことなど考えられなかったからだ。
だが、当時世界に魅了眼を持つ存在は父と彼自身のふたりしか存在しなかった。
父は不安定な感情制御しかできぬ人間との間に生を受けた自分を危惧してこんなことを言い出したのだろう――そう判断した乱華は「父上の教え、心に刻みます」と答えたのだ。

父はそんな彼の判断に、是とも非とも告げなかった。

ただ、遠くを見つめる眼差しで、こんなことを口にした。

『わたしはかつて、世界を滅ぼしかねない魅了眼の使い手を知っていた。その危うさと眩さに現実に目にせずにおられなくなり……一目見るために足を運んだ。生まれてからこれまでに、悔いがあるとすればその行動だけだ。目になど……しなければ良かった。目にするべきではなかった……』

淡々とした口調のなかに、子供ながらに乱華も何かを感じ取った。

父が心底その行為を後悔しているのがわかった。それでいて、父はその選択を悔やむ以上に喜んでいるのだ。

『父上？』

父の複雑な心境が理解できずに困惑する乱華の頭を、父である魔性の王は優しい仕種で撫で下ろした。

驚きに目を瞠れば、父は苦笑交じりに呟きを落とした。

『……今さら、詮ないことを言ったな』

そうして、父はそっと目を伏せた。

『時の支配を委ねられたあれでない以上、わたしにはやり直す術はない。わたしは危険な芽を

摘むのではなく結果として増やしてしまった……そのことを心底悔いながら、やり直しがきかぬことを全存在で歓喜している……』

『父上……』

『唯一の救いは、お前が以前のわたしにそっくりだということだが……いや、だからこそそれは救いにはならぬのか。まあ、いい……危険すぎる力のひとつは消え、今ひとつは眠らされたままだ。世界に存在するこの力が、わたしとお前の持つふたつきりである以上、わたしが下された命に反する事態は起こるまい』

幼いあの日――幼い自分に父は何を思ってそんなことを告げたのか――。

わからない――わからない。

だが、わかることもある。

ざわり。

世界を変容させ得る魅了眼の力が解放された。

今の自分にその力はなく、この気配は父のものでもない。

だとしたら、この気配を放つ者は――その意味は。

たったひとつしか考えられない。

「……姉上……」

胸を締めつけるただひとりのひとを怒りと混乱に見舞われた感情のなかで呼ぶ。

「姉上……！」

人間に過ぎない母から受け継いだ黒髪と体と無力さに、常に劣等感を抱いていた……それでも乱華にとってはかけがえのない愛しい存在。

母の死がきっかけで生き別れ、再会を果たした時、彼女は乱華の知るひとではなくなっていた。

魔性を死に至らしめる凶悪な刃を自らの支配下に置き、魔性ではなく人間を選び取り、その隣で守る権利さえ、別の男に許していた……。

乱華以上の魅了眼の力を揮い、人間などのために本来の眷属を手にかけ続け——ついには世界さえ敵に回してしまった凶眼の主。

ラエスリール。

それでも父と彼が彼女を守るための繭を用意したというのに——。

それすらも、内側から引き裂くような真似をして。

「ラス……！」

緋陵姫に対する想いとは違う、もっと制御の利かない凶暴な感情を抑えこみながら、乱華はきりきりと唇を噛みしめた。

これ以上、彼女の暴走を許すわけにはいかないと、乱華は思った。
次に世界が震えたら――その時は。
「どんな肉体を使っていようが、二度と使えないぐらいに千々に引き裂いてやりますよ。もう大丈夫だとわたしたちが判断するまで、何度器を変えようと……」
あなたがもうイヤだと叫ぶまで……いや、たとえ叫んだとしても。
「壊してあげます」
決意に満ちた乱華の声だけが、室内に響き渡った――。

幕間

璃岩城

深い深い地の底に、広大な空洞が広がっている。

あたりを包むのは漆黒の闇と妖気――人間であれば、一息で絶命するに違いない、それほど濃密な妖気が息づくそこに、巨大な奇岩が聳え立っている。

地底であるはずだというのに、その頂が見えぬほどに高く伸びたその岩が、先ほどまでそこに存在していなかったなど、いったい誰に想像できるだろう。

そして、そこに在ってしかるべきものが忽然と姿を消した、など――。

魔性にあってすら、それはあり得ないことだった。なぜなら、それは消えていいものではないからだ。この空間が誕生した瞬間から、空間そのものを支配する圧倒的力を放ちながら君臨し続けてきたそれは、しかし今、その姿を消していた。

ほんの一時、主の命によりその場を離れていた漆黒の魔性たちは、突然の異変に少なからぬ衝撃を受けていた。

「そんな……まさか」
「信じられぬ！」
彼らにとって、そこは馴染んだ場所であるはずだった。
それが、ほんの少し離れた隙に、全く見知らぬものに変わり果ててしまうとは、今の今まで考えたこともなかった。
「璃岩城が……！」
「我が君の城が……」
本来そこにあるべき紫紺の妖主の居城――璃岩城の姿が忽然とその場所から消えている。
代わりに大きさだけは同じほどの奇岩が聳え立っているのを、彼らは一様に不安な面持ちで見つめた。
目くらましかと思い、意識を凝らして見つめた彼らは、しかしそれが巨大で奇怪な形をしただけの岩塊に過ぎないことを確認するばかりだった。
城を守っていた妖貴たちを外に出し、その隙に居城を隠してしまった主の意図を考えるも、あるべきものがない事実に、不安だけが大きく育つ。
自らの居城にほとんど居着かなかったという柘榴の妖主と違い、人形操使を得意とする紫紺の妖主は城内で技を練ることが多かったが、それでも城を空けたことがないわけではなかっ

た。

この一年ほども、時折側近に声を送ってくるだけで、その姿を目にした配下はいない。魔性の王は、人間の王とは違う。城や玉座がなければそうと認められないような底の浅いものではない。

彼らはその圧倒的存在で、自らが何者であるかを示すのだ。

居城など、そういう意味では付け足しにすぎない。

彼らに城など必要ない。必要とするのは、彼ら自身ではなく、彼らを主と慕う配下の魔性たちだった。

忠誠を誓った主と繋がっていたいと願わずにおれぬ者のために、城は存在するようなものだ。そこに在れることにより、主に自らが受け入れられている事実を再確認し、より尽くす機会を与えられる時を待ち望むための場所――。

それが、突然消え失せた。

その意味するところは何なのか。主は自分たちを不要と断じたのか。それともこれは主の気まぐれで、さしたる意味は実はないのか。

あるいは自力で探し出してみろという、主が仕掛けた遊びなのか――。

妖貴たちは主の唐突な行動に困惑を隠せずに、奇岩の前に立ち尽くしていた。

「我が君……」

洩らす声は不安に揺れ、強大な力を誇るはずの漆黒の魔性たちを、頼りない迷子のように見せていた――。

※

生ける気配ひとつない広大な宮殿に、かつん、かつんと靴音が響く。

その気になれば、音なく移動できる魔性の王は、あえてそれを楽しんでいるようだった。

かつん、かつん――音はゆっくりと響く。

「……ふむ、こうして見ると、なかなかに広いな」

紫紺の双眸を周囲に向けながら、藍絲が感心したように呟いた時、背後から別の声がかかった。

「さようでしょうとも。数多い貴方の配下、数多い貴方の作品……その全てが集おうとも決して窮屈に見えぬよう、あなたが広げつづけてきた城なのですから」

それは、ここで聞こえるはずのない声だったが、藍絲は驚いた様子もなく背後を振り返ると微笑みかけた。

「やあ、久しいね、津々螺。わたしは君にも声を届けたはずだが……？」

津々螺と呼ばれた黒髪の女性は、それには答えず肩を竦めた。

その仕種は藍絲が時折見せるものとそっくりだった——いや、似ているのは仕種ばかりではない。もし彼女が男性で、紫紺の色彩を纏っていれば、ふたりの見分けは難しいに違いない……それほどに、津々螺は藍絲と酷似していた。

「貴方の声にただ従うようでは、到底貴方の影は勤まりませんでしょう？　ご心配には及びません、これまで通り、貴方の不在など気にならぬよう、ほどよく気配で彼らは宥めてやりましょう。どうせなら、この奇行の理由も適当に言っておきましょうか？　今頃皆不安に駆られていることでしょうから」

くすくすと笑いながら告げられた内容に、しかし藍絲は頭を振った。

「別に、必要ないだろう。単に客を迎えるのに、彼らには一時城から出ていてもらいたかっただけなのだから」

客、という一言に、津々螺の眼差しが一瞬厳しいものとなる。

「もしかして、わたしまで外に出そうとなさったのは、その客人が理由ですか？」

答える必要はなかったが、藍絲は自らの影を勤める妖貴の忠誠に免じてはぐらかさないことにした。

「客人の邪魔をしなければ、いてくれても構わないのだけどね……どうもこの数年というもの、心配性の者が増えたようだから――」

この言葉に、津々螺が肩を震わせた。

「当たり前でしょう！　麗しい貴方の首が切り落とされるなど、二度とあってはならぬことです。あの時ばかりは、貴方の気まぐれを呪ったものです。なのに――」

怒気も露な津々螺の声に、藍絲の表情は変化を見せない。

「気まぐれは我らの特権、保身など考えて遊びを楽しめるものかね」

「あの時の貴方の場合、危険を承知でらしたようには見受けられませんでしたが？」

鋭い指摘に、藍絲は思わず苦笑した。

確かにあの時、藍絲は危険があるなどと考えてもいなかった。相手を甘く見ていた。たかが半人半妖の娘に何ができるものか、と――。

その結果、藍絲は心臓ひとつに宿る命を根こそぎ破妖刀に奪われた。かつてない失態だった……口に出して認めることはないが。

「油断は禁物だという教訓にはなったかな。たとえどれほどちっぽけな存在でも、必死になった時の力は侮れない。そのことは肝に銘じておくよ」

そう……だから、これから招く客を相手に、手を抜くつもりは一切ない。

跪いた相手からの頼みだ。最高の舞台は用意する——配下の邪魔も入らせない。客人のもてなしはこの自分が務めよう。

だが、頼まれたのはそこまでだ。それ以上の望みは聞いていない。

第六の妖主として生まれた少女の目的は薄々気づいているが、それに従う義務までは負っていないのだ、今はまだ。

うっすらと笑う彼の姿に何を感じ取ったのか、津々螺が深い息を洩らした。

「貴方の楽しみを奪うつもりも邪魔するつもりもありはしません……ですが、この舞台に貴方はあまり気乗りしてらっしゃらないように見えます。いったい何があったのです？」

真摯な光を漆黒の双眸に浮かべ、問いかけてくる側近に、藍絲は沈黙を答えに代えた。

「ひどい方ですね、それすらも教えてはくださらないのですか」

「知ったところで何も変わらないのだよ」

そう——鍵を握る者たちが動かない限り、この流れは止まらない。

世界の要石のひとりである自分が蚊帳の外に置かれる日が来ようとは——不思議な感覚は不快を示すものなのか、それとも未知に対する興味を示すのか。

どちらにせよ、自分のなすべきことは決まっている。

「さて、そろそろ可哀相な迷子たちを宥めに行ってやってくれないか？　君はわたしが影と認

めた唯一のひとだ、君が纏えば誰もそれがわたしの影などとは思いもしないだろう」

自らの姿と気配を纏うことを許したのは津々螺ひとりだ。

だからこそ、ここに置いておく気にはなれない。雛の君に余計な疑念を抱かせる真似はすべきではないのだ。膝を折り、真名を告げた以上、彼女は藍絲の命をその手に握っているも同然なのだ。勘違いされて短気を起こされるのはありがたくない。

主の言葉に、津々螺は何かを言いかけたが、結局は従った——そうさせるだけの力を、この時藍絲は放っていたのだ。

だが、妖主の影さえ纏う稀有なる妖貴は、黙っては引き下がらなかった。

「参ります……が、貴方が直々に出迎えるという客人の姿を見るぐらいのことは許していただけるのでしょうね？」

それはすでに問いではなく、確認の言葉だった。

これぐらいの譲歩はしてもらう——はっきりとそう言い切ったのだ。

「仕方ないね」

藍絲は肩を竦めながら応じた。

恐らくは見るだけではすまなくなるだろうが……それぐらいは愛嬌というものだろう。津々螺は愚かではない。主である自分の意向に反する真似などするはずもないのだし。

それで客人が万が一ここに辿り着けないのなら、最初から自分の出番は早すぎたということだ。その場合、責められるのは時期を見誤った雛の君ということになる。未熟者の相手をする気はあるが、未熟すぎるとなれば話は別だ。

せめて、自分が力を揮うに値する人物であることを、自ら示してもらわなければ——。

「だが、津々螺……くれぐれも期待しすぎないように。鍛えるように頼まれた、成長途中の雛なのだからね、相手は」

鍛えるつもりなどないのだが、そこまで明かす必要はない。

そんな藍絲の心中を知ってか知らずか——津々螺は一際艶やかな笑みをたたえた。

「貴方の首を落とした姫君も、あの当時はちっぽけでみすぼらしい貧相な雛鳥でしたよ」

そう言い置くと、漆黒の女性はするりと宙に溶け込むように姿を消した。

藍絲は思わずくつりと喉を鳴らす。

最早聞こえぬと知れた相手に、彼は呆れたようにこう告げた——。

「だから、津々螺。あれを念頭に置くこと自体、すでに期待しすぎだと言うのだよ——」

と。

聞いているのは、壁面に飾られた十万にも及ぶ、膨大な数の人形たちだった。

目覚める時を待つそれらは、完全にカーヴィアの住民の姿を写し取ったものばかり。

不本意な仕掛けであろうと、影糸術を用いる以上藍絲に妥協の二文字はなかった。
たとえ……完成した暁には処分するつもりであっても、不完全な作品に命を吹き込むなど、彼には考えられないのだ――。

駆り立てる声

ガンダルース大陸最大の版図を誇る大帝国マグァーラには、浮城から直接移動できる転移門がふたつ存在する。

正確には、ひとつはマグァーラの国境から少し離れた別の国に設置されているのだが、代々の皇帝による版図拡大により、事実上西部を目指すか東部を目指すかで二つの転移門の利用が可能となったのだ。

第三の都市カーヴィアは、首都からは随分離れた東部の街である。

宝飾品の細工職人が集まってできた小さな街だったカーヴィアは、今から二百年ほど前、当時のマグァーラ皇帝が主導した交易路拡大事業のおかげで一躍脚光を浴びた。カーヴィアの宝飾品の質の良さと職人の技術の高さに、多くの商人が注目したのだ。

以来、カーヴィアは発展し続け、ついにはマグァーラ第三の都市とまで呼ばれるようになったのだ。

アーゼンターラたち一行は、このカーヴィアに向かうため、アシュラッド公国国境に配置された転移門を利用することとなった。

アシュラッド公国はかつてはガンダルース大陸の五大国のひとつに数えられていたのだが、マグァーラの版図拡大に伴いその地位を追われ、今では小国にすぎないが、皮肉にもカーヴィアをはじめとするマグァーラの大都市に近接していたため、転移門の移設は行われなかったのだ。

今では『マグァーラの東部門』とさえ呼ばれている転移門は、アシュラッドの西部国境の街イシエドの外れに繋がっている。

人目に触れぬよう、門は鬱蒼と茂る木立の中に設置されていたが、それでも四人はアシュラッドに降り立った瞬間、恐らくはイシエドに起こったであろう異常に気がついた。

生暖かい空気は、明らかに普通ではない臭いを木立の奥まで運んでいた。

鉄錆を思わせるそれ、木の焦げるそれ……そしてあまり考えたくないモノが焼ける臭気。

気づいた瞬間、四人はイシエドのある方向へと走り出していた。

「被害があったのはカーヴィアだったんじゃないの!?」

スラヴィエーラが苛立たしげに声を上げたが、眷属である——つまり人間——三人が答えを持っているはずがない。

答えたのは、若草色の髪と鴇色の瞳、さらには蜉蝣の羽を思わせる薄く透明な六葉の羽を持つ妖鬼の少女だった。

スラヴィエーラの護り手である未羽だ。

「こっちは今日、別口で起こったんでしょうね。まず間違いなくカーヴィアの件とは無関係よ——ああ、なんて品のない臭いなのかしら!? ここまで妖気が強くなかったら、野蛮な人間どもの強盗団かと思うところよ！ 嘆かわしい……これが、わたしと同じ種族がやらかしたことだなんて！ 血の臭いに火事、肉の焼ける臭いまで！ 品がないにもほどがあるわ！」

心底憤慨している様子の未羽の言葉は、しかし人間の立場から言わせてもらうと、かなり結構奇天烈だった。

「未羽ちゃーん。嘆かわしいってのはわかるにしても、野蛮な人間どもとか品がないとかってナニ？ 未羽ちゃんの持ってる人間像ってば、もしかしてけっこうひどい？」

こんな時でも——因みに人間四人組は全員全力疾走中だ——茶々を入れずにいられない性分なのか、それとも素朴な疑問なのか……この場にそぐわない発言を口にしたのは刺青のマイダードの異名を持つ青年だった。

「別に、現実を知ってるだけよ。そういう輩がいるのは確かでしょう？ 眷属殺して奪って焼いて、それで平然としてるケダモノたち。わたしはスラヴィや皆のことは好きだけど、人間の

中にはそういう輩がいることを知ってるから、人間が好きとは言わないの、それだけのことだけど？」

何か反論がある？

挑む風もなくごく自然に放たれた問いに、さすがの捕縛師も降参する。

「イエ、アリマセン。ゴメンナサイ」

……口調がおかしいのは別に棒読みの台詞というわけではなく、どんな声音で答えるべきかわからないせいだった。

「別に謝られたいわけじゃないけど……と、いつもの癖で忘れてたけど！　なによ、ここには蜜里がいるんじゃない！　蜜里！　あなた妖貴なんだから、一瞬でわたしたち全員イシエドに移動させられるんじゃないの!?」

この未羽の言葉に、初耳だったアーゼンターラは驚いた。

「え、なに、蜜里。あなた、そんな凄いことができるの!?　できるのなら、お願い！」

勢い込んで頼み込んだアーゼンターラに、蜜里が物凄く気まずそうに答えた。

「……で、できない」

「できないって、妖貴なのにそんなわけないでしょ!?　言ってはなんだけど、あなたの纏ってる力、わたしから見てもわかるぐらい強っ大っなのよ!?　格下の妖鬼だって、わかるぐらいな

のに、なに力を出し惜しみして……」

そう叫んだのは未羽だった。

妖貴の蜜里にここまで彼女が言いたいことをぶつけたのは、アーゼンターラの記憶では初めてのことだ。それだけ彼女も焦っているということだろう。

しかし、もっと驚かされたのは次の瞬間の蜜里の反応だった。

「出し惜しみなんかしてないわ！　わたしは……わたしはっ！　ターラのためだったら限界までだって力を惜しんだりしない！　だけど……だけどっ！　わたしはこれまで、誰かを連れて瞬間移動なんてしたことがないのよ！　それなのに、ターラを……人間を？　駄目よ、無理よ、できっこないじゃない！　人間なんて繊細ですぐに壊れちゃうのに、試して壊れても直せないのに！」

蜜里の言葉もどこかおかしい――。

それとも、これまで彼らが言動に気をつけていただけで、本音はこうしたものだったのを綺麗に隠していただけなのだろうか。

そうだとしたら、その判断は正しい――。常日頃から何かがおかしいと感じている相手を素直に信じるには時間がかかるだろうから。だが、人間と近い感覚でつきあってきてそういうものだと認識した今になって、「実は違う」と言われても、何かが微妙に落ち着かない。

「えーっと」
すぐに反応できなかったアーゼンターラに罪はないだろう。
スラヴィエーラも「あー」と――全力疾走中なのに！――困ったような声を上げた。
「……できないことを体力を使って議論しても始まらないだろう」
一番の正論を口にしたのは、これまで護り手ともども無言を貫いていたオルグァンだった。
「そうだね」
「とにかく走るしかないってことだね」
スラヴィエーラとマイダードがすかさず同意し――話はそこで終わるはずだった。
ところが、だ――。
「え？　やだ、なに――!?」
蜜里が困惑の声を上げたのは、その時のことだった。
何事かと護り手の小さな姿に目を向けたアーゼンターラは、蜜里の胸元が金色に輝き始め――それが見る間に大きく育つのを見た。
あの時と、同じだった。
飢餓に支配されたラヴィスの街で、我を忘れた街の住人たちに襲われた時――人間相手に手ひどい反撃ができるはずもなく、いずれ劣勢に傾くこと確実な状況にあった時、不意に溢れて

自分たちを救った金色の光――。
眩い光にアーゼンターラは思わず目を閉じた。
そして、再び目を開けた時――周囲の景色はまるで違うものに変化していた。
そこは、先ほどの木立のなかではなかった。
そこは――。
「いやあぁぁぁっ！」
すぐ近くで、若い女性の悲鳴が聞こえた。
反射的にその場を駆け出したのはアーゼンターラの他に、三人いた。
スラヴィエーラとマイダードとオルグァンと――。
金色の光は、一瞬にして彼ら全員をイシエドの街に転移させていたのである――。

※

何が起こったのか、いったいそのからくりは何なのか――。
考える余裕はなかった。
アーゼンターラもスラヴィエーラもマイダードもオルグァンも。

ただ必死に悲鳴のもとへと駆け出していた。
そうして、すぐに見つける。
街の女性が、石壁を背にして恐怖に震えていた。
彼女の目前に迫るのは、明らかな異形――大きく裂けた口の端から、だらだらと流れ落ちる涎を見れば、彼女に恐怖するなと言うほうが無理である。
ぽたり、ぽたりと涎が石畳に落ちる。
「お前……柔らかくて喰いやすそうだな」
ずるりと舌なめずりしながらそう告げられて、平常心を保てる人間などまずいない。
「あ、あ、あ」
胸を押さえながら、女性は苦しげに声を上げ、がくりとその場に頽れた。
無防備になった女性を引き裂くべく、妖鬼が長く鋭い爪を伸ばしたその刹那――。
「やめなさい！　崖果！」
響いたのは、甲高い少女の声だった。
アーゼンターラではなかった。蜜里でもなかった。
声に反応して、のろのろと振り返った妖鬼が真っ直ぐに見つめたのは、若草色の髪を持つ妖鬼――未羽だった。

「未羽？　未羽か……？」

それまでの、食欲に支配されていた気配が嘘のように晴れた、それは懐かしい大切な友人を見いだした者の顔であり声だった。

しかし対する未羽の表情と声は対照的に暗かった。

「ええ……そうよ、崖果」

この遣り取りに驚かされたのはアーゼンターラだけではなかった。

「……知り合いなの？」

スラヴィエーラが護り手を気遣うように尋ねると、鴇色の瞳に苦しげな色を浮かべて少女は頷いた。

「昔昔の、ね……人間に害のない悪戯を仕掛けるのが好きで、血肉には興味のない愉快な仲間だと思っていたんだけど……」

どうやら変わってしまったみたいだわ。

続ける声は低く、ある決意に満ちていた――浮城の護り手として、この知り合いを看過するわけにはいかないと思っているのがはっきりと伝わってくる。

「どうしたんだ、未羽？　そいつらは何だ？　ひどくイヤな気配と美味そうな匂いをさせるやつらじゃないか。お前の獲物か？」

突然現れた古い知己に崖果と呼ばれた妖鬼は、アーゼンターラたち四人を興味深そうに眺めた後、そんな風に問いかけてきた。

彼には未羽の決意は伝わっていないのだ。

でなければ、その後こんな言葉が続くはずがないのだ。

「やっぱりお前も試してみる気になったんだな。そうだよな、こんな風に胸騒ぎがするのに、試さずにおけるわけがないんだ。人間の血や肉が、実際はどんなに甘いか、知らずにすますだなんて馬鹿なこと……」

できるわけがない。

にたり、と笑った崖果の口元から、涎が流れ落ちる。

その中に一筋の赤い色が混ざっていることに気づき、アーゼンターラは唇を噛んだ。

彼はすでに人間を手にかけ、血肉の味を覚えてしまったのだ。

「崖果……何を言っているの？　人間の血肉が甘いですって？　あんなに気持ち悪いと言ってたじゃないの！　どうして急にこんなことを……」

それでも――未羽は尋ねずにいられなかったのだろう。

久しぶりに再会した友人が、忌むべき行為に手を染めていたのだ。理由を知りたいのは当然というもので――けれど。

ここは旧交を温めるのに相応しい場所ではない。
「蜜里！」
「わかってるわ！」
漆黒の少女が、力を揮い、妖鬼の足下に倒れていた女性の体を素早く引き寄せる。
「オルグァン、受け止めて」
少女の声が告げ終えるのと、宙を滑るように移動していた女性の体が、がくんと重力の虜となって落下し始めたのはほとんど同時だった。
屈強な破妖剣士は、答えるより先に女性を受け止める。
この行為に、崖果は不満の声を上げた。
「なんだよ、未羽。なんでこいつら、おれの邪魔をするんだ？　お前の獲物だろう、勝手な真似させるなよ……ただでさえ、味を覚えるのが遅すぎたって、焦ってるっていうのに。お前もさっさとそいつら喰えばいいじゃないか」
「崖果……彼らはわたしの獲物じゃないわ。むしろ、あなたのほうが今は彼らの標的なのよ、そのありさまを見た以上、知り合いだからといってわたしもあなたを庇えない」
未羽の言葉に、何かを感じ取ったのか——崖果が怪訝そうに首を傾げた。
「未羽、お前……？」

「馬鹿ね、崖果。人間になど手を出したせいで、頭の働きが鈍くなったの？　彼らは浮城の捕縛師と破妖剣士よ。わたしは浮城の護り手になったの」

崖果の目が驚愕に見開かれる――そして、彼の足が逃げるために地を蹴ったのは次の瞬間だった。

「逃がすわけにはいかないわ！」

未羽が叫ぶと同時に、彼女の若草色の髪が無数の蔓のごとく伸びた。

それらが背後から崖果の手足に巻きつき、彼の自由を奪い取る。

繊細にすら見えるそれらは、巨体が暴れても千切れることなく、それどころか完全に崖果の抵抗を封じ込めていく。

「いやだ、いやだ、いやだ！」

逃げることはおろか、手足をばたつかせることさえできない状況で、崖果は必死に叫び声を上げた。

「今しかないのに……喰えるのはもう、今しかないのに……！　こんなところで殺されるのも封じられるのも御免だ！　未羽、未羽！　放してくれ！」

呆れた物言いだと、スラヴィエーラは呆れた顔をしていたが、未羽は何か感じるところがあったようだ。

「スラヴィ、マイダード……オルグァンにターラも。こいつの処分を、少しだけ待ってくれるかしら？　聞きたいことがあるのよ」

これに異を唱える者はいなかった。

未羽が助命を願ったのなら話は違ったろう――だが、彼女にそのつもりがないことははっきりしていた。ならば、護り手としての彼女の願いを退ける理由はない。

「……手短に頼むわ」

スラヴィエーラが代表してそう答える。

わかっているわ、と頷くと、未羽は崖果の体を持ち上げたまま、髪を伸ばしてくるりと向きを反転させた。

「崖果。先ほどから聞いてると、あなたはおかしなことを言ったわね。今しかない……人間を喰えるのは今しかないって。それはいったいどういう意味なの？　誰がそんなことをあなたに吹き込んだの？　最近魔性が人間を襲うことが多くなったのは、そいつが皆を唆したせいなの？　だとしたら、そいつは誰!?　答えて、崖果！」

この問いに、はっとさせられたのはアーゼンターラたち浮城の面々だった。

ここ数年、魔性被害は増え続ける一方で減る気配がない。原因も何もわからず、浮城は被害の対処に追われるばかりだった。

ところが、今の未羽の問いによって、重要な糸口が見つかるかもしれないことが明らかになったのだ、息を呑んだのはアーゼンターラだけではなかった。

しかし、崖果は未羽の質問に答えようとはしなかった。

「崖果！」

答えなさい！

ぴしりと厳しく問い詰める未羽に、崖果は「何を言ってるんだ？」と逆に問い返した。

「誰も何も言っちゃいない……わからないな、もしかして、お前には聞こえないのか、未羽？内側から湧き起こるあの声が……ああ、そうか。浮城の護り手になったお前には聞こえないのか……」

それは可哀相だな……いや、逆にいいことなのかな。

哀れむようでいて、羨むようにも聞こえる声で、崖果はぶつぶつ呟いた。

「崖果、それはどんな声？　男？　それとも女？」

未羽が重ねて問うと、崖果は乾いた笑いを洩らした。

「どんな声だって？　おれのだよ。おれの……自分の声が追い立てるように聞こえてくるんだ。急げ、喰え、今しかないぞってな。振り払っても振り払っても、耳を塞いでも聞こえてくる……言うとおりにしたら声は止むかと思って試しに人間に手を出してみたら、これが想像も

しないほど美味くてな。未羽、まだお前は人間が不味いと思いこんでんのか？　だったら可哀相だな……あんなに美味しいのに。今しか味わえないのに……うん、可哀相だ。あの声が聞こえないなんて、お前はなんて可哀相なんだろう」

答えている内に、その味を思い出したのか——妖鬼の目がとろりと酔ったように濁った。

未羽が「もういいわ！」と遮るまで、崖果は可哀相を繰り返し続けた——護り手の願いを込めた眼差しに、スラヴィエーラが夢晶結を振り下ろすまで……その声が止むことはなかった。

見つめる者たち

主である紫紺の妖主には見るだけだと言ったものの、事と次第によっては津々螺はそれだけで済ませるつもりはなかった。

主の身に危険が及ぶようであれば、たとえ命に反することとなろうとも、排除すべきだと彼女は考える。それこそ、これはないだろうが、客人とやらが金の姫君と呼ばれるあの破妖剣士であったなら、璃岩城の者を全員呼び戻し、襲いかからせることに躊躇いは覚えない。

翡翠の妖主を葬り去ったほどの力の主を、至上の主にどうして近づけさせられようか。今度は心臓ひとつではすまなくなる可能性が僅かでもあるのなら、自分ともども命を捨てても阻んでみせる。

「あの、さして楽しげでもない様子なら、その心配はないでしょうが、ね」

先ほどの主の様子を思い出しながら、津々螺は軽く肩を竦めた。

「けれど、あまりに気乗りしないような相手なら……そう、あの方の前に立つ価値もない塵芥

なら、やっぱり黙って見ているのも……ね」

そんな小物にかかずらわせていいほど、紫紺の妖主は安くない。

とにもかくにも、まずは見極めることだ、と津々螺は思った。

そうして、彼女が見当をつけた客人……否、客人たちは、意外なところで足止めを食っていた。

「おやおや、浮城を出たばかりで妖鬼にぶつかるとは……運がいいのか悪いのか。だが、あの程度のことでは実力のほどはわからないねえ」

何しろ妖鬼はたったひとり——護り手の少女が捕らえたところに破妖刀を一閃させただけのことだ。

他に二振りあるはずの破妖刀は鞘から抜かれもしなかった。

それでも、津々螺には彼らの実力を計ることなど容易かったが。

「気が進まない……あれが本当に客人なのだとしたら、我が君のお姿を晒すことさえ許し難いね。いっそ事故で辿り着けなくしてやろうか……いや、もしかしたらわたしが見抜けぬ力を秘めているのかもしれない……」

その可能性は低くないとは言い切れない。

ならばそれを目にしてから改めて判断しても遅くない——そう、それを目にするためであれ

ば、自分が手を出したとしても、主の邪魔をしたことにはなるまい。
「それぐらいなら、我が君も笑って許してくださるだろう」
影である自分が、本体である彼のために何もせずにはいられないことを、彼はよく知っているはずなのだから。
「あまり足止めにならぬよう、準備してあげなくてはね。我が君をお待たせすることになってはいけないから、璃岩城への道を開いてやって、その道中で試させてもらおうか……」
さて、どういう趣向にすべきだろう――？
津々螺は嬉々として計画を練り始めた。

※

「あら、まあ……」
虚空に浮かぶ真球の空間――未だ名もなき妖主の居城の一室で、漆黒の鏡を覗きこんでいた少女が呆れたような声を上げた。
「主の言いつけを守らないだなんて、第四の君も行儀の悪い配下を持ったものね」
漆黒の豊かな髪、吸い込まれそうな黒瞳を持つ第六の妖主である少女は、鏡に映る色彩だけ

は自分と同じ妖貴の女性を見つめたままぼやくように呟いた。
「配下と言っても意志を奪われた人形じゃないんだ、多少勝手に動き回るぐらいのことはするもんだ。その程度のことも許せないようじゃ、誰もあなたに従っちゃくれないぜ」
深紅の青年が、そんな彼女を宥めるように声をかけたが、その言葉遣いはお世辞にも敬意を示すものではなかった。
少女は実にイヤなものを見る目で隣に立つ男を見上げた。
「第二の君……わたしは『お前』呼ばわりされなかったことを喜ぶべきなのかしら？」
自分に膝をついた以上、この男は自分に従う義務を負ったはずだというのに、その言動からはそうしたものが一切感じられない。
咎めるようにそう問うと、柘榴の妖主はにやりと笑った。
「おれは誰に対してもこうだからな、敬語が聞きたいのなら、他の誰かを呼べばいい」
「わたしはあなたを呼んだ覚えもないのだけれど？」
出て行けと暗に告げても、男は従おうとはしなかった。
「おれが、話があったんだよ……それほど急ぐ話じゃないが、一応耳に入れておいたほうがいいかと思ったんでな」
飄々とした態度でそう答えた男は、漆黒の鏡に映し出された見知った顔から目を離さぬまま

くつり、と喉を鳴らす。

「話……？」

それは何かと問いかけようとした少女に、しかし男はまったく違うことを言い出した。

「雛の君、こいつには好きなようにやらせたほうがいいぞ。こいつに少し鍛えさせないと、藍絲の野郎も鍛えようがない。鍛えるつもりが潰してしまいました――なんてことにはなってほしくないだろ？」

唐突な言葉だったが、彼が何を話しているのかはすぐにわかった。

だが、だからと言って頷くのは彼に従うようで気が進まなかった。王蜜の妖主と違い、この男にはどうしても隙を見せたくないのだ。

だが、男の言葉がもっともなことも事実だ。四年をかけて育ててきた大切な鍵候補――代わりが他にいない以上、失うわけにはいかないのだ。

だから、彼女は渋々答えた。

「鍛えるだけなら、認めてあげるわ」

隣の男が声なく笑った。

本当にいやな男だと、少女は気づかれぬ程度に唇を噛みしめた――。


呪縛と代償

プロローグ

日の光も届かぬ山中を、三人の奇妙な一行が黙々と進んでいた。
ひとりは男だ。
歳の頃は二十代後半といったところか。灰色の髪を首の後ろでひとつに束ね、簡素な革の上下に身を包んでいる。
その左隣——というより左後ろをちょこちょことついていくのはまだ幼い少女である。
十歳前後だろうか、漆黒の真っ直ぐな髪を揺らしながら小走りに近い足取りで男のあとをついていく。
このふたりだけであったなら、さして奇妙とは言えない。
似てはいない上、少女が滅多にいない美貌の持ち主であるため、人の関心は集めるだろうが、不審を買うほどのものではない。
少女の手入れの行き届いた髪や、傷ひとつない指先を見れば、彼女が大切にされているのは

すぐにわかる。

恐らく男性は、少女の両親が護衛として雇い入れたのだろう——人の多い街中であれば、まず大抵の人間がそう思うような組み合わせだった。

奇妙なのは三人目の出で立ちと動きだった。

緑がかった薄茶の巻き毛をゆらゆら空中に揺らしながら、三人目の少女——十五、六だろうか——は、なんと地面ではなく宙を歩いていた。

よくよく見れば、少女の赤茶色の瞳孔が猫のように縦に長いことに気づくだろう。

そう、少女は人間ではない。

大部分の人間より遙かに強大な力を持つ魔性の一員——妖鬼なのだ。

大人の男と十歳ほどの子供、そして妖鬼の少女の三人連れ——となれば、これはもう奇妙を通り越して奇異だ。

魔性は本来、脆弱な人間を見下しており、玩具か駒、嗜好品としての価値しか見いだしていないと言われているのだから。

そんな奇妙な三人は、無言のまま山中を進み続ける——ときおり妖鬼の少女が上機嫌に歌を口ずさむのだが、それはお世辞にも上手いとは言い難いものだ。

先ほどまで、男は「どこで誰が耳にするかわからないのだからやめろ」と言っていたのだ

が、非常に機嫌がいい……というより躁状態に近い妖鬼の少女は全く聞き入れず、ついに男も諦めた様子だ。

そして一番小さな少女はといえば、足が痛むのか時々顔を歪めながら、それでも口を開こうとはしなかった。

明るい緑の双眸には、きつい光が宿っており、それは憎悪にも似た輝きで、ふたりの連れに向けられる。

だが、ふたりともそれについては何も言わない。

仕方ないことと諦めているのか、あるいは気にしていないのか——。

ともあれ、三人は歩き続ける。

それが三人——正確に言えば男性と黒髪の少女との間に交わされた約束だったからである。

三日間の同行——。

少女の大切な存在を質に取り、男は彼女を脅したのだ……。

1

山道というのは、登りより下りのほうが存外きついものであることを、リークは生まれて初めて身を以て知った。

靴擦れでできた肉刺が潰れた痛みにはどうにか耐えたが、靴の先に爪が当たってずきずき痛み出したのは堪らなかった。

痛い……。

だが、ふたりの連れに弱みを晒したくはなかった。

リークにとって、男性と妖鬼のふたりは許し難い存在だったのだ、どうして頼ったりできるだろう。

李枝……。

リークは大切なひとを思う。

男と一緒にいる妖鬼と同じ、魔性で……しかしリークを誰より大切に慈しみ守ってくれる大

好きな女性。

彼らに李枝が捕らえられている限り、リークは逆らえない。リークにとって、李枝は家族も同然なのだ。彼女に危害が加えられるかもしれないと思うだけで、心臓が痛くなる。

だから、彼らの要求に応じることに決めた——もっとも、リークは先手を取られっぱなしで、反撃の余地もない状況でのことだったけれど。

しかし、だからこそ、ふたりにそれ以上の弱みは見せたくない……見せられない。

そう思って道らしい道もない山中を文句も言わずに歩いてきたのだが、そろそろ足が限界に近かった。先ほどから時々膝が笑いそうになるのを必死に制しているのだが、できなくなるのは時間の問題に思える。

このひとたちに頼み事などするのはまっぴらだわ。

そうは思うのだが、現実問題として足は悲鳴を上げている。

意地を張り続けても意味はないと、頭ではわかっているが、どうしても頭を下げたくない相手というものはいるものだ。

唇を噛みしめ、ずきずき痛む足を引きずるように進めていたリークに、呆れたような声をかけてきたのは、猫のような目をした妖鬼の少女だった。

「強情な娘ねえ……すぐに音を上げない頑張り屋さんであることは褒めてあげてもいいけれ

ど、自分の限界を見極められないお馬鹿さんじゃこの先生き抜けないわよ？　それともあなたの妖鬼は、自分以外の誰かを頼ってはいけませんとでも言っていたの？」

あなたの妖鬼――とは李枝のことだろう。

彼女を捕らえた相手が、よりにもよってそんなことを言うのかと、リークは少女を睨みつけた。

眼差しだけで誰かを殺せるのであれば、今の自分は少女を八つ裂きにできるぐらいの目をしているに違いない。

そう思うのに、相手は全然動じもしていないのだ。

悔しい。

このふたりは李枝を捕らえ、自分を理不尽に連れ回している卑怯者だというのに……なのに自分は反撃する武器をなにも持たないのだ。

「……あなたなんかに李……彼女のことをあれこれ言われたくはないわ」

咄嗟に李枝の名前を途中で止めたのは、魔性にとって名前がなにより大切であることを彼女から聞いて知っていたからだ。

魔性にとって名前――真名とは本質を示すものであり、それを力ある者に握られることは時に隷属を意味するのだと、リークの守護者は言っていた。

目の前の妖鬼は李枝に劣らず強そうな魔性だった。李枝が耳の後ろに李の葉を思わせる緑の突起物を持つ以外、ほとんど人間と大差ない外見の持ち主であるのに対し、この少女は瞳孔の形以外はまるで人間そのものだ。

人間に近い姿をしているほど、魔性は強い力を持っているという。ならば少女は少なくとも李枝に匹敵……あるいは勝る力を持っているということになる。

そんな危険な相手に、大切な守護者の真名を明かすことなどできない。

李枝がリークを大切に想ってくれているのと同じように、リークも彼女のことを大切に想っているのだから。

そんなリークを哀れむように、猫の目の妖鬼が告げた。

「そんなよろよろした足取りになっているくせに、なんて素晴らしいプライドかしら？　けれど、お嬢さん？　身丈に合わないプライドは時に害にしかならないのよ？　わたしかイズヴァンに一言頼めばすむことを、あなたが馬鹿らしいプライドにこだわったせいで力尽きたとして、それで誰が褒めてくれるというの？　あなたの妖鬼はそんなあなたを誇りに思ってくれるの？　そんな愚かしいことを、本当に？」

妖鬼の声に揶揄の響きはなかった。

いや、どちらかといえばそれは真摯なものだった。

だが、だからこそリークは怒りを覚えずにはいられなかった。
「だから！　あなたが彼女のことをあれこれ言わないで！」
「別にわたしはあなたの妖鬼のことを言っているわけじゃないわ。今、わたしが問題にしているのはあなたのことじゃないの。血臭がするわ……肉刺が潰れた上に、爪も割れたか剝がれたんでしょう？　そんな状態でいつまで意地を張るのかと言っているのよ」
隠しているつもりのことをあっさりと指摘され、リークは顔が熱くなるのを感じた。
意地を張っても無意味だと、そんなことはリーク自身わかってはいた。だが、それを自分で認めることと、指摘された上で選択を促されるのは何もかもが違う。
敵に折れろと言われて素直に折れることができる性格ではないのだ。
こうなったら、約束の三日間、何がなんでも歩き続けてやる……！
その後しばらく歩けなくなってもかまわない。絶対にこの少女の言う通りにはしない。
そうリークが決意を固めた瞬間のことだった。
ふわり、とその体が宙に浮いた。
それまで無言で歩いていた男性が、リークの体を抱き上げたのだ。
「な……!?　放して！　わたしはまだ歩けるわ！」
叫びながら手足をばたつかせるリークを、難なく腕に乗せた男性は、「そうだな」と頷い

た。

「だが、時間が惜しい。お前の足に合わせていたのでは、三日などすぐに尽きる。それではこちらの用事がすまない。不本意だろうが、このまま移動するか、荷物のように袋に詰められて移動するか選んでくれ」

すまないと言いながら、男が提示した選択肢は酷いものだった。

昨夜、男が出会い頭にリークにしたことを考えれば、返答次第で彼が本当に自分を荷物扱いするのは目に見えていた……なにしろ、男は無言のままに寝室に侵入してきた上、有無を言わさずリークを家から連れ出……否、攫ったのだから！

大きな麻袋の中で意識を取り戻した時の衝撃はとても忘れられるものではない。

結果的にはどちらを選んでも、リークが男の世話になることに変わりはない。そして男がこう言う以上、リークに三つめの選択肢――つまり自力で歩く――が許されないであろうことも決定的だ。

だとしたら、どちらを選ぶかなど決まっている。

荷物――物として扱われることなど、リークにはどうしても許せぬことなのだから。

猫の目の少女が指摘した通り、リークは山より高いプライドの持ち主だったが、だからこそ決して譲れぬ一線を守るためには退くことも知っていた……傍目にはとてもそうは見えないの

が問題なのだが。

「……わかったわ、こうしてしがみついていればいいの？」

自分を抱き上げた男にそう問いかければ、灰色の髪を首の後ろでひとつに束ねた男は、「ああ」と頷いた。

無口な男だ。だが、それだけに次に何をするかが読めない。

読めないだけに厄介だ、とリークは思った。自力ではもうほとんど歩けない自分にできることなど限られてはいるのだけれど。

それでも、せめて――。

可能な限り、情報を集めなければ――とリークは考える。

三日後、解放された李枝と合流する時、何もわかりませんでしたとは言いたくない。

何より――。

彼らの目的は何なのか。

何としてもそれだけは手がかりだけでもこの三日の内に摑んでおかなければ、と。

リークは心に決めていた。

「イズヴァンったら、子供に甘いんだからぁ」

どこか不満そうに洩らす猫目の少女の声を聞きながら、黒髪の少女は唇を噛みしめた。

※

リークは物心ついて以来、生まれた村を出たことは数えるほどしかなかった。その数度も、決して隣の町や村といった場所ではなかったため、彼女は故郷以外の人間の住む場所を知らなかった。

だから、初めて目にする見知らぬ男がどこへ行くのか、それはどんな場所なのか——心底不本意な状況ではあったけれど、好奇心を刺激されずにはいられなかった。

山中を男に抱き上げられたまま移動すること四半日——麓の開けた場所に出た時、リークはその場所のありさまに正直落胆を覚えずにいられなかった。

男は村の外から来た。

だから男が行くのは村の外の——人間の住む場所だと思っていたのだ。

ところが、山を下り——どうやら迂回していたらしい——男が最初に「見ろ」と示したのは、大量の土砂に埋め尽くされた土と木々の山だった。

「先日の大雨のせいだ」

そう男は告げ、更に山の斜面を指し示した。

自分が住んでいる村の背後に聳えるその山の、反対側の斜面が無残な様相を晒しているのを、リークはしかし特に感慨もなく見上げた。

山の表土の実に三分の一ほどが崩れ落ちている。草や木々が流され、赤土や砂岩がむき出しになった山肌は、まるで皮膚をえぐり取られた動物のようで痛々しさをたたえている。

自然とは、時にこうした残酷な一面を見せる。そのことをリークは知っていた――正確に言えば、李枝に教えられたのだ。

『雑木は材木にならないと人間は軽視してますが、山にとって雑木はなによりの守り手です。横に広く根を張る雑木があれば、多少の大雨では山は崩れません。人間にとって役に立つかどうかの観点だけで物事を決めてはいけないといういい例ですよ』

事実、リークの故郷の村では、山の雑木をある程度以上残した上での植林を心がけてきた御陰か、これまで大規模な土砂崩れの被害を受けたことはない。

なのに、その反対側ではこの惨事――男はこれを「見ろ」と言った。

何を答えろというのだろうか――。

リークは頭のいい子供だった。いや、小賢しいと言ったほうが正確か。

守護者である李枝が無条件に賞賛するリークの考えや言葉は、家族を含めた村の人間たちからは「子供らしくない」「もっと素直に受け止めればいいものを」「かわいげがない」といった

声にならぬ感想を持たれることが多いものだった。
もっとも実際に声に出してリークにそう告げる者はいなかったが……眼差しであれ空気であれ、読もうと思えば読み解くことができる。幸か不幸か、リークはそうした方面にも敏感且つ有能だったのだ。
しかし、有能すぎるほどではなかった。
自らの長けた才を目立たぬように隠しきるほどには。
だから、リークは感じたままを男――イズヴァンに告げた。
「……酷いわ」
取りあえず、これは正直な感想だった。
「ああ」
男は淡々と頷いた。
「これだけの土砂が崩れ落ちるだなんて、こちら側の斜面には縦根を張る杉や檜か松あたりしか植えてなかったのかしら？　せめてもう少し雑木があったら、横根で土止めの役目を果たしたことでしょうに……」
だが、ここで男は意外なことを口にした。
「植えてあった」

「え？」

「雑木は充分に残してあったし、新たに植樹もしていた……反対側の斜面と同じぐらいにはな」

なのに、こちら側だけがこの有様だ――。

続けられた男の言葉に、ひやりとする何かを感じたのは気のせいだろうか。

だが――リークは男の声音に感じた何かより、男が告げた内容に意識を引っ張られた。

反対側の斜面と同じくらいに雑木を残し、更には植樹までしていたというのなら、普通であればここまで大規模な山崩れは起こらないはずだ。

けれど、リークが住んでいる村のほうは無事に済み、反対側のこちら側はこの惨状……その意味するところは何だろうか。

答えは、ひとつしか浮かばなかった。

「運が悪かったのね――」

逆に言えば、自分たちの村は運が良かったのだ。

妖鬼である李枝がいてくれたこと。彼女がいろいろなことを教えてくれたこと。何より彼女が村のために力を尽くしてくれたこと。

そんな思いを噛みしめながら答えたリークのすぐそばで、灰色の髪の男はふう、と大きく息

をついた。

落第点（らくだいてん）だと言われたような気がして、リークは思わず拳（こぶし）を握った。

2

野宿は初めての経験だった。

土砂崩れの現場から充分に離れた場所で、簡素な食事を終えたリークは横になるなりすぐに瞼を閉じた。

そばにいるのは李枝ではない。家族でもない。到底安心できる状況ではなかったが、それ以上に疲労が大きかった。

だが、体は疲れていても心は完全に緊張を解いていなかったのだろう、夢うつつにリークはイズヴァンと香林――猫の目をした妖鬼の名前だ――の会話を拾い集めていた。

「こうしていると、無邪気な子供にしか見えないのに……」

香林の声にはなぜか悲しそうな響きが宿っており、リークは苛立ちを覚えた。

まるで同情されているように感じたのだ。

冗談ではない、見知らぬ妖鬼に哀れまれなければならない理由など自分にはない。

いや、人質を取られ引っ張り回されている現在の自分の状況は、確かに同情に値するかもしれないが、それは脅迫者から向けられるべきものではないはずだ。

いやなひと……厭味で意地悪で、李枝とは大違いだわ。

そう思った瞬間、今はそばにいない守り手のことを思い出し、胸がきしりと痛みを訴えた。

気がついた時には、李枝はリークのそばにいた。

頭部を覆ってしまえば普通の人間と言ってもおかしくない彼女は、リークを護るためにずっとそばにいてくれた。

魔性にまつわる恐ろしい話は、どれも李枝には当てはまらなかった。彼女は子供を攫ったり人間を殺したりしない。村の誰も、彼女に傷つけられることはなかった。

どうしてそばにいてくれるのかと尋ねたことがある。

その時李枝はにこりと笑って『リークが呼んだからですよ』と答えた。

『リークがわたしを呼んで、そばにいることを許してくれたから、わたしはリークを守るのです』

と——。

どうして守ってくれるのかと尋ねると、『リークが大好きだからですよ』と優しい瞳で答えてくれた。

リークも李枝のことが大好きだったから、『わたしも！』と言って抱きつくと、本当に嬉しそうに抱き返してくれた。

李枝……李枝。

彼女は妖鬼と呼ばれる魔性ではあるけれど、何も悪いことはしていない。なのに、なぜそんな彼女をイズヴァンや香林は捕らえたりするのだろう。

それになぜ、三日間と期限を切って、自分をあちこちに連れ回そうとするのだろう——彼らが何を考え、何を狙っているのかどうにもわからない。

自分だって香林と一緒にいるのだから、妖鬼が全部悪いとは思ってないでしょうに。

それとも、誰かが李枝について悪い噂でも立てたのだろうか。それをイズヴァンたちは真に受けて懲らしめてやろうと思ったのだろうか……。

ならば、誤解を解かなければ——。

李枝を悪く言われるのは我慢ならない。彼女がいかに優しく善良な存在であるのか、誰よりも知る自分こそがしなければならないことだ。

ああ、でも瞼が開かない……。

明日、李枝のことを詳しく話そう——そして彼女を解放してもらって……それから。

ふたりで家に帰るのだ——。

近い将来、それが現実になるのだと、このときリークは信じて疑わなかった。

※

翌朝、日の出とともに起こされたリークは靴擦れの治療を受けたあと、当然のようにイズヴァンに抱き上げられ、移動することとなった。

肉刺は潰れてひどいものだったから、ありがたいと言えばありがたいのだが、やはりどうにも落ち着かないものを感じる。

しかし、昨日のイズヴァンの言葉がある。嫌がれば袋に詰め込まれて荷物扱いされるだろう……わかっているのにわざわざ試すほどリークも物好きではなかった。

昨日に比べ、香林の躁状態は落ち着いたようだった。鼻歌もそうひっきりなしに聞こえてくることはない。

不思議に思って、リークは猫の目の妖鬼にそのことを尋ねた。香林のことはあまり好きではなかったが、気になるものは気になるし、無口なイズヴァンは全く口を開こうとしない。十歳の彼女にとって、いつまで続くかわからない沈黙は、あまり気持ちの良いものではなく、相手が誰であれ会話を求めずにはいられなかったのだ。

「ねえ……昨日はどうしてあんなに上機嫌だったの？」

香林、という名を口にしなかったのはもちろん故意だ。

魔性にとって真名は特別なものであるから、無闇にその名を口にしてはいけないのだと、何度も李枝に言い聞かされてきたのだ。

中には侮辱されたと感じて襲いかかってくる者もいるから、と。

そんなリークの考えは、香林にはお見通しだったのか、クスクス笑いながら「呼んでいいのに」と言ってきた。

「でも、あなたたちにとって、名前は特別なものでしょう？」

と問いかければ、

「確かにそうだけど……わたしは浮城と契約しているから、その時点で誰が呼んでも構わないという決まりができているのよ。怒って頭から食べたりしないから、安心してちょうだいな」

と、悪戯っぽい笑みをたたえながらの答えが返ってきた。

冗談なのだろうとはわかっていたが、リークはその台詞に一瞬ぴくりと肩を震わせた。

食べるという言葉の持つ生々しさに驚いたのだ。世の中には李枝のような優しい魔性ばかりではない。否、李枝こそが稀なのだと知ってはいても、妖鬼の口から「食べる」という言葉が出るとやはりぞっとするものを感じてしまう。

それは本能的な恐怖なのかもしれない。

強大な魔性に対して、人間はあまりにも脆弱だ。彼らに襲われたとしたら、人間には抗う術がない。

そんな思いが顔に出ていたのだろう、香林が「だから冗談よ」と笑って手を伸ばしてきた。

ここで身を引いたりしたら、今度はからかいの種にされると直感したリークは、必死に逃げまいとしたのだが、それはそれで結局笑われてしまった。

「本当に意地っ張りさんねぇ。魔性を怖がったって誰も臆病者だなんて言わないわよ。それどころか、恐れないほうが逆に問題だわ……昨日までのあなたのようにね」

諭すような口調に、リークは思わず首を傾げた。

なにを言われているのかわからなかったのだ。

「何のこと？」

「魔性を怖がることは正しいということよ。恐怖は悪いものじゃないわ。相手を危険だと本能が察知して恐れという感情を生み出すの。危険を回避するために必要なことよ。それを無視するのはいいことじゃない」

「それは……わたしが李枝を怖がらないのは間違っていると言いたいの？」

やはり、このふたりは李枝のことを誤解しているのだとリークは思った。

李枝はあんなに優しいのに――。

「あなたたちは誤解してるわ。わたしが李枝を恐れないのは、李枝が恐れなければならないような存在ではないからよ。誰からどんな話を聞いたか知らないけれど、これだけは言っておくわ。李枝は一度だってわたしにも村のひとにも酷いことなんてしたことはないわ。魔性の中では風変わりかもしれないけれど、誓って本当のことよ」

昨夜眠る前に思っていたことを、リークはふたりに訴えた。

しかし、これに香林は頷かなかった。

昨日土砂崩れの現場でのイズヴァンを思い出させるような少し遠い目をして、猫の目の妖鬼はため息を洩らした。

なぜ、そんな顔をするのだろう。

愚かで哀れな子供を見るような、苦いものを孕んだその顔に、リークは無性に腹が立った。

「李枝のことを知らないあなたたちにそんなこと言われたくないわ！」

香林を睨みつけてそう言うと、緑がかった薄茶の巻き毛をふわりと宙に舞わせた少女は呆れたように頭を振った。

その時だ――それまで黙ってふたりの遣り取りを聞いていたイズヴァンが口を開いたのは。

「着いたぞ」

どうやらここが、リークに見せたい二番目の場所らしい。
香林との会話に気を取られていたリークは慌てて周囲を見回した。
「なに……ここは」
呆然と呟いたのも無理はなかろう。
そこには一面の焼野原が広がっていたのだから。
そんな彼女にイズヴァンが告げた。
「メイテン村……妖鬼に滅ぼされた村があった場所だ」
と――。
それはリークが生まれて初めて目にする魔性の暴虐の爪痕だった――。

※

燃えかすすら残らぬほどに焼き払われた村の跡を、リークは呆然と見つめた。
これが……魔性に襲われた村の末路。
全滅したとイズヴァンは言った。それはつまり、村人は全員魔性に殺されたということだろうか。

心臓が凍るような思いを噛みしめながら、リークはイズヴァンに問いかけた。
「炎を操る妖鬼だったの？　村人全員が逃げることもできないほど、強力な炎だったの？」
そしてなぜ、あなたはそのことを知っているの？
瞬く間に村人全員が焼き尽くされたのであれば、誰から話を聞いたというのか。
素朴な疑問を口にしたリークに、答えをくれたのはしかしイズヴァンではなかった。
「ここまで丹念に全てを焼き尽くすような炎は漆黒の御方たちでもなければ無理よ。だから、この村は炎で全滅したわけじゃないわ。焼かれたのはその後よ。近くの村の者が総出で焼き払ったの」
なぜだかわかる――？
香林の問いかけに、リークは少しだけ考え込んだ。
思い当たる答えはひとつしかなかった。
「……疫魔を操る魔性だったのね」
疫病は恐ろしすぎる脅威だ――近隣の者たちが遺体を葬る時間さえ惜しみ、ここまで徹底的に焼き尽くしたということは、他には考えられなかった。
「頭の良い子は好きよ」
香林の返事が何よりの答えだった。

褒められてもちっとも嬉しくはない。魔性は恐ろしいものだと、香林が何度も繰り返したが、確かにこんなことを平気でできる存在なのだと思えば恐ろしいと思わなければ嘘だった。

「どうして、こんなことを……村の誰かが妖鬼を怒らせるようなことでもしたの？」

そうではなく、単なる気まぐれなら、到底理解できないと思った。

李枝は違うけれど、一般的な魔性とは、本当に恐ろしい存在なのだとリークはひしひしと感じた。

ふと、気になった。

香林は眷属のこの仕業に、どんな感想を抱いているのだろうか——。

彼女の心中を読んだかのように、猫の目の少女は苦笑交じりに口を開いた。

「こんなこと、別に珍しくはないわ。わたしは浮城に捕まる以前から人間で遊ぶことに対して興味がなかったから似たようなことをやったことはないし、やる気も起きなかったけれど……でも、遊び方を工夫して楽しんでいる彼らの気持ちは理解できるわ。特に綺麗なモノを手に入れられなかった腹いせに、思い切り八つ当たりしたくなる気分とかはね」

香林の口調は淡々としていた——それだけに告げられる内容には凄みがあった。

そしてリークは、香林がきちんと自分の問いに対する答えをも提示してくれたことに気がついた。

「腹いせ？　八つ当たり……？　そんなことのために、村に疫病をまき散らしたというの？　村ひとつを簡単に滅ぼすような、そんな恐ろしい病を……！」

声に怒りが滲むのを抑えきれない。

香林が小さく肩を竦めた。

「どうやらこういうことまではお嬢さんには許容できないようね。安心したわ、可愛い意地っ張りさん。せっかくだから、ついでにいいことを教えてあげるわ。いいこと？」

そう言うと、香林はすい、と宙を泳いでリークの傍らに身を寄せた。

耳元で囁かれた言葉の内容に、リークは思わず目を瞠った。

「浮城の魅縛師に魅縛され、意識の在り方をかなり人間風に矯正されたわたしですら理解できるということはね、お嬢さん、あなたの妖鬼ならわたし以上に理解、共感できるということよ。忘れないでおきなさい……自分に優しいからといって、相手が誰にでも優しいとは限らないということを」

3

二日目の夜も野宿となった。
焚き火のそばで丸くなって眠る黒髪の少女を見つめながら、イズヴァンは深いため息をついた。
「前途多難ね」
そんな男に、護り手である香林が声をかけた。
「ああ」
イズヴァンの声は重い。
昨日と今日の少女の態度を見れば、先は長いと悟らざるを得ない。気も重くなるというものだ。
「……だが、放っておくわけにもいかないだろう。この娘は野に置くには危険すぎる……本人にとっても周囲にとっても。どうあっても変わってもらわないとな」

だからこそ、荒療治ともいえる方法に踏み切り、少女を寝室から攫うように連れ出したのだ。

深夜――自分の気配に気づき、寝台に起き上がった少女を目にした瞬間に覚えた衝撃は忘れられない。

漆黒の絹糸のような髪を流したまま、少女は真っ直ぐに窓の外の自分を見つめた。

月明かりに浮かぶ美貌は末恐ろしいまでに整っており、これでは魔性ばかりか人間の男の間でも血で血を洗う争いが起こりかねないと思ったものだ。

そう……あと五年もすれば、彼女は間違いなく絶世の美貌を誇る大輪の花となる。その手のことには疎いとされるイズヴァンですら確信できてしまう少女だった。

だが、彼を激しく動揺させたのは、少女の美貌ではなかった――彼女が持つ二粒の宝石。緑柱石の瞳が放つ異様にして強烈な輝きが意味するところを悟ったせいだった。

少女が『縁魔の子供』であることは聞き及んでいた。

縁魔の子供――魔性と深い縁を持つ子供の俗称だ。魔性を引き寄せることも多く、そうした子供は周囲に疎んじられがちだ。

当然といえば当然のことだ。魔性にとって魅力的な子供のせいで村全体が危険に晒されるとなれば、心穏やかではいられない。隔離するか家族ともども追い出すか……酷い時には発覚と

同時に捨てられることもあると聞く。

そうした意味で、この少女は実に幸運な子供だとみなされていた。

イズヴァンがそう思ったわけではない。彼女の周囲がそう受け止めていたということだ。彼女の保護を浮城に求めてきた若者でさえ、少女の妖鬼が村ごと守っていることを幸いと思っているようだった。

だが――。

『それでもあの子にとってよくない環境だってことはみんなわかってるはずなんだ。両親よりも同じ年頃の友達よりも魔性と一緒にいる時間が長いだなんて、どう考えてもいいことじゃない……』

だから、あの子を保護して欲しいのだ、と。

若者は嘆願するために単身白砂原を渡って来たのだ――。

そして同時期に寄せられた依頼。

そうして選ばれたのがイズヴァンだった。依頼を完遂すると同時に、問題の縁魔の子供の資質を見極めるために。

いかに魔性と縁深かろうと、魔性に対抗できる異能を持たぬ子供であれば、浮城は保護には動かない。

そうして訪れた依頼の地で、改めて聞かされた話に、イズヴァンは子供に何らかの異能があればいいと思った。

護り手の香林の力を借り、子供の妖鬼を一時的に遠ざけた上でイズヴァンは子供の様子を見に行った。眠っているであろう子供の顔を確認するぐらいのつもりだった。夜目が利く彼には、その夜の月明かりは充分に明るかった。

そして、彼は少女を見たのだ——身じろぎもせずに自分を真っ直ぐに見つめる緑の双眸とともに。

その刹那、イズヴァンが感じたのはどうしようもなく強烈な危機感だった。

この子供をこのままにしておいてはいけないと、本能的に感じたのだ。

だから、有無を言わさず連れ出した。

香林の力で身動きが取れずにいる少女の妖鬼を質に取るような言い方をして、三日間の同行を彼女に求めた。

その間に、少女に自ら感じ取ってほしいことがあったのだ……だが。

「もう、二日が過ぎたわ。残るは一日だけど、わたしの術が確実に持続するかどうかわからないわ。なにしろ同種の相手にかけたのは初めてだから……」

黒髪の少女の寝顔を見つめるイズヴァンの隣に、いつの間にか移動してきた香林が心配そう

に告げた。

「もしかしたら、予定より早目に効果が消えてしまうかもしれないわ。そうなったら……」

ちょっとした地獄絵図よ。

軽い口調であったにもかかわらず、香林の瞳は笑ってはいなかった。

「わかっている」

頷いたイズヴァンに、護り手の少女は物問いたげな視線を投げかけてきた。

「……それでも、まだこの子を連れ回すの？」

危険なのは、わたしたちだけではないとわかっているのに？

香林の問いかけに、イズヴァンは暗い笑みを浮かべた。

彼女が正しい。ここは出直すか仕切り直すのが正解だろう……たとえ次にこの子供を連れ出すのが、限りなく難しくなろうとも、犠牲者が出るような真似は避けるべきだ。

だが、とイズヴァンは思うのだ。

恐らく、きっと——子供をこちらがわに引き戻すには今しかないのだ、と。

香林はこの子供の瞳が放つ強大すぎる力を知らない。

あの圧倒的な緑の支配する力を見ていない。

あれは——人間には過ぎた力だ。

こちらの意志も事情も何も関係なく、魂を意識を、無遠慮に強引に引き寄せ、従わせる……魅了という名の絶対的支配の力。

そんなものを持って生まれた子供を、どうして魔性のそばになど置いておけるだろう。

下手をすれば、人間の身を持って生まれた強大な魔性が誕生してしまう。空間までも支配するあの眼差しにはそれだけの力があった。

「おれは……この子供を、殺したくはないんだ」

ぽつりと洩らした一言に、香林が息を呑んだ。

「そんなにも、凄まじいの？」

問いかけてくる声が、震えているように聞こえたのは気のせいか……。

イズヴァンはただこくりと頷いた。

「この子供は、稀代の……の持ち主だ。意識の持ち方次第で、この子供はどちらにも転ぶ……」

人間にも、魔性にも——。

イズヴァンは他者の本質を見抜く力に長けた男だった。

その異能があればこそ、今回の複雑な任務の命を受けたのだ。

そのことを誰よりよく知る護り手である少女は、ややあってふう、と息をついた。

「仕方ないわね」

それはイズヴァンの意志を尊重するという宣言にも等しい一言。

そして香林は眠る少女を見つめながら、自分に言い聞かせるかのように呟いた。

「わたしだって、こんな子供が命を落とすのを見るのはイヤよ。何より、そんなあなたが一番嫌がることをさせたくなんかない」

だから、全力で協力してあげる——。

いつも気ままな言動でイズヴァンを振り回し、自分は自分のやりたいことしかやらないと公言する香林のこの言葉に、イズヴァンはそっと目を瞑った。

「すまないが……頼む」

返ってきたのは陽気を装った少女の声だ。

「気は進まないけど、仕方ないからつきあってあげる」

※

約束の最後の日の朝——。

リークは香林から「ひとつだけ、約束してほしいの」と言われた。

リークは香林のことがあまり好きではない。李枝と違って優しくない上に意地悪で、しかも李枝を酷い目にあわせたかもしれないからだ。

実際に香林がどうやって李枝を捕らえたのかは知らないが、リークは自分の守護者が魔性の中でも強いことを知っていた。彼女が何もなく、自分のそばを離れることがないことも。

そんな李枝を捕らえるために、彼らは何をしたのか――考えるだけできりきりと胸が締めつけられる。当然彼らの言うことなど聞きたくはない……が。

李枝の安全がかかっている以上、逆らうこともできず、結局リークは仏頂面で彼女の条件を呑んだのだ。

香林が求めたただひとつ――どこに行こうと誰と会おうと、決して口を開かないこと、を。なぜと理由を尋ねると、「危険だから」という答えが返ってきた。何がどう危険なのかまでは香林は教えてくれるつもりはないらしく、それはイズヴァンも同じようでリークは理由のわからない気持ち悪さを我慢するしかなかった。

そんな遣り取りがあったせいだろうか。

昨日とは違い――昨日も確かに落ち着かない気分を味わわされたのだが――イズヴァンに抱き上げられての移動は、楽ではあったが不安も大きかった。

どこに連れて行かれるのか――自分の足で歩いていたとしても同じことのはずなのに、昨日

以上に落ち着かない。

それでも、荷物として袋に詰められて運ばれるのよりはましだと自分に言い聞かせ、リークは無言を貫いた……とはいっても、午前中は結局誰にも会うことなく、だから三人は昨日同様——時々香林が洩らす調子外れな鼻歌はあったが——無言のまま細い道を進み続けたわけだが。

変化が生じたのは、簡単な昼食を終えて間もなくのことだった。

周囲の景色が変わったのだ。

これまでリークが見てきたのは山中の鬱蒼と茂る木々だったり、無残な土砂崩れの跡だったり、炎に焼き尽くされた村の跡だったりと、生きた人間の気配がまるでない場所ばかりだった。

ところが、最後の三日目になって、イズヴァンは何を思ったのか人里に立ち寄る気になったらしい。左右に田畑が広がる道を、彼は迷いのない足取りで歩き続ける。

ようやく、彼ら以外の人間——香林は妖鬼だから複数形はおかしいのだけれど——と会える。

それは安堵を覚えて当然のことだったのに、リークは動悸が激しくなるのを感じた。

どうしたのだろう……自分でもわからない。

だが、胸がざわざわした。落ち着かなくて、どうしていいのかわからなくて――そのせいだろうか、イズヴァンに抱きつく腕に力がこもったようだ。

『どうしたの、怖いの？』

尋ねてきたのは自分を抱き上げている男ではなく、そばをふわふわと飛んでいる猫の目の少女だった。

また、その内容が気に入らない。

誰が！

叫びかけて、香林が「しぃっ」と唇に人差し指を当てるのを見て約束を思い出した。

そうだった――声を上げない約束だった。

けれど、とリークは香林を睨みつけながら恨みがましく思わずにはいられなかった。

わたしが思わず声を上げずにいられないようなことを、先に口にしたのは自分のくせに！

やはり香林は意地悪だ。好きになれない。

むう、と頬を膨らませたリークを、猫の目の少女が楽しそうに見つめてきた。

その瞳に浮かぶ光が、李枝がいつも自分を見る時のそれのように優しく見えて、リークは思わずたじろいだ。

続けて告げられた声もどこか優しく聞こえた。

『ごめんなさい、今のはわたしが悪かったわ。けれど、お願いだから約束を守ってちょうだい。今、あなたが口を開いたら、何もかもがお終いなの』

信じられない思いで香林を振り返ったリークは、そこで初めて気づいた——妖鬼の少女の唇が閉じられたままであることに。

聞こえているこの声が、彼女の肉声ではなく直接自分の頭の中に響いてくるものであることに。

どうしてそんなことを彼女がするのかはわからなかったが、その必要があるからそうしているのだと……それだけは直感した。

唇に力をこめたのは、答えの代わりだった。

『良い子ね』

香林がにこりと笑い、声ではない声を伝えてきたその直後のことだった——。

リークの耳が、こちらに呼びかけてくる人間の声を拾い上げたのは。

「……剣士さま……っ！　破妖剣士さまぁ……っ！」

田畑の広がる道の向こうから、日に灼けた少年が大声でイズヴァンを呼びながら走って来るのが見えた——。

4

「破妖剣士さまっっ！」

少年が嬉しそうにイズヴァンに駆け寄るのを、リークは彼に抱き上げられたまま見つめていた。

自分より二、三歳年上だろうか――日に焼けた顔にそばかすが目立つ少年は、まるで子供のように目を輝かせながらイズヴァンを見上げてくる。

よほどイズヴァンのことが好きなのだろうか、彼の目が自分に向けられることはなかった。

それはリークにとって新鮮な出来事だった。

物心ついて以来、無視されたことなど彼女にはなかったのだ。

純粋に驚いた。

しかし、腹は立たなかった。少年が、本当にイズヴァンを待ちかねていたことは、彼の瞳を見れば一目瞭然だったからだ。

イズヴァンは、だが歩みを止めない——目的地はまだ先なのだろう。

「破妖剣士さま！　レイスの村は見ていただけましたか!?　あいつらのこと、ちゃんと見て来てくださいましたか!?　おれたちが言ったことが間違いないってわかってくださいましたよね!?」

イズヴァンのそばにまとわりつくようにして、少年や矢継ぎ早に質問を繰り出す。

リークは約束を忘れて声を上げそうになったところを、背後から香林に口を塞がれた。

『声を上げては駄目だと言ったでしょう?』

直接脳裏にかけられた声は責める響きに満ちていた。

わかってはいても、リークにも言いたいことがある。レイスとはリークの生まれ育った村なのだ。

その村からイズヴァンが帰って来たことを、少年は心底喜んでいるようだ。そこで『あいつら』とやらを見て、自分たちの訴えの正しさを納得してもらえたに違いないと確信している様子だ。

リークの胸が不安に揺れた。

少年がレイスと口にした表情は、お世辞にも好意的とは呼べないものだ。『あいつら』と言った時には憎悪の響きさえ滲ませていた。

この少年はレイスの村を嫌っている。そしてそこに住んでいる複数の誰かを憎んですらいるのだ。

誰か――いったい誰を？

レイスは小さな村だ。村人全員が家族のようにつきあっているとは言えないが、親戚ぐらいには皆親しい。親しいひとが他人に嫌われたり憎まれたりしていたら、やはり悲しい。

その上、イズヴァンはレイスの村で李枝を捕らえて、自分を連れ出した。少年の言う『あいつら』が自分たちである可能性もある。

だとしたら、誤解も甚だしい。

自分も李枝も人に恨まれるようなことはした覚えがない。もしもイズヴァンと香林の三日前の行動が、少年の思い込みから生じたものだとすれば、リークとしては一発ぐらい殴ってやりたいところだった。

約束があるせいで、ここで少年を問いただすことができないのが残念だった。

絶対にあとで事情を聞き出してやる。

そう心に誓いながら、少年に見せつけるようにわざとイズヴァンにしがみついてやる。ちょっとした嫌がらせのつもりだったが、何ら反応を見せない少年の態度を見て、リークはある可能性に気づいた。

少年には本当にイズヴァンの姿しか見えていないのではないのか——ということだ。

香林は魔性だ。目くらましの術ぐらい、簡単にかけられるだろう。口を利くなと言ったのも、声までは隠せないか、術が解けるきっかけになるからではないのか。

背後で香林の笑う気配がした。

良くできましたとでも言いたげな余裕までも感じられて少しむっとした。

だが、約束は約束だ——今日を終えるまでは彼らの言うことに従わなければならない。ふたりがそう酷いことをするとは思えなくなっていたが、李枝を質に取って自分を脅したのは確かにこのふたりなのだ。

気を許しすぎてはいけない。

自分にそう言い聞かせながら、リークは周囲に意識を向けた。

村に近づいたのだろう、遠くからひとの声が聞こえてくる。

次第次第にそれらは大きくなり、やがて前方に数十人の男女が集っているのが見えてきた。

彼らもこちらに気づいたのだろう、口々に叫びながらこちらに駆け寄ってくる。

「剣士さま！」

「浮城の剣士さま！」

「破妖剣士さま！」

皆がイズヴァンにそう呼びかけてくる。
浮城の、破妖剣士――。
言葉とその意味は知っていた。
浮城とは世界で唯一魔性に対抗できる能力者を集めた組織であること。
破妖剣士とは、魔性の命を絶つことのできる唯一の武器――意志を持つ斬魔の刃破妖刀に選ばれた人間であること。
彼らは魔性被害に苦しむ者たちの依頼を受け、世界各地どこにでも赴き、人間に害なす魔性を滅ぼす――と。
教えてくれたのは、従兄弟の青年だった。一年前に突然姿を消した彼は、リークが李枝とばかり一緒にいることにいい顔をしないただひとりのひとだった。
イズヴァンが浮城から来た破妖剣士――そういえば、香林も浮城と口にしていたのに、どうしてすぐに思い出せなかったのかしら。
リークはぼんやりと考えて、とっくに答えが出ていることに気がついた。
自分は、考えたくなかったのだ。
彼らが自分に係わる理由を――確信してしまえば、自分はきっといろいろ考えずにはいられなかったろう。そして何らかの答えを導き出していたはずだ……自分は、それから逃げたの

だ。

だが、もう遅い。心の目を背けても、心の耳を塞いでも——現実にそれは耳に飛び込んでくるのだから！

「レイスの妖鬼は倒せそうですか!?」

村人のひとりがそう問いかけると、別の誰かが声を上げた。

「馬鹿野郎！　破妖剣士さまに失礼なことを言うんじゃねえよ！　大丈夫に決まってるじゃねえか！」

若い女の声が「そうよ！」と叫んだ。

「お願いします、破妖剣士さま！　どうか、あの憎い妖鬼を切り刻んでください！　あいつのせいで、あたしの妹は地獄に落とされたんだから！」

縋るようにイズヴァンの空いた腕を摑んだその女性の顔は強い憎悪に歪んでいた。

「おれの息子だってそうだ！」

「おれたちの村だけじゃない！　メイテンは全滅させられたんだ！　それだってあの妖鬼のせいだ！」

「アスカン山の麓に住んでたわたしの従姉一家が土砂崩れに巻き込まれて死んだのだって、あの妖鬼のせいだわ！　あいつがレイスのあるほうにばかり力を注いで水の流れを狂わせたせい

だもの！」

「みんな、みんなあの妖鬼のせいなんです！　破妖剣士さま、どうかあの凶悪な妖鬼をどうか……！」

怨嗟に満ちた声、声、声――！

リークには到底我慢できなかった。

「やめて、やめて、やめてちょうだい！　あなたたちはいったい何を言っているの!?　李枝はそんなことしていないわ！」

叫んだ瞬間、ぱちん、と空間が弾ける音がした。

香林の目くらましが解けたのだ。

村人の目が、突然現れたリークに向けられた。

彼らの目にまず浮かんだのは驚愕――そして。

見る間にそれらは憎悪に染まり。

「レイスの縁魔の子供だ！」

「レイスにおぞましい妖鬼を呼び寄せた忌まわしい元凶！」

嵐のような怒号がその場を満たした――。

※

その村――イスダットを襲ったのは圧倒的な力に因る恐怖であり、逆らうことを許さぬ絶対の意志による犠牲の強要だった。

力の化身は、漆黒の人間ならざる美貌の青年の姿を取っていた。

「ふうん……」

青年は、村人が差し出した十人の贄をさして興味ある風もなく見やると、呆れたような少しだけ感心したような声を洩らした。

「姑息な方法に走ることの多い人間にしては殊勝だね……ちゃんと、公平にきっちり十人選び出したようだ」

青年の前にいるのは、何の不正もなく公平に籤で決められた者たちだった。

年端のいかぬ子供もいれば、数カ月後に婚礼を控えた若い娘もいる。

働き盛りの壮年の男性もいれば、家族に看取られるのを待つばかりといった風情の老人の姿もあった。

きっちり籤で決められた十人を、しかし差し出された青年は少しつまらなそうに見つめていた。

「とんだ正直者の村だ……普通はもっと不正を働くものなんだがね」
それを暴くのを楽しみにしていたのに、これは少々拍子抜けだ。
村人たちの慟哭にも気づかぬ様子で——否、知るからこそ嘲るように青年は続ける。
自分が何を言おうが何をしようが、村人たちが逆らえぬことを知るからこその傲慢な態度だった。
そして、それは青年の思い上がりでも何でもないのだ。
青年には、確かにそれだけの力があり、村人はただ従う以外に選ぶべき道はないのだ……村人全員が一斉に襲いかかろうと、たったひとりのこの青年にはかなわない。
そのことをその場にいる誰もが本能で熟知しているからこそ。
人間にあらざる美しさをたたえる漆黒の青年は、似た姿をしておりながら人間とは明らかに異なる存在なのだ。
魔性——。
人間には持ち得ぬ圧倒的力を背景に、人間を蹂躙する——目に見える『荒ぶる力』。
無力な人間を玩具か駒——もっと酷い場合はないものとして扱う魔性は、人間にとっては災難以外のなにものでもない。
行き逢った者は不運であり、彼らの興味を惹いた人間は不幸が約束される。

この青年に目をつけられた時点で、この村の不幸は決定づけられてしまったのだ。

だが、イスダットの村人に贈られた不幸は、十人の贄だけではすまなかった。

漆黒の魔性は自分が期待した楽しみを――不正や村人同士の醜い争いといったものだ――満たしてくれなかったこの村に、残酷なものを贈ることとしたのだ。

「公正で公平なお前たち……さぞ身を切られる思いでいるだろうお前たちに、いいことを教えてやろう」

人間が浮かべれば醜悪にして残酷な笑みにしか見えぬであろうそれも、力と美の化身たる青年がたたえれば、魂までも呪縛する圧倒的力に満ちたものとなる。

「お前たちはある娘の代わりにわたしに差し出された代替品なんだよ。わたしは本当はこんな村に興味なんかなかった……変わった娘がレイスにいると聞いたのでね、そちらで遊ぼうと思っていたんだ」

絶望に染まっていた村人たちの瞳に、疑念と憎悪が浮かぶさまを、青年は満足そうに見やってさらに続けた。

「ところがその娘にはなかなか智恵の巡る妖鬼がついていてね、代わりにこの村を差し出すから娘のことは見逃してくれと言う。たかが妖鬼の言うことを聞いてやる義理はなかったが、その時はちょうどわたしも機嫌がよかったんで願いを聞き届けてやる気になったんだよ」

遊べるなら、わたしは何でもよかったしね。
くすくすと笑いながら、青年は村人たちの憎悪を煽り立てた。
「この村だけじゃない。疫魔に襲われ滅んだ村も、年に数人若い娘が姿を消すのも、全部レイスの妖鬼が自分の気に入りの娘を狙ってきた輩に代わりに差し出したものだよ。レイスの妖鬼は、これからもずっと、そうして気に入りの娘を守っていくつもりなんだろうね」
まあ、わたしにはどうでもいいことだが――。
憎悪の種を蒔くだけ蒔いて、青年は十人の贄と共に姿を消した。
イスダットの村人たちの心に芽生えた憎悪は、妖貴の思惑もあってか、大きく育つばかりで、消えることも小さく萎むこともなかった。
向かう先はレイスの妖鬼――。
更にはその妖鬼が守っているという縁魔の子供。
魔性に煽り立てられた憎悪の炎に身を任せ、彼らはついに近隣の町や村をも巻き込んで、浮城に依頼の使者を送った。
凶悪なレイスの妖鬼を倒してほしいと――。
そうして派遣されてきたのがイズヴァンという名の破妖剣士だったのだ。

5

甘い甘い花の香りに包まれて、李枝は心地よい微睡みの中にいた。
それはいつまでもそうしていたいと思わせる毒にも似た夢をもたらす甘美な香りだ。
李枝はその中で、最愛の存在である少女との出会いを何度も繰り返し思い出していた。
李枝は上位の妖鬼として生を受けた。
耳の後ろにある李の葉に似た突起物を除けば、ほとんど人間の姿で生まれた彼女は、妖鬼の中では最上位に近い存在だった。
だから、別にその光に気づいた時も、それが人間の赤子が放っていることを知った時も、目の色を変えてそれに向かおうとは思わなかった。
ある程度の力を持って生まれた彼女は、上を望めばきりがないことを知っていたのだ。
下位の妖鬼は異能のある人間を喰うことで自らの力を底上げしようと必死だが、李枝から見ればそれは愚かしく醜悪な行為でしかなかった。

人間などの異能を取り込んだところで、絶対的な力など手に入るわけがない。そんなことも下位の輩はわからないのかと、愚かな眷属を哀れんでいた。

そう……李枝は生まれ持った以上の力を欲してはいなかった。ましてや自らの力を増すために、異能を持つ人間を食らおうなど考えたこともなかった。

だから……あの日、眩いまでの光を放つ人間の赤子のもとへ足を運んだのも、単なる気まぐれだったのだ。

李枝から見ても、その光は綺麗で……だから少しばかり興味が湧いたのだ。

頭部を隠してしまえば、李枝は人間に紛れても正体を見破られることはない。

そうして李枝は件の光を放つ赤子の家を訪れ——そして、そうして。

稀有なる二粒の緑柱石に呪縛された。

赤子は魅了眼の持ち主だったのだ。

気づけば捕らえられ、心まで縛りつけられていた。上位の妖鬼である自分が、たかが人間の赤子に完全に支配されたという事実に、しかしなぜか李枝は喜びすら感じた。

捕らわれたことも、縛られたことも、出会った瞬間心に湧き起こった歓喜を減じる要因とはならなかった。

心を満たすのは出会えたことに対する感謝と歓喜——呪縛は逆に共にあれる証にしか感じら

れなかった。

リーク……リーク、わたしの愛しい……。

唯一にして無二の宝。

他の何にも換えられない、他の誰にも譲れない……。

甘い、甘い李枝の見る夢は、しかし唐突に破られた。

夢の鍵となるのがリークである以上、本人が上げた悲鳴が李枝に届かないはずがないのだ。

『嘘よ！　そんなこと、嘘だわ！』

血を吐くような少女の声が脳裏に響き渡った瞬間、李枝を捕らえていた甘い夢は跡形もなく消え失せた。

「リーク……？」

むくり、と身を起こした李枝は、そこがレイスの村から人間の足で半日ほどかかる場所にある木立であることに気づいた。

そうだ……と思い出す。

感じたことのない眷属の気配に気づき、ここまで追いかけてきたのだ。愛する少女を害する可能性のある者を、李枝は決して村に近づけない。

だが、それが罠だったのだ。

まんまと眷属の術に嵌って自分が眠り込んでしまっている間に、大切な少女の身に何かが起こったのは間違いない。
ぎり、と李枝は唇を噛みしめた。
許さない——リークを傷つける者、自分から遠ざける者、奪う者。
決して、そんなことは許さない！
ゆらりと立ち上がった李枝の体から陽炎が立ち昇る。
「リーク……待ってなさい、すぐに迎えに行きますから」
あなたはわたしが守るから——。
そう呟き、歩き出した李枝の美しい面には、見る者を慄然とさせる壮絶な笑みがたたえられていた……。

※

「嘘よ！　嘘、嘘、嘘ばっかり！」
李枝はそんなひどいことしない！
叫んだリークに、村人たちの手が伸びる——憎悪に歪んだ顔には、明らかに彼女への殺意が

浮かんでいた。

もしもその手のひとつでも彼女に届いていたならば、その身は素手で引き裂かれていたかもしれない。それほどにイスダットの村人たちの憎悪は激しく高められていた。

そんなリークの体がひょい、と宙に持ち上げられる。

思いがけない事態に、さすがに目を丸くしたリークの耳元で囁かれた言葉は――。

「あれだけ口を開くな、声を出すなと言っておいたのに、ほんとに困ったお馬鹿さんねえ……」

「香林？」

「ええ、もちろんわたしよ、お馬鹿さん。憎悪に猛った村人を煽るような真似をしてどうするの。いくらイズヴァンだって、あれだけの人数に囲まれたら身動きとれないにきまっているじゃないの」

暗に、自分の言動がイズヴァンまで危険に晒したのだと非難され、リークは一瞬言葉を失った。

だが、とても黙ってはいられなかったのだ。

「だって、李枝のことをあんなに悪し様に……！」

何もかも李枝のせいみたいに言われて、黙ってなんていられるわけないでしょう!?

叩きつけるようにそう主張すると、香林は醒めた口調で「事実なんだから仕方ないでしょう」と答えた。

「事実だなんて、そんなわけ……！」

叫びかけたリークの言葉を遮ったのは、村外れまでイズヴァンを迎えに来たあの少年だった。

「事実だよ！　おれたちだって、魔性の言葉を鵜呑みにしたわけじゃない！　この十年、この近辺の魔性被害の生き残りとか探していろいろ調べたんだ！　お前が……お前の妖鬼に守られてぬくぬくと暮らしている間、どれだけの人間が代わりに殺されたり攫われたりしたと思う!?　うちの村だけで十人だぞ！　子供ばっかり五人も喰い殺された村もあった！　全滅させられたのはメイテンだけだけど、どこの村も町も、何人も殺されたんだ！　全部、お前の妖鬼が唆したことだぞ！　どこが嘘だっていうんだ！　言い切れるほど、お前は何を知ってるっていうんだ！」

村人全員の怒りを代弁したかのような少年の叫びに、空気がぴりぴりと震えた。

村人たちの刺すような視線を受けながら、リークはそこで初めて自分に否定するだけの材料がないことに気がついた。

李枝は優しいから――？

それはなんの根拠にもならない。

香林も言ったではないか——自分に優しい相手が、誰にでも優しいとは限らない……と。皆を納得させるだけの証拠がなければ、リークの主張など信じたくないと子供が駄々をこねているのと同じなのだ。

そして、今この手に、そんなものは何一つない。

「でも、李枝は本当に優しくて……」

零れる声は震えて、風にでもかき消されてしまいそうだった。

背後で支えてくれる香林の手が、そっとリークの両目を覆った。

耳元で、力の宿った声が告げる。

「誰が何を言おうと、それは本人の主観の入ったものにしかならない。あなたが真実を知りたいのなら、そう強く願いなさい……あなたには、それができる力がある。この場合、幸か不幸かはわからないけれど」

瞼に触れる香林の指先から、何らかの力が注ぎ込まれるのがわかった。

「頑固なお嬢さん。あなたは知りたい？　それとも知らぬまま目を塞いでしまいたい？　選びなさいな。もし知りたいのなら、わたしはあなたの力を解放するきっかけをあげる……さあ、答えなさい。どうしたい？」

答えなど、初めからひとつしかなかった。
彼らの言葉を否定するにも認めるにも、必要なことは真実を知ること。自分に知るために必要な力があるというのなら、どうして解放せずにいられようか。
「わたしは――真実を、知りたいわ」
答えた瞬間、背後で香林が嬉しそうに笑ったのが――わかった。

※

瞳が熱を帯びるのを感じる。
どんどん、どんどん熱くなる――火傷しそうな熱を感じながら、リークは普段の視界の奥に、不可視の扉があるのを認めた。
それはこれまで自在に開くことのできなかったもの。だが今ならできる……そのための力を、香林が貸してくれた。
扉の奥に何があるのか、リークはもう知っている。
願うだけで、真実は手に入る。
この瞳に宿る力はそうしたものだ。

リークは扉を開いた。
そうして彼女は土地や空気に刻まれた記憶を読み解く——求める真実を手に入れるために。

6

村の入り口の方から悲鳴が聞こえてきた瞬間、リークはすでにそこで何が起こっているのかを知っていた。

香林に導かれ、開かれた魅了眼は、多少の時差はあれど遠方で起こった事態すら読み解いてしまう。

果たして、村の入り口の方から、イズヴァンに助けを求めて数人の村人が走って来るのが見えた。

「破妖剣士さま！」

「浮城の剣士さま、どうか助けてください！」

「レイスの妖鬼が……！」

「それはもう、恐ろしい形相で……破妖剣士さま！　どうかあの化け物を倒してください！」

恐怖に顔を引きつらせた村人たちの懇願に、イズヴァンが頷くより先に、リークが声を上げ

た。

「駄目よ、イズヴァン。これはあなたが片付けることじゃない」

李枝がこの村に来たのは、自分がここにいるからだ。

自分のために、いつだって李枝は動く。自分を守るために他人を犠牲にもする。そのことを自分に隠しもする。

全部、全部自分のためだ。

だったら、受け止めるのは自分の務めだ。李枝の優しさも罪も——自分こそが終わりにしなければ。

振り返らずに、リークは香林に声をかけた。

「お願い、香林。わたしを李枝のところまで連れて行ってちょうだい」

すぐにも返ると思った答えは、しかしなかなか聞こえてこなかった。

「香林？」

「……わたしは、別にそこまでのことをあなたに求めたわけではないのよ。ただ真実を知りたいのならと……」

そのための力を貸してあげただけで、全部背負わせるつもりなんかなかったわ。

不機嫌そうなその声には、隠しきれない後悔の響きが滲んでいた。

リークがこんな決断を下すのなら、手など貸すのではなかったと思っているのが如実に伝わってくる。

「わかってる。だけど、これはわたしがつけなければならないけじめだと思うの。お願い、香林。わたしに振り返らせないで――あなたの目を見て命じるような真似をしたくはないのよ」

一度目を合わせてしまえば、浮城の護り手である香林であっても、従えてしまうだろう確信がリークにはあった。

恩人である彼女に、そんなことはしたくない。

そんな思いが伝わったのだろう――猫の目の少女が大きく息をついた。

「呆れた自惚れ屋さんでもあったのね、あなたってひとは！　まあ……ここであなたを下ろしたりしたら、とんでもない騒ぎになるのは目に見えているから、仕方ない。連れて行ってあげるわよ」

言うなり、リークの体は宙を滑り出した。

「逃げる気じゃ……」

「そうだ、あの縁魔の子供を盾にすれば良かったんじゃ」

などなどといった声が足下から聞こえたが、リークはもう気にしなかった。

「すぐそこよ」

背後の香林が告げてくるのに、ただひとつ頷いて——リークは李枝の前に降り立った。

※

李枝は少なくはない血を浴びていた。

彼女には傷ひとつない——全て誰かの返り血だ。ここまで辿り着くまでに、彼女が傷つけてきたひとたちの血に塗れた姿で、なのにリークを見るなり嬉しそうに顔を輝かせた。

「リーク！」

一片の曇りもない晴れやかな笑顔だ。

物心ついて以来、ずっと見てきた李枝の笑顔——その裏側に何が隠されているのか、自分が見ようともしなかったために彼女は罪を罪とも思わず重ね続けてきたのだろう。

優しい、優しい——自分だけに優しかった李枝。

その姿を見つめるだけで、彼女が自分のためにこれまで為してきた全てが視える。

優しさも罪も、李枝にとっては同じものだった。どちらも自分を守り慈しむために必要なものであって、それ以外の意味を持たない。

ずっとそばにいたのに、そんなことにも自分は気づかなかった。一番近くで一番長く共に過

ごした自分こそが気づかなければならなかったのに。
そう思うと、涙が止まらなかった。
悲しみと悔しさと切なさと――いろいろな感情が混ざり合って名前もつけようのない涙が溢れ続ける。
リークのそんな様子に、李枝は心配そうに声をかけてきた――相変わらず、慈しみに満ちた響きをこめて。
「リーク、わたしがそばから離れていた間に、そんなに怖い思いをしたのですね。でも大丈夫、あなたを怖がらせた悪い人たちは、すぐにわたしが懲らしめてあげますからね」
それが済んだら、一緒に帰りましょう――。
告げる内容に似つかわしくない穏やかな口調に、ますます涙が溢れ出た。
「リーク？」
「……わたしのせいなのね」
瞳が熱い――力は真っ直ぐに李枝に向かって放たれる。
「李枝……あなたがしてきたことが、今のわたしにはつぶさに視える。わたしの住む村を守り栄えさせるために、余所の土地の力を奪って村に注ぎこんだ」
結果として地力を奪われた土地では災害が多発した。

「わたしを守るために、自分より強い魔性には他の子供や場所を差し出し続けた」
レイスの近隣で魔性被害が起こったのはそのせいだ。
「そして今……わたしを取り戻すために、あなたは平気で人間の血を浴びている。みんな、みんなわたしのせいね」
ぽろぽろ、ぽろぽろ——涙が零れて地面に染みを作る。
「わたしの瞳があなたを捕らえて、わたしの存在があなたを縛った……全部わたしのせいなんだわ。だから、これはわたしがやらなきゃならないの……」
嗚咽が洩れそうになって、リークは一度言葉を切った。
「李枝、李枝、ごめんなさい。でも、わたしを守るためには手段を選ばないあなたを、このままにはしておけないの」
守護者であった妖鬼の瞳を見つめながら、リークはその命の崩壊する様を脳裏に思い浮かべた。
あとはそれを命ずるだけ——。
それで呪縛された命は霧散する。
李枝が何かに気づいたように小首を傾げた。その瞳に恐怖はない。
「リーク。わたしを殺すのですか？　わたしはもう、要らないのですか？」

「いいえ、李枝そうじゃないわ。あなたが要らないんじゃない……要らないのはわたしのほうよ。だから……待ってて。すぐにわたしもいくから」

本気だった。

この十年、近隣に現れた魔性は全て、自分を狙って来た者ばかり——それがこの先も続くのなら、自分の存在は周囲にとって不要どころか害としかならない。

それぐらいなら、いっそ——と思う彼女の心中を察したのか、李枝が大きく目を瞠り、

「いけません、リーク！　それはいけない！」

そう叫びながら、驚くべき行動に出た。

右手の爪を鋭利な凶器に変えるなり、自らの胸部に突き立てたのだ——リークはまだその命の崩壊を命じてはいなかったのに！

「李枝！」

あまりのことに悲鳴を上げるリークの前で、彼女は胸元から三つの心臓を引きずり出した。

「何をするの、李枝！」

「いけませんよ、リーク」

蒼白になった少女に、微笑みながら李枝がひとつめの心臓を握り潰した。

「李枝！」

「あなたはまだ十年しか生きていないじゃありませんか……こんなところで、そんなに幼いあなたを死なせるために、ずっと守り慈しんできたわけじゃないんです」

苦しくないはずはない——しかし李枝はそんな素振りひとつ見せずにふたつめの心臓を潰した。

「ああ、あなたにそんなことを考えさせてしまうだなんて……やっぱり要らないのはわたしのほうです。可愛いリーク……だから、死ぬだなんて言わないで、どうかあなたは生きてください」

そう告げる妖鬼の表情は、慈愛に満ちたものだった。

「愛してますよ」

それが最後の言葉——。

言い終えるなり、彼女は三つめの心臓を自ら潰した。

「李枝！」

優雅な女性の体が頽れる——だが、それは地に着くよりも先に砂と化して風に散った。

壮絶すぎる妖鬼の最期に、その場に居合わせた者は皆声をなくした。

しんと静まり返った村の入り口で——ただ少女のすすり泣く声だけが空気を震わせていた……。

エピローグ

李枝が自死を遂げてから五日後――。

リークはイズヴァンに抱き上げられたまま、浮城への道を辿っていた。

李枝の最期を目の当たりにしたイスダットの村人たちは、あまりの光景に毒気を抜かれたのか、残されたリークを害そうとはしなかった。李枝はある意味最後までリークを守っていったのだ。

しかし李枝が死んだ以上、リークがその土地に留まり続けるのはあまりにも危険だった。

そんな彼女に手を差し伸べてくれたのがイズヴァンだった。

リークが魅了眼という非常に稀有な能力の持ち主であることを両親に説明した上で、浮城での保護を申し出たのだ。

守護者を失った縁魔の子供であるリークを、両親もどうしていいのかわからずにいたのだろう、話はとんとん拍子に進み、皆の衝撃が薄れないうちに出立することとなった。

李枝を失った衝撃から未だ醒めきれずにいるリークは、イズヴァンに抱かれたままぼんやりと空を見つめている。

最初こそ香林があれこれ話しかけていたが、今はそっとしておくのが一番の薬だと思ったのか、リークの好きなようにさせていた。

寡黙なイズヴァンは言わずもがなだ。

だが、一度だけ、彼が少女に話しかけた時のことを、香林は忘れない。

茫然自失の状態にあるリークに、彼はこう語りかけた。

「香林に聞いたんだが、魔性というものはいくら魅縛されたところで、自死を選ぶことはないそうだ」

自死という言葉に、リークがぴくりと反応した。

イズヴァンは構わずに淡々とした口調で続けた。

「あの妖鬼は、本当にお前のことを自分の命よりも愛していたんだな」

少女の瞳から、一粒涙が零れ落ちる。

男はさらにこう告げた。

「魔性は美しく力ある者を愛するそうだ。稀有な魅了眼を持つお前は、これからもきっと様々な魔性に深く愛されることだろう。そいつらが愛し方や守り方を間違えないように、教え導く

のはお前の役目だ。そのためにも、お前は多くの者と交わり、多くのことを学ばなければならない」

この言葉に、リークははっきりと反応した。

「……浮城へ行けば、わたしはそれを学べるのね……？　ならば、わたしは浮城へ行かなければ……そうして生きていかなければならないわ」

李枝が最期にたったひとつ願ったことなのだから。

ぽつりと呟いた少女の頬に、新たな涙が零れることはなかった――。

※

リークの愛称で魔性に親しまれた少女チェリクは、こうして浮城の門をくぐった。

彼女が最強の魅縛師として名を馳せるのはこれより数年後のことである……。

あとがき

この本が発売される頃には、梅雨も明け夏本番となっているかと思いますが、皆様如何お過ごしでしょうか。

こんにちは、前田珠子です。

破妖の剣『鬱金の暁闇』第六巻をお届けします。

が……アーゼンターラと藍絲の対決は実現しておりません。次巻持ち越しとなりました。

いえ、プロット段階でふたりの対決は一冊でおさまらないことは判明していて、二冊になるのはわかっていたのですが、今回本当に踏ん張れなくて申し訳ありません。

貧血を軽く見てはいけませんね。

体調を万全に戻して、引き続き第七巻に取りかかります。今度こそふたりの対決をお届けできるかと思いますので、今少しお待ちください。

今回収録されている中編は、雑誌に書かせていただきましたチェリクの子供時代の外伝です。

妖鬼に育てられた同然のチェリクが浮城に引き取られることになる話です。

イズヴァンは浮城での彼女の保護者となります。若すぎるお父さんはこの先も外伝で登場す

ることと思います。そしてまあ、いろいろあってチェリクはパパと出会うことになるのですが、いずれおいおい書いていく予定です。

少し前になりますが、我が家の猫が生ける宝石と呼ばれるオオルリの雄を咥えて部屋に持ち込むという珍事がありました。

窓硝子にぶつかって、脳震盪を起こしていたところを猫が発見して持ち帰ったものと思われます。気絶していたのが逆に幸いし、猫に嬲られることなく、ほぼ無傷でした。隣に住む姪に（小鳥を飼っているので）保護を頼んだところ、夕方には元気に山に帰って行きました。

自然豊かな環境ならではの、実に珍しい出来事でした（笑）。

今回もイラストの小島榊さんをはじめ、関係各所の皆様には大変お世話になりました。この場を借りてお礼申し上げます。

読んでくださる皆様――あまり間を空けず、第七巻をお届けする予定です。お待ちいただければ幸いです。

それでは――。

平成二十二年　夏

前田　珠子

※この作品はフィクションです。実在の人物・団体・事件などにはいっさい関係ありません。

この作品のご感想をお寄せください。

前田珠子先生へのお手紙のあて先

〒101－8050　東京都千代田区一ツ橋2－5－10
集英社コバルト編集部　気付
前田珠子先生

まえだ・たまこ

1965年10月15日、佐賀県生まれ。天秤座のB型。『眠り姫の目覚める朝』で1987年第9回コバルト・ノベル大賞佳作入選。コバルト文庫に『破妖の剣』シリーズ、『カル・ランシィの女王』シリーズ、『聖獣』シリーズ、『聖石の使徒』シリーズ、『天を支える者』シリーズ、『空の呪縛』シリーズ、『ジェスの契約』『トラブル・コンビネーション』『陽影の舞姫』『女神さまのお気の向くまま』『万象の杖』『月下廃園』など多数の作品がある。興味を覚えたことには積極的だが、そうでない場合、横のものを縦にするのも面倒くさがる両極端な性格の持ち主。趣味と実益を兼ねてアロマテラピーに手を出したものの、今ではすっかり実益のほうが大きくなり、趣味とは言いがたくなりつつある。次こそは優雅な趣味を持ちたいと身の程知らずにも思っている。



——破妖の剣　6——
鬱金の暁闇 6

COBALT-SERIES

2010年8月10日　第1刷発行

★定価はカバーに表示してあります

著者　前田珠子
発行者　太田富雄
発行所　株式会社 集英社

〒101−8050
東京都千代田区一ツ橋2−5−10
(3230)6268(編集部)
電話　東京(3230)6393(販売部)
(3230)6080(読者係)

印刷所　大日本印刷株式会社

© TAMAKO MAEDA 2010　Printed in Japan
本書の一部あるいは全部を無断で複写複製することは、法律で認められた場合を除き、著作権の侵害となります。
造本には十分注意しておりますが、乱丁・落丁（本のページ順序の間違いや抜け落ち）の場合はお取り替え致します。購入された書店名を明記して小社読者係宛にお送り下さい。
送料は小社負担でお取り替え致します。但し、古書店で購入したものについてはお取り替え出来ません。

ISBN978-4-08-601433-5 C0193


破妖の剣 外伝
珠玉の超(スーパー)ファンタジーに酔いしれよ!!
言ノ葉は呪縛する
義父レンバルトを密かに想う少女リエンカ。ある夜、レンバルトの秘密を知ったリエンカは…!?
紅琥珀(こうこはく)
異形を仮面で隠した人々が棲むアルバワヌの里で、逃走中のラスと闇主は…!?
前田珠子
イラスト／小島 榊
好評発売中 コバルト文庫

9784086014335

ISBN978-4-08-601433-5

C0193 ¥467E

1920193004670

定価 本体467円＋税



コバルト文庫

母チェリクの導きによって、ラエスリールが遂に永い眠りから覚めた！　そして、第六の妖主・雛の君の目論見がつまびらかになっていく――。一方、破妖刀「紅蓮姫」の現・使い手であるアーゼンターラは死闘の末、心身ともにボロボロになりながら、紫紺の妖主との決戦地に踏み込んでいく。そして、世界の揺らぐ気配に気づいた乱華は、必死に緋陵姫を守ろうとするのだが――!?　怒濤の展開！